

てする能はざる所、彼れは所詮器械的に勞働して其の生計を爲さざるべからず。然れども詩歌は其の理想、これ將た捨つるに忍びず、こゝを以て、日々に農車を押しながら、常に其の愛する詩集を讀みぬ、就中蘇國の古謠を玩味し、夜に入れば家に歸りて破窓の底屢々これを回讀して、靜かに其の詩思を凝らし、其の詩形を琢けりき。彼れはかゝる境遇にかくの如くにして人となりしかば、後に社會に立つに及びて富豪權門を畏敬せずして常に弱者賤者に同感し、之れを保護するを以て任となし、且つ全力を盡くして惡習俗を攻撃し、教會を批難し、又所謂文明的生活を罵りき。其の筆鋒の銳利なる、往々にしてルッソー、デルテールを凌がんとせり。かくて絶對の平等主義を主張し、人生の尊卑は其の位階にあらずして本性にありとなせり。其の有名なる句に曰はく、如何やうなる有様にありとも、人は人なり、美服は裁縫師之れを造り、官爵は式部寮之れを製る、所詮位階は貨幣の印章、人こそは黄金」と。彼れが平等の同情は、畑の鼠、路傍の雛菊にさへ及びき、否、彼れは惡魔をすら不幸なる同僚をもて視若しくは形相の醜き豎子と見做しき。

一千七百八十五年“Jolly Beggars”を公にす、是れ、バアンスが傑作の隨一なり。種々の

乞食の亂醉戲謔せる言動、描き得て睹るが如く、筆々躍動す、シェイクスピア以後稀に見る所の劇詩的の神筆と稱すべし。バアンスが作は尙單純なる抒情詩中に一讀三歎すべきもの夥多あり、而も其の筆致は何れもよく其の天真朴直なる精神を現む最も創新を以て勝る。按ずるに、十九世紀の後半期より古法舊格を準繩とするは次第に廢れ、一に誠實なる自家の情感を本とする風起これり、而してバアンスの如きは實に先づこの方向に馳騁したる隨一人なりき。彼のウイリヤム、フレック、ウイリヤム、クーバア等の如き亦た然り。バアンスの詩は、自由に野語、俚言を混用し、殆ど日常の會話と一般、最も嚴格なる思想の間にも滑稽の文字を雜へ、最も悲哀なる處にも間々卑俚の謔をまじへたり。

以上革命思想の誘導者としてのバアンスが生涯の大略なり。テューヌは曰く、時運に先だつものは常に悲境に陥るを免れず、バアンスは實に其人にして、時世は未だ彼れに及ばざる事四十年なりしなり」と。而てカーライルは曰く、バアンスをして若し相當の家に生れて相當の教育を受けしめば、彼は立ち所に英國文學の趨勢を一變せしならんと。カーライルが此語はバアンスを過重せる嫌あり、而も彼の時代

の力を過重して、個人の力を輕んじたるテ、イヌが前説の短を補ふに足るべし。パ
 アンスは中ごろ大に名を知られて一時は好地位を得たりしかど、又忽ち地位を失
 ひ、貧困の中に其の生を終へき、時に一千七百九十六年、齡僅かに三十八なりき。
 當時英國に於ては保守主義尙依然として勢力を有し、專制的政治も尙深くは忌ま
 れずして、むしろ國民の保護者として歓迎せられ、一般の人民は政治界に事なくし
 て天下の太平なるを謳歌したりき。彼の教會の如きも其の積弊小少ならざりし
 にも係らず、尙ほ道義の支柱として多數の國民に尊奉せられ、未だ遽に瓦解すべく
 も見えざりき。されば所謂自由、平等などいふ革新主義は、輿論の嫌惡擯斥する所
 なりき。彼の聰明なる宰相ピットの如きすら、政界上の理由ありきとは雖も、痛く革
 新の風潮に抗し、佛蘭西革命を目して、宗教を滅絶し、社會を破壊する暴舉なりと詈
 りし程なれば、俗論の之れより甚しきものありしこと推して知るべし。
 状態かくの如くなりけれども、世界の大勢は到底長く拒む可からず、革新の氣運は
 いつしか變相して英國に潛入せり。固より佛蘭西若しくは獨逸にての如く、全國
 を振盪する底の勢力をば醸さりきと雖も、最初先づ文學に入りて其の文致と好

尙とを變動し、文致、好尙の變化すると共に、思想上、感情上、道念上、風俗上に於ける其
 の他の革新を促し來たれり。蓋し、社會上、政治上に自由と革新とをほしいましに
 する能はざりし不平は、隱然破裂して文學上に於ける革新となりしなり、故に近世
 に於ける詩學上、文學上の改革は英國を以て最先となすべし。さて、所謂文致上の
 革新は、そも何れの邊よりか行はれし。左に先づ第一にその方面に力を盡くし、
 一抒情詩人の閱歷を略叙せん。

文學に平等の主義を持して革命思想を鼓吹せしものは、已にパアンスあり、而して
 文致の上に舊檢束を解脱して自由創新の軀を起すことの第一着歩を進めしもの、
 之れをウィルヤム、クラーバアとす。

ウィルヤム、クラーバア或はカウバアとも稱呼すは一千七百三十一年に生れき。爲
 人小膽、多病にして物に感じ易き性なりしが、六歳母を喪ひ、早く世の辛酸を味へり。
 さて、さらぬだに悒鬱なりし彼れが性を、更に甚しく殘ひしものは、其の幼うして入
 りし學校なり。當時の學師等は學童を罰するに、毎に鞭撻を用ひ、且つ年長の生徒
 等は常に幼弱を虐遇せりき。クラーバアの小膽にして多感なるや、此等虐待の爲に

痛く神経を刺衝し、やがて精神病を惹起し、習ひ性となり、終生懊惱としてまた樂むこと能はざりき。長じて後、伯父某の傳手によりて上院の書記官たりしが、彼れ其の勤務に堪へずして煩悶苦惱し、就中其のはじめ考試場に立出でんとせし折の如きは、恐怖厭嫌の餘り、殆ど自殺せんとなしきといふ。其の後、牧師アンソン夫妻の厚意によりて其の家に寄寓せしが、素より言行に露ばかりの表裏なき小心謹直のクーパーなれば、深くアンソンの妻女に愛せられ、交誼殆ど眞の姉弟の如くなりき。されど悒鬱は暫くも去らず、無垢清淨なる身心をも自ら責むると極めて厳しく、常に我が罪障の深さを畏怖し、神に愧ぢ、神を怖るゝこと、彼のバンヤンと相似たりき。かゝる性質なれば、其の詩歌を作るや、譬へば鬱慰の爲に琴を奏し、繪を物するに同じく概してその悶を散せんが爲のみ、功名の念などは絶えてなかりき。且つや彼れが满腔は悉く是れ詩歌の雅情、詩神は常に其が頭に宿りき、遠く題を求めて思を構ふる要なかりしなり。テリーヌはクーパーが作を稱へて曰く

これに由りてこれを觀れば、吾人はもはや希臘、羅馬に旅行するを要せず、古詩歌を研究するを要せず、詩歌に美なる材料は全く吾人の周圍に充滿せり、宇宙の萬物は盡く美なり。之れを認むるものは心なり、唯夫れ心なり、故に吾人はもはや舊法格を墨守する要

なきなり。是に於てやクーパーの作の如きもの起る。

と。蓋し、模せず、飾らず、單に「誠」を以て優る者はクーパーが詩歌の特質にして、サウシーをして、此の詩篇に比ぶれば、如何なる名作も天然の山水に比較せられたる庭園の如しと激賞せしめたるもの是なり。

彼れは又一定の理想若しくは主義を立て、之れによりて進退するやうのこともなく、只ありのまゝに其の感想を叙せしのみ、求めずして湧き出づる自然の感想を抒せしのみ。是れ其の詞句の活動せる所以也。彼れは英國に於ける一大桂園派の詩人なり、但し嘗て敢て論辯して自家の主義を唱道せしことなし。否、思想上よりいへば、彼れは寧ろ保守的なり、改革の主義など抱きしものにあらず。詩歌は「誠」を旨とすべし、法格に泥むべからずといふことを、表だちて唱へしは、所謂ローマン派、就中湖畔派の詩人、すなはちサウジ、ウオヅ、オス等にはじまる。

クーパーが作のうちにて最も名高きは『タスク』と題する長篇の詩なれど、可憐なる佳什は間々其の小品の中にもあり、例へば、彼のアンソン夫人の家にてものせし滑稽の作『ジョン、ギルピン』の如きは、永く愛誦せらるべき佳什なり。蓋しクーパーは悒

爵の性を有しながら、不思議にも滑稽の才を具へたりき。

第一章 ローマン派

ローマン派の由来——新思潮の二大派——史詩派の特質——其の代表者——
サウジの諸作——スコット——其の諸作——韻語——小説——スコットの長短

さる程に文學革新の機運漸く熟し、一千七百九十三年の頃に至り、所謂ローマン詩派英國に興りたり。此派の由来、主義及び影響は、其長所、弱點と共に獨逸、佛蘭西の同派に類似せるものにて、其の興起せし初めに於ては、詩界の異端をもて目せられき、されど彼等は少しも屈せず、盛に作し、大膽に論じ、親密に結托して舊派を駁撃せり。按ふに、此の派の起りしは、當社會の固陋腐爛、到底頼むに足らざるを憤慨せしに基く、されば其結果の文學上にのみ顯れしに拘らず、社會の非を攻むるの意彼のルッソーが非文明主義の議論に髣髴たるものあり。されば其の主唱者の一人たるサウヅーは、其の新主義を實行せん爲めに屢、激烈なる政黨員と交り、「ウォト、タイラア」といふ劇詩を作しては、暗に革命を鼓吹しき。又同じく其一人たりしコールリッチは、口に筆に、之れを唱ふるをもて足れりとせずして、進んで同志と共に亞米利加

に航し、國王、僧侶の專横を受けざる一理想的共和國をさへ建立せんと空想し、遂にはユニテリアン教會に入りて一種の神祕説を唱説するに至りき。後には隱君子と見做されたりしウォヅオゾオスだに、其の尙壯なりしや、此氣運に煽られて革命を鼓吹し、國王を罵り、「sceptred child of clay」と激語せりき。然れども英國は所詮英國にて、着實を生とする國柄なれば、革命の急潮も早晚抑止せらるゝに至らざるを得ず。年壯氣鋭なりし三詩人すら、いつしか前説の行ふべからざるを覺りて、次第に着實に戻り來たりし程なれば、其他の追隨者は自然に其勢ひ挫けたりき。

されども、此等革新思潮の爲に、尠くとも文藝上の賞玩力は著く進歩し、彼等は明かに十七八世紀の作に模倣するの愚なるを知り、遠く學藝復興時代と中古時代とより其の醇粹なる模型を取らんとせり。是に於てや、盛に埋没せる俚謠、俗歌を研究し、諸外國の古詩、古謠を蒐集し、其の清純なるを激賞し、其の無邪なるをもてはやし、漸く詩風を革新し來たりぬ。彼等は戮力して貴族的纖巧と能辯的綺麗とを攻撃し、卑言、俗語豈に忌むべけんやと唱へたり。されば其の調格、韻律の如きも、或は十三世紀の韻律に依り、或は十六世紀のを用ひ、而してコールリッチ、サウジの如きは

純然たる新式を創造しき。此の大紛亂は竟に二大詩派を生じたり、一を(テームに從ひて)歴史派ヒストリカル・スクールとし、一を哲學派フィロソフィカル・スクールとす。歴史派は彼のローマン派と同じ流れにして、哲學派は其の支流なり。前者の著なる者をサウジー及びスコットとし、後者を代表せるものをウオヅフォス及びシユリーとす。而して此の二派の起りしは、ひとり英國のみならず、佛、獨共に同様の詩潮を現じき、時勢の然らしめし所なり。

史詩派(ローマン派)の或は意識して陽に、或は半無意識にして陰に主唱せし所に曰はく、理想は時代と共に變遷す、今日の理想は到底明日の理想にあらず、將た昔日の理想にあらず。今日見て醜となすものは、古蠻人若しくは封建武士の見て美となし、ものにあらずや。されば古への美を描きて樂まんとする者は、身古人となりて、彼れ等と共に無智ならざるべからず、彼れ等と共に殺伐ならざるべからず、彼れ等と共に情に脆からざるべからず、彼れ等と共に魑魅を畏信せざるべからず、彼れ等と共に熱帯に住し、或は城堡に籠らざるべからず。豫め理想を設けて寫描の上に古人を左右するは大なる誤謬なり。外國人を寫す亦然り、要はたゞ己れが一時、一處の理想を尺度として人を裁斷せざるにあり。古人愚なり、蠻人野なり、而

も竟に其の事實たりしを奈何せん。詩人の筆は過去の美を寫し、異境の美を狀すれば足る、是非を加ふるの要なし。汝の成心を没却せよ、汝の主觀を没却せよ、これ眞を寫さんが爲めなり、以て汝の見識を損ずるにあらずと。

史詩派の主義の實現せらるゝや、考古の風あらゆる美術の上に流行せり。彼の獨の大詩人ゲーテが作の如きは實に此の派の率先たり、彼れの想像の普遍にして平等なるや、描寫今古に涉り、同感東西に通じたり。さもあれ第二流以下の諸作家は、只徒らに往時を回顧し、風俗、人情の擬古を事とし、臆斷穿鑿、却りて詩の眞に背けるもの比々、こゝに於て讀詩社會漸く倦み、以爲へらく、所謂史詩は到底古記録の質實なるに如かず、擬古の俗謠は所詮眞成の古謠に如かず、過去を知らんとせば須からく詩人を去りて史家若しくは批評家に聽くべきなりと。

此の派の中には佛人に似て快活なりしトマス、ムーアあり、古劇を復興せんとせしチャールズ、ラムあり、批評家、思索家にして詩人を兼ねたりしコーリッチあり、教誨の旨を歌ひしカムベルあり、中にもサウジーの如きは其の率先者の隨一なり。

ロバート、サウジー(一七七四—一八四三)は天資穎敏少うして幾多失行あり、蹉

跼落魄を経て名を詩壇に著し、所謂貴族的、虚飾的、の勁敵となりぬ。學博く、作多く、想像に富み、議論に長ぜり。其の詩論の斬新なると、毎に作に序して辯論すると、其の奇異なる事物を寫すに巧なるとは、稍々佛の詩人ユーゴーに似たり。案ずるに、ローマン派に屬せりし英才はサウジー以下數十人を數へ、おの／＼其の質を殊にすと雖も、畢竟、皆史的詩人、或は太古に、或は中古に、或は印度に、或はヘルシヤに、材を宇宙の八隅に求めて、縦横に描破を試みたれど、概ね皆皮相の模寫、要するに燦爛たる極彩色に俗眼を眩せるのみ、眞眼ある者は竟に其の擬作たるを看破せざる能はず。彼等の表はし、光景は、樂劇(オペラ)能く之れを代表す。但見る、正面の舞臺金碧燦然、巍々乎たり、ゴッス風の大殿堂、うるはしきかな淡紅の玻璃窓は夕陽と相映ず。彼方を詠むれば、紅紫妍を闘はする後園に、噴き出づる玉泉、夏尙秋の如く、此處に蓮歩を移す楚々たる麗人の一群、今や愀然として登場す。忽然として現はる、國王、何の意ぞ、虐遇かくの如く、殘なる、已にして一個の烈婦あり、突如王を斃して自ら刎ね。劉曉たる糸竹、金石、或は離れ、或は合し、哀しむが如く、訴ふるが如く、觀る者夢みるが如く、醉へるが如し。幕竟に下る。何等華麗の光景ぞ。目爲めに眩し、耳しばらく

聳して、場を出づれば、其の心裡に殘る所は何物ぞ。宛然我が淨瑠璃劇を觀たると一般邯鄲の一睡、俄然として驚き、身の夢幻境にありしを知るのみ。是の如きは是れムーアが『ラ、ルーク』サウジャーが『ロリック、セラスト、オブ、ゼ、ゴッス』を始めとして、當時の諸史詩が讀者に與ふる印銘なり。而して英國讀者の實を悦ぶや、かゝるたゞひの史詩を讀むにだに多く考證を欲せしかば、史詩家は次第に邪路に入りて、おの／＼考證に力を盡くし、遂には其の作に註脚して夥しき典據を援引するに至れり。甚しきに至りては、殆ど詩歌の本領を忘れ、詩によりて正史上又は地理上の知識を與へんと企て、事件、性情の發展を餘所にして、徒ちに穿鑿考證の精を誇りき。テ、又これを嘲りて曰はく

自家を全く史詩中に置きて自ら過去の人間となるは、史詩に成功するの要件にして、ローマン派の本領實に此處に存す、ハイチの印度を描き、ゲーテの希臘を寫して成功せしは、全く此の妙機を得たりしに由る、而もこれ傲慢にしてひとり自國のみ美なりとせる英國人の爲す能はざるところ云々。

と。サウジャーと共に此の派に屬して其の著なるものと見做さるゝは、史的詩人兼史的小説家ウォルター、スコットなり。

ウォルター・スコットは小説家、歴史家、批判家及び詩人を兼ね、其の作全歐に愛玩せられ、一時其の名聲アルテールを凌ぎ、殆ど散文のシェイクスピアをもて目せられき。一千七百七十一年、八月、スコットランドなるエジンバラに生まれき。生まれて十八ヶ月にして右足跛となりければ、療養の爲め地方の親族に養はれて三年を過ごし、齡八歳に至るまでは學舎に入らずして田圃の間に年月を送りき。此の間、日々歴史上の物語を聞き、若しくは俗謡を誦することに耽りき。後ち高等小學に入り中學に轉ず。學舎にあるも、常に他の課には心を留めて、専ら史談を貪讀し、夙にアリオスト、サアヴンテス等、古作家の傳奇に通ぜり。後ち法律を學び十九歳にして父を助けて公務に従ひしが、暇を得る毎に史跡を探究し、蘇國の舊地を跋涉せしこと前後七回、北蠻が凶暴の跡、英雄が苦戰の蹤を詳にせり。是れ皆後年に至りて彼が史詩歌の材となりき。一千七百九十六年、始めて獨の名作二篇を翻譯し、續いて數篇の自作あり。一千八百五年、公然創作家として文壇にあらはれたり。此の年“*The Day of the Last Minstrel*”を著す、之を其世に知られたる史詩の處女作とす。同八年“*Marmion*”世に出て同十年には“*The Lady of the Lake*”出でたり何れ

も彼れが韻語の名作なり。同十一年より十七年に至るの間“*The Vision of Don Roderick*”“*Rokeby*”“*The Lord of the Isles*”“*The Bridal of Triermain*”“*Harold the Dauntless*”の五篇(何れも韻語)を作せしが、一作毎に萎靡の姿あり就中『ハロルド』の如きは著く氣魄の銷耗を示せり。此時に方り、バイロン新に大陸より歸り、英氣勃々、續々雄勁の作を著し、名聲旭日の上るが如く、就中其名作『チャイルド・ハロルド』いで、後は殆ど全詩壇に覇たりき。これが爲にや、將た他に事情ありてか、スコット筆を詩壇に絶ちにき。かくて一千八百十四年はじめて史的小説に筆を着け、忽然として未曾有の功を成しぬ。傳によれば、此の事たる偶然の些事より起りしものゝ如し。曰く、此の年春、スコット何がな好詩材を得んと欲して、ふと手箱を探りけるに古き反古の中より一千七百四十五年中に興りし氏族の由來を覺え書きにせる物を得たり。是れ彼れが數年前の手記にして、完結するにも及ばず打棄て置きしものなり。之れを回讀するうち、偶々興來たりて禁むべからず、乃ち之れを種として散文の物語を終る、六週にして首尾悉く全し、すなはち“*Waverley*” (又の名『最近六十年物語』)と題して試みに世に出だしけるに、江湖の歡迎殆ど空前とも稱すべかりしかば、また

直ちに“Guy Mannering”“The Antiquary”など陸續同様の物語を著し、引續き同十六年より十年間に於て、都合十七篇の作を物したり、云々。

然るに、一千八百二十六年に至り、彼が關係せる出版會社倒産し、無慮十一萬餘磅の負債を生じぬ、義理がたき彼は之れを償はんとて、晝夜精勵、四年にして“Woodstock”“Anne of Geierstein”“The Fair Maid of Perth”“Count Robert of Paris”“Castle Dangerous”“Napoleon, Bonaparte 傳”等を著し、其内の七萬磅を償還しき。されど驚くべき精

根もこゝに盡きて、最早筆を執る事能はず、即其の身神を養はんが爲に大陸の漫遊を企て、一千八百三十二年の夏時の政府の特に彼が爲めに仕立てし船に上りて以太利に遊びぬ。されども時既に晚くして恢復を望むべからず、彼れはた死期の近きを知りぬ、同くは故山の土とならんとて急に本國に歸り、後二ヶ月、靜寂なる秋の日の傾くと共に、家族に圍繞せられて靜に他界の人となりぬ。齡六十二。

スコットは好古の作家なりき、起居、衣食住、遊戲、嗜好、殆ど皆其の好古癖に因せざるはなかりき。其の畢生の目的は封建的家族の祖となるにありて、其の著作に従事せしも一分は此の史的生活の理想を實現せん爲めなりき。されば其の作によりて

得たりし財もて或は封建風の第宅を營み、或は其所に客を集めて屢、封建風の盛宴を開き、或は共に山野に獵しき。即ち文學は彼れに取りては第二位のものたるに過ぎざりしなり。アインホールド曰はく、革命思想の全歐を振蕩せし時に方り、スコットの獨り之れに冷然たりしは、彼れが常識の豊かなりしと好古癖の盛なりしと社會的改良よりは家庭的和樂を重んぜしとに由ると。

『湖上佳人』『マーミオン』『島の君』(以上韻語) “Fair Maid of Perth” “Old Mortality”

“Ivanho” “Quentin Durward”の如きは、何れも皆彼れが名作、時人は、上下内外を問はず、争うて之れを繙讀し、爲めに寢食を忘れしものあり、殊に佛國に於いては其の發賣高百四十萬部の上に出できといふ。然れども、今の進歩せる讀書眼を以て嚴密に之れを品隲すれば、此の大史詩家の諸作とても、只はづかに過去の皮相を寫せるものと稱すべし。服裝、地理は精確なりと雖も、人物の動作、言語は大概して佳なりと雖も、最も肝要なる感情、理想は、往々にして封建期の蠻風にはあらず、動もすれば近世的文明の思潮を暗示す。蓋し、スコットはゲーテと異なり、過去と同化して其の神を捕へ得る底の作家にあらず。彼れの尤も好みし所は過去の風俗なり、出來事な

り、武士の氣風なり、古雅の器具なり、其の過去の天地を描いて其の神に入る能はざりしは、亦た止むを得ざる結果なりき。

スコットは爲人温厚篤實、父として良父たり、夫として良夫たり、道念堅固の清淨教徒たり、誠忠無二の保守黨たりき。まかも惜むらくは、こは却りて彼れをして自在に其の作中の人物に同化する能はざらしめし所以なりき。彼れが作中の封建諸侯の髣髴近世の知事の如く、又其の會長の近世的紳士の如く、又其の武士、農夫、少女等の同じく近代の色臭を帯べる、恐らくは此の高雅純良の性の故ならん。彼れが作中の人物は、決して中古期に普通なりし殺伐、無風流の野人にあらず、理を解し、義を重んじ、且つよく文明の禮法に嫻へり。加ふるに、作者の筆雅に過ぎて自ら中古期を醇化せる趣あり、故に史的寫實を以て彼が作の質とするは當たらざるべし。

ハットン曰はく、「スコットが小説の特質は個性の描寫にあらずして、公衆の生涯を寫したる點にあり。吾人が讀みて快とするも、私人が個性の發揮せられたる點にあらずして、諸階級類性の人物が社會若くは一國の事に與る行動の寫されたる邊にあり。……彼れは勇敢洒脫なる近代の士風を移して直ちに古代のものとなせり。其

新舊教徒、武士、猶太人、チャロビン黨、海賊、教師、傭兵、乞丐の徒何れも近代のものにあらざるはなし、但し、その叙狀の精細なるに至りては優に古今獨歩といひつべし」と。彼れは驚くべき健腕の作家なりき。意の赴く所筆これに從はざるはなく、紙に臨めば千言万句立地に成り、精細迂曲の事を叙するに當りても稿を修めず、而も流麗暢達、毫も滯滞の痕なし、時にたゞ冗漫の失あるを見るのみ。

要するに、スコットは其の生國スコットランドの盛飾たる。蘇國人の諸特質は、殘る所なく、其の筆に寫され了んぬ。其の節儉や、忍耐や、其の狡智や、其の貨殖や、其の生活に慈ならざる風土、氣候や、其の奇事や、其の史跡や、皆彼れが如意の筆に上りて廣く世界に傳へられき。實にスコットランドはスコットの詩文の土なりき。

ウエルシ曰はく

スコットを以てウオオプ、チオス、シエリ、パイロン等に比すれば、宇宙の神秘を感得する力は、實に劣りきと雖も、其の結構的、想像力、換言すれば個人の偏見を脱して全人間の生活動作を現はす包括力に至りては、確かに彼等に優りたり。洞察、同感の妙機は彼れ未だ完うする能はざりきと雖も、よく他を現寫し、實を醇化する手腕は、直ちにシエイクスピアの壘を摩す、但し深大の分析は望むべからず、性格及び光景の描寫はた比較的に膚

淺なり。彼れは其の深底に達するの伎倆なし。彼れが寫せる世界は、眞に差別平等を貫ける世界にはあらず、遙かに傾ける封建の入口に照さるゝ現今の世界ともいふべく、開化せる現今の風を受けて大に粗野の度を失ひたる中世の世界ともいふべし。然れども其の物語の筆致の精緻巧妙なるに至りては、古今之れに及ぶものなし、特に風景を叙するに當りては、其の豊富なる詞藻を傾けて之れに注ぎ、生氣全章に溢れたり、其の健筆、其の精進、亦た等しく得難き所、云々

よくスコットが長短を盡せり。彼は實に君子人の資質ありき、其性質の溫和なるや如何なる悪人を描くも無情に其の非を暴露するなく、多少美むべきの資質を附與せり。此の寛大は頗るアチソンを諷諧に似、又慈心深く正直なる所は希のホームアの脈を有せり。さて彼が創始せし風俗を寫すを主とする物語の脈は、其存生中より稍、一派をなさんとする傾きありしが、オースチン、プロンテ、エリオット等の諸閣秀及びサッカレー、 Dickens の諸作家を経、その遺風盛んになりゆき、同種の作相ついで世にいてたり。此派は後に至りては大いに勢力を得、許多の俊才輩出しき。

以上略述せるローマン派の特色は二あり。曰はく寫實的、曰はく道德的、是れなり、共に實際的なる英國國民の特質より生じたるものに外ならず。唯、夫れ寫實的

なり、故に學藝復興時代又は十七世紀の大想像力に駕する能はず、且つ其の作し、翻案するや、兎もすれば狹隘なる結構を準として、徒らに衣服、言語、地理等を穿鑿せり。唯、夫れ道德的なり、故に利用を忘るゝ能はず、詩を以て現世を益すべきものとし、詩の用は徳を彰し、惡を懲し、敗を矯め、悶を慰するにありとなせり。是れローマン派の詩人が後代に與へたる非なる影響なり。而も其の是なる側を觀れば、明かに詩道擴大の一媒たりき。利弊は相隨ふ、豈其の失をのみ咎むべけんや。

第三章 哲學派

哲學詩派の特質——英國の哲學的詩人——ワオグゾチオスの傳——其の詩論——其の特質——諸家の批評——『エキスカアション』——シエリー——其の閉歷——其の特質——其の革新思想——其の諸作——十九世紀の二大勢力

一方に於てローマン派即ち史詩派の興隆せしと共に、他方に於て哲學の趣味文學に入りて**哲學派**とも名づくべき一詩派獨に起りき。哲學派の名稱はテームの造れる所未だ妥當なりとなす能はざれど、姑く假りて總稱とす、或は理想派と稱するかた可ならんか。此の派に屬する者も、初めは尋常の詩人にして、理論家を兼ね

たりし所、其の特色なりき、即ち作するに先だちてまづ詩の本領を論じ、若しくは其の作の序文中に自家の主義を辨じ、或は新詩形の是非を説けり。然るに、必然の結果として、此の理論的傾向は次第に其の内容に透入し、彼等の詩歌に上る所は概ね哲學的趣味を帶べりき、例へば、真理、絶對、人間、罪業などいふ主題是れなり。彼のゲーテの如きは、此の側より見るも、率先者の大なる者にして、其の傑作『ファウスト』は、實に此の派の代表たり。而して此の哲學的傾向は轉じて他の美術界にも入り、音樂、繪畫、彫刻等皆其の氣脈をあらため來たりぬ。

さて此の哲學思想のはじめて英國に入らんとせしや、英と獨とは其の性を殊にせるが故に、多少の凝滯なき能はざりき。蓋し、英人の自尊なるや、當時の獨國をもて劣等の國となし、特に其の詩人を輕視したり。されば、半は好奇心より、半は排革命的同情より、獨の異様なる俚謠を歡迎し、劇詩を翻譯せしとはありしも、國民の偏執と宗教の差異とが藩屏となりて、眞に相融會する能はざりき。例へば、彼のコールリッチは、頗る獨逸的氣脈を承け、熱心に新思想の鼓吹に従事せしが、現實主義の英國民は之れが爲に動かさるゝ色なかりき。されども大勢は竟に拒むべからず、此の

W. Wordsworth.

哲學的精神いつしか英國の詩壇に潜入し、シルレル、ゲーテをこそ出ださざりければ、彼のウオヅチオスの如き、シェリーの如き一種の新詩人を養成しき。

其の詩題の斬新なる、其の思想の温雅なる、其の觀念の深遠なる、其の詩人の天職を意識せる等の點に於て、英國詩壇に空前なる者をウィルヤム、ウオヅチオスとなす。一千七百七十年四月、カムベアランド州なる一村コッカアマウスに生る。其の父は狀師なりき。八歳母を喪ひ、九歳にして小學に入りしころは、やゝ長閑なる月日を送りしなるべし。小學に在りし時『夏の休暇』といふを作りき。是れ最初の作詩なりといふ。十四歳父を喪ふ。かくてさらぬだに富有ならざりしウオヅチオス家は家計困難となり、同胞家族離散流浪するの悲境に陥りぬ。一千七百八十年(十八才)叔父某の厚意によりてケムブリヂなる大學に入りぬ、されど學課に潜心せずして専らチーサー、スペンサー、ミルトン、スプフト等の詩文を研究し、且つ伊太利語を修むるに餘念なかりき。業を卒ふるの前、僅かに二十磅を懐にして大陸漫遊の途に上りぬ、恰も佛國革命前數年なり。到る處自由平等に聲かまひすしかりしかば、氣鋭年壯なるウィルヤムは鋭く其の心を刺戟せられ、宛然新生命を見得たるが如き思

ひをなし、無限の希望と感慨とを懐にして國に歸りぬ。一千七百九十一年、業を卒へて再び大陸漫遊の途に就き、ロンドンよりパリ、オルレアン、プロア等を歴遊しき。今や佛國革命は其の頂に達せり。國王は弑せられ、秩序紊亂し、狂黨妄に權を弄し、殘暴至り極まれり。ウオヅヲオスは其の豫期と希望との殆ど全く破了せられたるを見て、慨然として歸途に就きぬ。歸り來たれば、生計選擇の必要はたゞちに其の眉を焦さんとせり。すなはちまづ舊稿の詩篇を梓す、然れども新聲俗耳に入り難く、得る所急を救ふに足らず。然るに幸ひにも信友カルヴァートといふ者あり、死に臨みて遺産九百磅をウイリヤムに譲り、切に其の屈せずして詩人たらんことを望みて逝きぬ。ウイリヤム大に感奮し、こゝに始めて詩の爲めに命を賭せんと決心し、其の妹ドロシーと共に、居をリースタウンにトし、潛心詩の事に従ひぬ。ドロシー亦兄を助けて頗る瘁勵する所ありき。後ち新詩人コーレルリッヂと相知り、漫遊の資を得んと欲して合作詩集一卷を上梓せしに、世間殆ど顧る者なかりき。妻を娶り後て、夫妻コーレルリッヂと共にスコットランドに遊び、當代の名家ウォルター、スコットを訪ひき。其のころ詩卷を公にせしと二回、社會の冷遇は依然たりき。時にウオヅ

ヲオスの父に負債ありしロンスデール伯其の負債を還附し、且つ更に扶助する所ありしかば、ウオヅヲオスの生計やうやくゆたかなり、すなはち益、勵精して其の天職に盡瘁し、爾後五年間に作する所“The Excursion”、“The White Doe of Rylstone”及び“Peter Bell”等名篇一二のみならず。而も世間の冷待は依然たりき。一千八百三十年以後に至り、ウオヅヲオスの眞價始めて世の認むる所となりぬ。昨は其の作を手だに觸れざりし者、今は之れを誦せざるを耻となせり。一千八百三十九年、オックスフォードの大學彼れに贈るに民法博士の學位を以てし、同四十二年政府彼れに贈るに桂冠詩宗の榮職を以てせり。ライダール、マウントに退隱して天然を樂みし窮措大一躍して當代の詩宗となりぬ。

一千八百五十年四月齡八十にて没しき。テリス曰はく、ウオヅヲオスは第二のクーバアなり、才藻少しく劣りたるが如く、なれども、觀念の深遠は遙かに彼れに超えたり。彼れは幼より多情多感にして自信の念強かりき。其の多感は、よく一切物に同情してそこに生命を見出だし、所以、其の自信は、よく時流に超絶して其の天職を確守せし所以なり。彼れは常に人心

内部の感動に囑目し、之れを自然界にも推し及ぼし、一意此の神靈の影を捉らへんと勗めたりき。夫れ如是思想をもて自然と人事とに接せんか、自然や、人事や、豈情意あるものと見做されざらんや。一株の緑樹はよく彼れに榮枯の念を與へ、一朶の行雲はよく彼れに人世去來の趣きを悟らしめき。彼れは兵卒が進行の鼓聲を聞きては英雄の献身、社會の維持等の事を追想し、寒野に草花の咲けるを見ては樂天の眞趣のこゝに存するを認めたりき。畢竟するに、彼れは身軀によりてよりも寧ろ精神によりて生息せし人なり、云々。

夫れ詩人の哲學思想は、譬へば庭園のかなたにそびゆる遠山の如し、或は木の間より、或は籬の上より、よく其の影を見はす。風雨になやみてはクーバアの沈鬱となり、電光に激してはカーライルの熱罵となり、朝霧に被はれてはウオヅヲオスの沈靜となる。然り、ウオヅヲオスは沈靜の人なりき。思索、夢想、讀書、散步、悉く沈靜なりき。夕べの霞のどかに湖面を渡りて對面の峯巒模糊たる時、獨り水涯を徜徉し、書齋の硝窓の燈火のあらはるゝを見て家に歸れば、可憐の少女は之れを迎へ、斷琴の心友は待つこと已に久し。是れ彼れが得意の生活、又其の適意の詩境なりき。

按ふに、平湖波靜かなる日常の出來事は、彼れに詩思を供して餘りあり、怒濤澎湃たる浮世の大海は彼れのむしろ恐れ避くる所なりき。彼れは亭午の詩人、滿月の詩人にあらで、薄明、纖月の詩人なりき。さて、此の性格より自然に湧き出でし主義に曰はく、我れ等の主とする所は道的生活モラルライフにあり、我れ等は世俗に此の主義を會せしめざるべからず、讀者を動かさんとせば、宜しく其の心に訴ふべし、猥りに華麗なる服裝を用ひて彼等の目を眩せんは陋なり。時尚の雅言は遍通の妨碍なり、詩の散文に近きは咎むべからず、俗語、野言、却りて可なり、其の主題の如きも、田舎の老嫗、市中の乞丐、野童、走卒、皆妙なり。畢竟、詩をして貴からしむるものは貴人を題となすが爲にあらず、用語の綺麗なるが爲めにもあらず、唯、感情の眞なるにあり。人の詩を讀むは言辭の美なるを學ばんが爲めにあらで、思想の美しきを樂まんが爲めなりと。ウオヅヲオスが主義は、一言以て之れを蔽へば、精神的なり、彼れは詩を以て社會を薰陶して所謂道的生活に到らしめんことを期せしなり。彼れ嘗ていへらく

大なる詩人は凡て教師なり、余は教師として責ばるゝ能はずんば寧ろ何者をも思はれざらんことを願ふ

と。テースは其の主義のやゝ極端に流れたるを見て譏りて曰はく

此の主観面白けれど、其の讀者の、毎に作者と同地位に在らざるべからざるを如何せん。換言すれば、ウオヅテオスを解せんせば、必ずや俗事を捨て、泉聲に耳を洗ひ、行雲に眼をさらすこと、諷くさも十年、而して後に纏くにあらすば、其の妙趣を會するを得ざらん。彼れは纖弱なる手よりの糸を以て天下の衆心を捲了せんさす、血肉ある指の一たび之れに觸るれば、忽ち断れ、さなるを知らざるなり。彼れが作の半ばは實に小兒らしき物なり、無氣力なる感情を無氣力なる詩材を以て歌へるものなり。かゝる詩巻を通讀するばかり、世に心たゆまるゝはあらじ。小猫枯葉を玩べは、忽ちにして哲學思想に念ひ及び、滔々八十行の詩篇をなす、この分にては、使ひ古しの靴刷毛もよく吾人に大哲理、大詩歌を興ふるならん。豈嗚呼ならずや。「要するに、彼れが思想は餘りに狭隘なり、彼れが詩は日常の平事のみ、未だ以て全人間の一大活動を現するに足らず。

と。テーマの嘲笑も一理無きにあらねど、ウオヅテオスの大なる所以は、其の作物の巧拙の上でのみ在るにあらず、むしろ深く詩人の天職を意識して生涯を詩歌に捧げし所に在り。古人の卑細として筆を着くるに及ばざりし、寧ろ着くる能はざりし自然界、人間界を看照して、能く其の美處を發揮せしにあり。彼のポーア等がわざとらしき擬古、彫琢に反對して、活天地を歌ひ、活言語を用ひ、而も優かに風韻を

具へ、露骨粗笨に陥らざりし所にあり。「自然に歸れ」といふ時勢の呼び聲に和しながら、バイロン、シェリーなどの如く、矯激の極端に流れずして、長閑なる自然主義を建設せしにあり。彼れは他が粗笨乾燥となせる事物を取りて、之れに與ふるに耀々たる靈氣を以てせり。彼れの物を描くや、平明素樸、うち見たる所一の藏する所なきが如くなれども、而も沈思黙誦、忽爾として其の神に會するに及びてや、津々たる幽趣掬すれども盡きざる概あり。其の主題の狭少なる、何かあらんや。アーノルドは徵賞して曰はく、余は確信す、ウオヅテオスはエリザ朝より今日までの間にシエークスピアとミルトンとを除けば、第一位を占むべき詩人なり。否、之れを大陸の詩人に比するも、モリエールの死後、グーテ一人を除きては之れに匹敵する者なかるべし。レッシング、シルレル、ハイテ、アルフェリ、マンツォニー、ラシーヌ、デルテール、ユーゴーの如きは、何れも天才の詩人にしてウオヅテオスの企て及ばざる長所あれども、其の作全軀を取りて之れを觀れば、其の感銘力、其の趣味、其の品性及び其の清新の氣に至りては、到底ウオヅテオスに及ぶ能はず」と。

アーノルドの評は勿論溢美の嫌ひあれど、清新と高潔とは、眞に此の作家の争ふべ

からざる長所なり。此の特長のあらはれたるもの小品にもあり、長篇にもあり、彼の『エキスカアション』の如きは、其の大篇なるもの也。『エキスカアション』は『漫遊記』の義なり。著者が信心深き蘇國の一行商と共に旅行せる其の途次の談話を筋とす。此の作のはじめでしや、當時の批評家ヂェッフレイは、之れを爲すなきの駄作なりと嘲り、バイロンは、眠たく、煙たき、厭はしき作と罵りき。然れども是れ時人の未だ彼れが詩の真味を解し得ざりし時の盲評にして、今日に至りてはウオオゾチオスに服せざるテーマすらも、之れを評して、譏りていは、鈍く重くるしき説教に類したる作なれど、其の思想の純潔にして高上なる、如何なる贊辭も惜しからず。實に此の詩は彼れが宗教上の理想をも、英國の人種氣候をも、圓滿に現はせるものと云ふを得べし。要するに、此の作はプロテスタントの寺院の如し、變化も裝飾もなければ、其の高大なるは否むべからずとたへたり。但し『エキスカアション』と『フレリット』とは彼れが最大の作なれども、最好の作とは稱すべからず、最好の作は却りて其の短篇の中に多し。

長篇の作は『エキスカアション』の外に『ライルストーンの白鹿』(The White Doe of Ryl-

Percy Bysshe Shelley.

stone)といふあり、短篇中にて名高きは『泉』(Michael)『雛菊に』(To a Bird)『Lines composed a few miles above Tintern Abbey』(The Solitary Reaper)『我等は七人なり』(La Oda Mia)『本務の歌』などなり。

人の新知識が現象と化して言語、文章に現るゝや、種々の方面よりす、而して或は同時に反對の方角よりすることあり。彼の擬古時代には、スウィフトとアデンソンと剛柔相面し、今又哲學的精神の時代に於ては、ウオオゾチオスとシェリーと相因みて相異なる相を呈せり。前者は保守的説教者、後者は社會的夢想家なり。

バアシー、ビッシ、シェリーはウオオゾチオスと共に所謂哲學派(一層正當に言へば理想派)を代表せる第一流の詩人なり。士爵チモシー、シェリーの長子にして、千七百九十二年八月、英國サセックス州なるフィールド、ブレリスに生れき。其の家はウイラム勝王以來の舊家にして、鼻祖は勝王の從臣なりきといふ。バアシーは幼うして聰慧、感じ易く、悲しみ易く、激し易く、夙に懷疑的考察を好み、年を重ねるにつれて無神主義に傾きぬ。彼れは小學時代に於て、既に二種の小説を綴りきといふ。生得我慢剛情にして、容易く人に屈せざる持前なりしに、小學にてもイトンの學校にても、甚

しき虐待を蒙りしかば、彼れはますます反抗の念を生じ、政治上、社會上、宗教上に於ける現行諸制度を疾惡するの思想は、既に其のころより萌したりき。オックスフォードの大學に在りしや、彼れはホッグといふ同學と共に、基督教義を辯難論駁せる一文を草し、爲に同校の規則に觸れて退學を命ぜられ、暫らくロンドン市に假寓せしが、下等社會の一少女と結婚するに及びて近親と衝突し、竟に父の勘氣を受けたり。バアシー夫婦は止むを得ずして、ロンドンを離れ、一時は英國の北地又はウェールス地方などに流寓し、貧困甚しかりし間にも、流石に思索研究の念は休むことなく、小品の詩若干篇を綴りぬ。かくて故ありて其の妻を離縁するに先きだち、時の名士ウールヤム、ゴド井ンと知る人となり、其の女(Miss Godwin)と親しみ、前妻離婚の後娶りて妻となしぬ、有名なるシェリー女史即ち『フランケンスタイン』の作者は是れなり。これより後實家との葛藤やうやく解け、父の怒りも和らぎ、月々若干の扶持を送りくる、筈となりて、家計少しくゆたけくなりぬ。さもあれシェリーが健康はそのころより衰へはじめしかば、轉地療養せんとして歐洲大陸に漫遊し、瑞西にて始めてパイロンと知る人となりぬ。按ふに、シェリーが燃ゆるが如き熱衷と其の大膽なる革

命主義と其の雄快なる能辨とが(パイロンみづからはシェリーの説を評して "Too spiritual and too romantic" と倣せりしにも拘らず)暗に其の同世の大詩人に影響せし所尠少なざりしなるべし。シェリーは其の接する人々を魅する魔力ありきと稱せらる。

シェリーが漫遊を了へて歸國せしころには、前妻なりし女は故ありて自殺し、憫むべき孤兒のみ残りたりしを、シェリーは引取りて養育せんと欲し、もとの舅聽かず、竟に訴訟沙汰となりてシェリーのかた敗訴となりぬ。かくて後は現行法制を憤るの念更に甚しきを加へたりき。彼れは再びロンドンを去りて、颯然伊太利に遊び、かしこにてパイロンと交はり、頻に詩を作し、大かた羅馬府に假寓して、其の一代の傑作を物しき。然るに一千八百二十二年、レクホルンといふ處より小艇にて歸る途中、偶然颶風にあひて、敢なくもスペイン灣にて溺死しけり、時に齡僅に三十歳なりきと云ふ。

シェリーは自家の經驗せる不幸、艱苦、壓制より推斷して、人生の害惡乃至個人不幸を一概に社會に行はるゝ惡制度の罪に歸して、以爲へらく、個人はすべて善良なれ

ども社會は常に邪惡なり、現在の社會制度だに除き去らば、美德と幸福との彌勒時代立地に來るべしと。彼れは人類の不幸と墮落とは全く現行の諸制度、諸習慣が教上、政治上、婚姻上の諸慣例に基くなり、極めて單純に臆斷し、此等の制度、習慣が如何に不完全なるも、如何に虚式的なるも、意馬心猿を制御せんが爲に設けられたる羈絆なれば、流石にかゝるものの絶無なるには優れる由をえ悟らざりき。彼れが此の初一念は身を終ふるまで變はることなく、或は共和主義を唱へ、或は共產主義を唱へ、或は國王、僧侶、上帝の名は、其の實と共に、早晚廢滅せしめざるべからずと唱へき。要するに、彼れは抒情詩人の醇なる者なりき、されば彼れの作は其の形の如何に拘らず、専ら抒情詩として見るべきもの、又抒情詩としてこそ歎美激賞すべきものならめ。彼れが作中、劇の形式を具へたるは“Prometheus Unbound”と“The Cenci”とにして、双つながら革命的想念を鼓吹せる作物なるが、前者は希臘劇を學びて明かに抒情的、後者は型だけは正劇に叶へりと雖も、實質は同じく抒情詩的なり。シェリーが革新思想は其の本來の性癖と少時の閱歷とに胚胎せしこと勿論なりと雖も、彼れをして理想家たらしめ、哲學的詩人たらしめし者は、其の師友ウィルヤム、

ゴド井ンなり。彼れが政治論、社會論などは總じてゴド井ンが『公道論』政治的正義の直譯に基けり、否、彼れは嘗り議論上に於てゴド井ンが極端なる平民主義を祖述鼓吹するに熱心なりしのみならず、其の作に、其の言行に『公道論』の旨を實現せり。ダウデアン氏評して曰はく

シェリーが眼は自ら描ける空想界の影象の爲めに眩惑せられ、過去 代の遺業は之れを顧る能はざるに至りぬ、然れども彼れが詩歌の最も力ある中心は正、眞、愛、美等にあり。此等理想に對する彼れが高尚なる志望の其の讀者を鼓吹感動する力は庸常作家の企て及ぶ所にあらず、況や、恐怖と反動とが全歌を震盪せんとする時に當りて、件の理想を、持して新社會を建設せんさせし榮光の赫々たるものあるに於てをや。」

と。所詮、彼れが作中の人物は皆此の空想界中の動物なり、人間以外若しくは人間以上の物たり。彼等の頭は尙未だ天に接せざれど、脚は已に地を離れたる觀あり。『小仙女王マンブ』“Alastor” “The Revolt of Islam” “Prometheus Unbound” など、何れも然らざるなし。是れ蓋し、其の理想界の天にあらず、地に在らず、煙の如く雲の如く虚空に漂蕩たりしに由るなり。

斯かる理想を標準として現世間を觀察せんか、聞睹の事物悉く皆汚穢ならんのみ。

シェリーが其の慰藉を自然に求めしは固より其の所なり。行雲や、巖石や、牧野や、彼れが詩眼に映じては無上樂土の影を現せり。彼れは處女の嬌顔よりも曙光の清く美しきを愛し、百万の歎呼よりも怒潮の壯にして大なるを好みき。漠々たる不毛の荒野も、無心げなる雲雀の聲も、よく彼れをして造化の平和を悟らしめ、無限の神秘を冥想せしめき。彼れが情思は時としては太古の詩人に似たり、其の想像の鋭きや、或は電光を火鳥となし、或は白雲を天馬となせり。按ふに、此の不可思議的遊神の技倆あるもの、恐らく英國にては、スペインサアとシェイクスピアとの外、只一のシェリーありしのみならん。ダウデン氏曰はく

シェリーは神興の自然を以て其の詩を作爲す。先従萬丈、生氣辭句に溢る、眞個天馬の大空を奔るが如し。彼れは神興を尊びて反省を卑しきし、嘗て其の詩句を推敲せしことなし。又其の少時の作を保存せしことなし、然るは其の少年期の我れを知り、過去の殘れるを繼紹し、若しくは思想、境遇の歴史を尋ね求めんとする念無ければなり。されば彼れの如きは假令長命したらんとも、其の眼は常に前にのみ向へるが故に、過去の作の如きはすべて忘失し了りしならん。

と。以て彼れが詩脈を察すべきなり。

彼れが作中名高きは千八百五十三年に物せし“*To a Skylark*”なり、詞調、意、共に高遠、千古の傑作と稱せらる。同年の作中尙“*The Witch of Atlas*”“*The Cloud*”『有情の草木』（シェンケイ、ワラント）などあり、皆有名なり。此の中『有情の草木』には、草木の精相集まりてものゝ其の情思を語る、而して此等空想は悉く是れ作家が空想、蓋し彼れが眼には無心の木石もまた皆精神を有せしなり。げにや、或哲學的思想を以て見れば、宇宙の萬物は皆一の精靈なるのみ、而して此の精靈に情を寄せて熱心に之れに近かんとするは是れ近世詩壇の著き傾向にして、カムベル、ウオヅナオス、キーツ、バイロン等いづれも此の太氣を呼吸したりき。之れを要するに、シェリーは英國に於ける革新運動の精髓を代表せりし詩人なり。彼れは専ら理想界に棲息せしが故に、一面、空想に流るゝの弊を免れざりきと雖も、一面、他の現實に執着せる輩の決して夢想する能はざる所を看破したりき。彼れはスコット一輩の如く徒らに回顧して過去を夢みること遣り、破壊是れ事とするの作者にもあらず。將た彼のウオヅナオスの如く隱遁して山水風月を友とし、獨善自養是れ安んずるの作家にもあらず。彼れは兎も角も

一個の豫言者なりき。ダウデン氏が此の點より觀察してシエリーが理想を激賞せる、寔に其の當を得たりといふべし。

ダウデン氏の説の要に曰はく、彼れは詩人的直観によりて十九世紀の二大勢力を豫知し、且つ之れを鼓吹するの前驅たりき。二大勢力とは平民主義デモクラシーと科學サイエンスとなり。彼れの平等主義は、如何ばかり不完全なるも、明かに今の所謂四民平等主義の系脈に叶へるものにあらずや。彼れのゴドフィンゴドフィンを承けて主張せりし「道理即美德」の説は、如何ばかり偏僻なるも、理法リフによりて是非を斷じ、理法によりて人間を規定せんとするは今の所謂科學主義サイエンスの前驅にあらずや。中古の世の主人公は武士と清僧モンクとなりき。中古の世の大法は習慣即ち人の定めたる法度なりき。十九世紀の主人公は何ぞ。その大法は何ぞ。曰はく人類ヒューマンなり、曰はく科學サイエンスの與ふる理法なり。此の二者を合すれば Humanity subject to law (理法に服従せる人間)といふ成語を得、而して之れを釋すれば、人類の進化といふ觀念を得べし、是れ實に十九世紀の信仰の基礎たり、最大鼓吹力たり、此の進化の善に向へるを信じたるは十九世紀の正教にして、之れに反せるは邪教徒なり、異端なり。前者は積極的革新の運動を助け、後者

は消極的革新の絶望を代表す、前者は人類全體の利害を重んじ、後者は個人の權利のみを重んず、前者は如何ばかり不完全なるも、毎に博愛の旨を含めれど、後者は動もすれば私利私福を主位に置きて、兎角に厭世の臭味を含めり。バイロンは後者に屬し、シエリーは前者に屬す。シエリーの理想は、其の詩と行爲とに現れたる所は如何ばかり矯激なるも、齡三十を越えずして逝りしを思へば、未だ輕率に酷評すべからざるものあるべし、天壽を彼れに假したらば、或は百尺竿頭に一大轉歩して如何なる大飛躍を試みたらんか、未だ決して知るべからざるなり。云々。

以上略述せるローマン派及び哲學派の諸作家は、その方面を殊にして行動せりきと雖も、其の歸は時勢につれておのづから相一致し、まづ文學に端を發き、終には宗教上、社會上に精神的革命を促し來る媒となりき。

之れと同時に、他方に於ては、形而下の諸學も大に開け、天文、地質、博物、人類などの諸科日に月に發達せり。而して**新批判法**は、た獨乙より入り、基督教の經典まづ嚴査せられて、蘇國の學者、信者、舊妄信を破るに卒先し、宗派次第に融會せんとせり。是に於て近世革命思潮は全く文學界を浸潤し、五十年間にしてシ

ドニ、スミス、アーノルド、マコーレー、カーライル、ミル、テニソン等相續いて出で、宗教に、社會に、歴史に、哲學に、批評に、詩歌に、小説に、おの／＼局面を改め來たり、所謂キトリヤ文學の一大潮流をなすに至りき。

第四章 バイロン

バイロンの異傳——其の名編『チャイルド、ハロルド』——其の他の諸作

——其の爲人——其の末路——主觀詩人の標本——シェリーとの比較——

バイロンの感化影響

第十八世紀の詩風に反動して起りし新詩派が一方に勢力を得んとせし時に當りて、詩風は舊態を奉じながら、思想はあくまでも革命的、破壊的なる新詩人として死後には間々シェリーと併べ稱せられ、當代には雷名スコットと相ならび、一時全歐を震盪せし者あり。たそや。シャルルシ、ゴオドン、ノエル、バイロン是れなり。

バイロンは一千七百八十八年英都ロンドンに生まれき。父ジョンは嘗て有夫の婦と手を携へて他郷に走り、やがて之れを虐遇し、其の財を奪ひ、竟に異邦に狂死せし不義放逸の無頼漢なり。母をカザリン、ゴオドンといへり、稟性の奇矯なる

G. G. N. Byron.

こと其の夫に譲らず、執拗多感、愛憎常なく、激すれば狂せるが如く、衣帽を寸裂するを常としきといふ。夫に棄てられたるカザリンは幼兒を抱きてアメルチン州に退き、それより數年の間僅かの収入によりて辛くも母子の露命を維けりき。バイロンは全く此の母の手一つに育てられて、其のいみじく端麗なる容姿と共に不羈多感の性質をさながらにうけつぎにき。親子屢、相抗論せしや、母は烈火の如く怒りて、有り合ふ火斗、火箸などを手當次第に投げ付けしことあり、而して子は流石に抗し得ざりし丈けに胸中の憤懣燃ゆるが如く、時には小刀を取りて咽につき立てんとせしこともありきといふ。或時口論の激しかりし後、母子互ひに他の自殺せんを危むこと甚し、密かに藥舗にゆきて問ひけらく、今がた毒藥を求めに來たりし者なかりしかと。其の幼時の境遇を想像すべし。

バイロン十一歳の時、其の大叔父シャルルシ其の親族と一酒舗に争鬪して非命の死を遂げしかば、バイロン圖らずも其の莊園、邸宅を承繼し、且つ男爵の榮をも得たり。ハーローの小學校に通ひ、そめしは此の時よりなり。本來傲岸なりしバイロンは他の下風に立つことを屑しとせず、忍苦勉勵、日夜讀書に汲々たりき。此の傲慢と

共に著かりしは其の友に對する情誼なり。彼れは幼少より其の友の爲めには勞苦をも財産をも惜まざりき。後年以太利に遊びしや、年々四千磅を費せり、而して其のうち一千磅は全く友を援くる爲めに消費せしものなりきといふ。バイロンはダンテと同じく、幼うして已に戀を経験せり。八歳の時既に一少女を慕ひ、十二の時には其の従妹を戀ひ、爲めに、眠むる能はず、食ふ能はず、また安息する能はざりき。

ケムブリッジの神學校に轉ぜしや、不羈放縱、常に校則を輕んじ、頻りに雜書を濫讀せり、就中東洋の歴史、旅行記を愛し、既に其の頃より東方漫遊の希望を抱きぬ。

一千八百七十九歳にして『閑日月』(“Hours of Idleness”)と題せる一篇を公にせり、是は學校に在りし間によりく詠み出でし小詩を集めしものなり。而して『エチンバラ評論』之れに對して酷評を加へしかば、バイロン大いに憤激し、一千八百九年、英國詩人と蘇國批評家』といふ一冊子を著し、『エチンバラ』記者はいふに及ばずあらゆる當代の文士を嘲罵したり。此の年大陸漫遊を思ひたち、西班牙、希臘、土耳其并びに東洋の諸國を巡歴し、目馴れざる風俗、山水、奇事、人情を見聞し、おもむろに其の一

世の大作『チャイルド、ハロルド漫遊記』(“Childe Harold's Pilgrimage”)を著さん準備を爲しき。此の漫遊中も其の失戀の病苦を忘るゝ能はず、世を厭ひ世を憤る念

漸く盛んなり、此の篇の主人公ハロルドの如きは明かに作家の照影なり。一千八百十一年本國に歸り、翌年『ハロルド』の首篇二を出だしき。此の作大いにもてはやされ、詩名忽ち英文壇に喧しく、識者、俗人を問はず、異口同音に作者の大才を嘆稱せしかば、バイロンは一朝にしてロンドン詩界の泰斗と仰がれ、當時の詩宗スコットすら其のしりへに瞠若たるに至りき。

一躍して文壇の首位を占め、都門の交際場裡に榮光を擅にせしこと凡そ三年、其の間上院の議員となりて議場に演説を試みしことも前後三回、また日々に宴樂を事とし、時には痛飲夜を徹せしこともありき。この間『不信者』(“The Giaour”)、『アバイドスの新婦』(“The Bride of Abydos”)、『海賊』(“The Corsair”)、『Lara』等の作あり。一千八百十五年齡二十八歳にして妻を娶る、妻は夫が行爲の律なきに驚き、狂ならずやと危み、竟に醫師の診察を請ひて其の狂ならざるを知りて益驚き、遂に意を決して離婚す。共にあること僅に十二月なりき。而して此の離婚に關しては社會のバイロンを

責め、罵ること甚しかりしかば、さらぬだに世に不平なりしバイロンの、如何に業火を燃し、かは、此の折著し、『コリンスの圍み』(“The Siege of Corinth”)及び“Parisina”等の詩篇によく見えたり。勢ひかくの如くなりしかば、彼れは遂にロンドンを去りて再び大陸を漫遊し、行く／＼瑞西、希臘、伊太利等にて口を極めて英人の宗教、政治、道德を罵り、其の鬱憤を洩らし、が、是れより肆に酒色に耽り、漸く悖徳の行ひ多し。ゼテツにて『チャイルド、ハロルド』の第三篇(以下、ゼニスにて完結)『シーヨンの囚人』(“The Prisoner of Chillon”)、*“Manfred”* 及び『タソンの嘆』等を著す。一千八百十八年より同二十一年までは、ゼニスとラゼンナとにあり、此の間其の行ひの蕩佚不羈更に甚しきを加へたりき。著す所“Don Juan”の首五篇及び悲劇『マリノ、フリエロ』『サルダナベラス』『ウエルナア』『ケイン』等あり。彼れは頗る健筆の名あり、四日にして『アバイドスの新婦』を成し、十日にして『海賊』の稿を脱しき。さもあれ平素詩歌を本領となすを悦ばず、常に詩人を輕視し、詩歌を瓦礫視し、當代の詩歌を罵り、自作をすら取るに足らずと稱し、且つ人に語りて曰はく、我れにして今ま十年の命あらば世人は必ず作詩以外に我が本領を認むるを得んと。幾程もなく希臘國民の其の

祖國の獨立を圖らんが爲めに一團の義勇軍を起すに會す、バイロン大いに悦び、直ちに航して之れに投じ、熱心に其の業を扶けしが、事未だ央ならざるにマラリヤ熱の一種に罹り、一千八百二十四年四月十九日齡僅かに三十七にして鬼籍に入りぬ。遺骸は本國に送られて累代の墳墓に葬られき。

バイロンはシェリーにひとしく純然たる抒情詩人にして所謂**主觀詩人の標本**なり。彼れは甚だ狹量にして其の内心の擾亂を自制するの忍耐なかりき、其の煩悶し憤激するや、言行に現れざれば詩歌に現はれたり。アーノルド曰はく、彼れの詩は他の詩人の、如く先づ腹中に種子を生じてそに生長し、さて後ち一の軀となりて生れ出でしものにあらず。此の點に於て彼れは美術家の資を欠きたり、彼れは自制の力を欠けり。彼れは、自らもいへる如く、其の胸中物あるの苦を免れんが爲めに詩を作せしなり、抑へがたき鬱勃の情やがて其の詩歌となりしなりと。宜なり、其の作の何れにも作家の面影の歴々かること。彼れはまた熱血の男兒なりき、故に其の世に嫌らざるや厭くまでも之れを痛罵せざるべからず、而して其の語極に馳せて甚だしき反撃を受くるや、彼れは益、怒り、益、激し、世の己れを容るゝまでは戦は

んと欲しき。夫れ情の強きは主觀詩人の常なりと雖も、バイロンの如きはあまりに甚し。彼れは笑ふ能はずして泣き、泣く能はずして怒りき。其の怒るや濫せり、蓋し彼れが情は毫も智の判断なき情なり、彼れが智は其の情を制する力なし。ケ
 ーテ曰はく、彼れは自家甚だ闇黒なり、反省の時間には稚童の如しと。彼れは分別の力乏しく、隨うて分明なる理想なかりき。彼れが世に對する衝突は理想と現實との衝突にあらず、氣儘と世習との衝突たるに近し。彼れが好尙はた甚だ粗雑なりき、其の幼より聖書を喜びしも、新約の眞面目なるを愛するにあらず、舊約の神怪なるを悦びてなりき。彼れの多情は情慾のみ、宗教及び審美の高等なる情緒は頗る貧なり。然れども彼れが熱誠は信ずべき者あり、其の言屢、狂愚に類せりと雖も、句々衷情より迸出し、間々鬼神を泣かしむる概あり。アーノルド曰はく、バイロンは彼の技術家に必要なる事件を聯綴し、性格を發展するの伎倆に乏し、而も個々の事件、景物をば甚だ明瞭に想像し、其處に其の身を投じて恰も目睹せる事實の如くに描きいだし、以て他人をしてさながらに目睹せしむと。極言すれば、彼れは創才を欠けり、彼れが作は其の見聞を敷衍せるものたるに過ぎず。彼れ曰はく、予は親

しく經驗せし基礎あるに非ざれば何物をも寫す能はずと。彼れが描ける人物は同一様なる性格を成し、且つ其の事件も其の閱歷の範圍を出でず。『ハロルド』『ラ、』『海賊』『不信者』『マンフレッド』『ケイン』『タッター』、其の他の人物何れもたゞ景と装とを殊にせるまでにて、畢竟は同一人なり。按ふに、彼れは己れが理想、觀念を平叙する能はざるを以て、常に事件と動作とを借りて之れを描寫せんとしたりしなり、此の事件、動作に與る人物は必ず彼れが化身なるを以て、彼れは常に件の事件、動作を勿論其の閱歷中より擇ぶに最も慘烈なるものを以てしき。『アバイドスの新婦』『不信者』『海賊』『ララ』『バリサイナ』『コリンズの園』『マゼッパ』『シーヨンの囚人』の如きは其の成功せるものにして、彼れが主義抱負の一讀下に瞭々たると共に、慷慨悲慘の情全篇に溢れ、鬼氣の轉々人に迫るを覺ゆ。レントン曰はく、攻圍、戰鬪、難破、其の他人生の擾亂、病苦等、凡べて破滅、危機の光景を描くに當りては、彼れ技術家として最上の地位に達せり。若し夫れ其の自然界の慘劇を寫すに於ても等しく得意なりしに至りては、是れ全く彼れが外界上に其の自己の影を投射せしものといはざるべからずと。

バイロンとシェリーとは若干の點に於て相似たり、取りわけて其の閱歷、境遇に至りては、二者頗る相似たるものあり。二人共に多く天福を享け得て生まれたりしが、二人共に逆境に沈淪して悉く之れを失ひ了りぬ。二人共に舊家の子にして、二人共に天才有り、二人共に風采美なりき。二人共に家庭の不幸を経験し、二人共に世と衝突し、激しく輿論と戦ひたりき。二人共に多年を輻輳諷刺の間に送り、時の宗教に背反し、時の習慣に背反しき、即ち革命運動の驕兒なりき。二人共に主觀詩人にして作る所皆抒情的なりき、二人共に、社會改善の事業を以て文學的事業よりも貴しとし、詩人にありながら詩人たるを卑みたりき。以上は二人相似たる點なり。若し夫れ二人の相違は、主として其の人生觀に在り、理想の有無に在り。バイロンは個人が意志の力を此の上無き尊きものゝ如く思惟したり、彼れは著く革命期の個人主義を代表せり。彼れが名作『チャイルド、ハロルド』は一面より觀れば人の力が如何に驚くべき大革命を成就し得べきかを例證せるものとも評しつべし。彼れは太古、中古、近世に於ける人間の所業の如何に雄大にして壯偉なるかを具象的に評論せり、彼れは人間の卑しむべきを絶叫すると同時に、暗に人間の偉大なるこ

とを感ぜざるを得ざりしものゝ如し。彼れの作は常に佛國革命第一期の個人主義の影を宿すと同時に、爲我主義、功名主義の末路の如何にはかなく淺ましきかを暗示せるものなりとも評すべし。若しくはジョン、モオレー氏の言へる如く、佛國革命の縮圖なりとも評すべし。破壊や、顛覆や、憤怒や、罪惡や、深刻なる煩悶や、冷然たる抛擲や、自暴自棄や、彼れに實現せられたる所は、すなはち此れにも描かれたり。『チャイルド、ハロルド』より『ドン、チュアン』までのバイロンの諸作を味はんもの、誰れか此の感無からんや。バイロンが大詩人として全歐に雷名を轟かし、は、かばかり能く時代精神を寫し得たればなりき、その成功の偶然にあらざるを知るべし。然れどもバイロンは、畢竟するに、形而下革命を代表せし詩人なり、換言すれば、彼れは或特殊なる革命の作用と結果とを謳歌せしに過ぎざる者なり、即ち消極的革命詩人なり、明瞭なる理想、確實なる改革案ありて社會の改善を鼓吹せし者にはあらず。是れシェリーと相異なる要點なり。シェリーに至りては、前にも既に言へる如く、一面、破壊的なると同時に、一面、建設的なりき。彼れは現制度を除くと同時に、おのが平生の理想をあらゆる方面に實現せんことを望みき。彼れは不完全ながらも

理想と改革案とを有せりき。即ち積極的の革命詩人なりき。彼れは理想を以て現在の事實よりも實なりとせしが故に、目前に如何なる現象起るも、絶えて之れが爲に動かさるゝことなかりき、佛國革命の大弊を見ても其の信念を弱めざりしは此の故なり。其の説く所こそは詭激なれ、其の手段は漸進なりき、慤くとも漸進的ならざるべからざることを自認したりき。彼れはバイロンの如き憎人主義者にあらず、刻薄家にあらず、否、あくまでも社會改善を以てそが終生の本意とせりき、是れ其の詩人たる本領より觀るも、バイロンに勝ること一等たる所以なり。

さもあらばあれ、バイロンが作は、其の當時に在りては、眞一空前の勢力を以て歐洲の各國に迎へられき、特に其の青年間に於ける影響は目覺しかりき。テーマは其の理を探りて曰はく、按ふに、難破、攻圍、虐殺、鬪争等の事件は最も常人の注意を引き易きものにして、若し人ありて其の詩中に之れを歌はんか、單調の事に飽ける人情は忽ち之れに趨かん、そは傳奇的小説の常に彼等を誘ふに於て見るべし。况やバイロンが絶技を以て歴々之れを描き、對するに柔和の佳人を以てし、飾るに幾多華麗の光景を以てし、陰雲暗憺たる篇中に神加人かと思はるゝ麗姫、繪の如きの東洋

風景、古アルピンの宮殿、地中海の明波、希臘の夕陽等を挿めるをやと。それ或は然らん。但し、彼れの志か爲ししは、俗衆を悦ばしめんが爲めのみにはあらじ、其の本來の詩躰に因る所も多からん。彼れは甚しくポーアの詩風を悦び、ポーアを以て沙翁、ミルトンの上にありとせり。極力社會の虚偽を攻撃せる彼れがポーアの虚飾躰を悦べる恠むべしと雖も、按ふに、言行屢々一致せざる自儘の本性と自儘のまけじ魂とよりウオヰオヰオス等に反抗し、竟にかくの如く成りゆきしならんか。

兎に角に此の「詩界の大那翁」は革命の長風に駕して一時歐洲の讀詩會を風靡しき。彼れは英文學を全歐に傳へし最初の詩人なり、其の感化の大なりしや實に驚くべきものあり、其の本國にても或一部の青年には其の片句をだに暗誦せられ、其の相貌、身振をだに模倣せられ、其の跛なるをだに羨まれき、否、獨に於てはゲーテに希有の才幹と稱せられ、ハイチをして「日耳曼バイロン」と呼ばれんとを望ましめ、魯に於てはレルモンツフに魯國バイロンの名を榮と思はしめ、其の他、佛蘭西、以太利、西班牙に傳播して到る處に溢美の讚辭を得たり。之れと共に或一部は、極言彼れを攻撃し、或は惡魔と呼び、或は狂人と呼び、セータンの權化とすら罵りにき。

然れども時は最良の批判者なり。彼れが眞價は今や全く定まりぬ、彼れは決して空前絶後の大人物にもあらず、セータンの權化にもあらず、自制に貧なる希有の天才の世波に乗じては眞價以上に崇められ、世波に逆うては眞價以下に貶しめられ、自暴自棄するに至る其の一大實例たるに外ならざりしなり。

第五章 其の他の詩人

變遷期の四作家—アレック—クラップ—コルリッヂ—其の異傳—

其の諸作—キーツ—其の眞價—カムメル—ムーア—ハント—ロ

—チャアス—其の他

ロバート、バアンスが有りのまゝなる情感の描寫によりて一種の新詩風を創始し、英蘇の文學界を驚倒しつゝありし時、ウイリヤム、クーパーが其の誠實溫柔なる性質の自然の結果として、浮誇を嫌ひ、虚飾を忌み、詩歌の陳套に反對して、質實なる新詞致を試みつゝありし時、即ち想に於て公然革命的なることバイロン、シェリーの如きも未だ世に現れざりし時、また詞致に於て公然革命的なることウ、オヰヂオス、コルリッヂの如きも未だ世に現れざりし時、バアンス、クーパーと恰も時を同じうし

W. Blake.

て他に二人の著き特色を具へたる作家あり、以て此の變遷期の詞壇を飾りたり。其の一はウイリヤム、ブレイクにして、其の二はジョーエル、クラップなり。

ウイリヤム、ブレイクは千七百五十七年に生れて、一千八百二十七年に逝りき。詩人にして、畫家にして、彫鑿家にして、神秘主義家にして、みづからは常に豫言者を以て居れりき。彼れや、身は十八世紀の末葉に住しながら、其の好尚も、詩風も、着想も、超然として時流を脱し、常人に遠く、さながら別天地に生息して、時處には拘らざるものゝ如し。其の飄逸として世と關せざるや、後のロセッチを相似たり、或は十八世紀のロセッチとも評すべきか、後者が彼れを傳したるは意氣の相投するものありしに因るならん。ブレイクの性質はかくの如く飄逸なり、されば其の生まるゝやバアンスに先だつこと一二年、其の逝くやバアンスに後るゝこと數十年なりしが、其の一代の詩風には殆ど何等の影響をも與へず、最近年までは、所謂批評家仲間にするも、其の眞價を認めらるゝに至らざりき。其の處女作は“Poetical Sketches.”と題したるものにして、“Mad Song.”と題したるは其の傑作なるべしと稱せらる。其の他小品尠からず。又別に『エドワード三世』と題したる甚だ亂雜なる結構の一劇

詩あり、エリザ劇を模して作りたるものなり、全軀としては、どり、えなければ、處々に挿める歌曲には三唱すべき妙致も、甚からずといふ。

ジョージ、クラブは、其の着想に於ても、其の格律に於ても、全く保守派の詩人なり。而も其の好尚の十八世紀的ならずして、十七世紀的なる所、クラブの一俊才たる證左なり。蓋し彼れは陳腐、浮虚の時尚に盲従することを屑しとせざりしなり。クラブの詩人的爛眼は、流石に十八世末葉に於ける詩風の爛敗を看破し、いづこにか新模範を求めざるべからざることを悟りたりしなり。さもあれ、惜むらくは、其の眼の未來に及ばで、只管に過去に向ひ、理想を十七世紀の詞壇に求めて、竟にドライデンに安住するに至りしことを。是れ彼れが退嬰詩人たるに終りし所以なり。もとより同代の作家にして、其の詞壇革新の最初に於ては、眼を過去に注がざりし者殆ど無し、ローマン派の諸作家はいふも更なり、詩壇革命家の張本たりしコールリッチ、ウオツオスの徒と雖も、其出陣の當初には熱心なる古謠研究家たりしこと勿論なり、而もコールリッチの徒は古きを温ねて新しきを創始し、詩風の革新を鼓吹せしに、クラブは依然彼岸に留りて歸らざりき。

クラブの作は前後二期に亘れり、彼れは十八世紀末の作家としては、バアンス、クーパー、ア、ブレイクと並べ稱すべく、十九世紀の作家としては更に後章に紹介すべきなり。其の命長かりしゆゑに、作もまた甚からず、其のうち「The Village」(一七八三)、「The Parish Register」(一八〇七)など名高し。クラブの事は尙後に退叙すべし。

詩人たるの天分に於ては、二人共に、或は當代に最勝位を占めたるなるべしとまで思惟せられながら、一人は天壽を假さざりし爲に、一人は克己勤行の足らざりし爲に、功を九仞の幾十簣に缺きし者二人あり、其の一をサミュエル、コールリッチとし、其の二をジョン、キーツとす。

サミュエル、コールリッチは千七百七十二年デブンシャー州セント、メレーなるオットリーの牧師が家に生まれき。九歳にして父の牧師を喪ひ、救兒院にて養育せられ、十年を経てケムブリッジの大學に入り、そこにて詩歌、哲學、神學等の書を耽讀し、漸く時勢の非なるを慨し、一千七百九十三年、遂にユニテリアン宗に歸依し、爲に其の給費生たるの資格を失へり。剩へ、そのころは時々同志を集めて暴飲夜を徹するが如き振舞ありければ、負債山積し、遂にケムブリッジを去らざるべからざることゝな

り、偽名して一時軍隊に投ぜしが、事顯はれ、再びケムブリヂに送致せられき。同九十四年プリストルに徙り、こゝにて小劇詩“The Fall of Robespierre”を作しき、これ其の處女作なり。これよりユニテリアン宗の教旨を説くことと新聞紙に寄書するとを以て業となし、同年“Sonnets of Eminent Characters”を“Morning Chronicle”の誌上に連載しき。二年の後自ら“Watchman”と題せる一週報を發行せしが、十號にして廢刊し、去りてテザア、ストーニーに徙りぬ。此處に過ごし、二年間は其の最好詩篇の成りし年なり。同九十年“The Rime of the Ancient Mariner”をウオヅナオスが新詩集に寄す。同年傑作“Christabel”亦成りぬ(千八百十八年出版)千八百年ロンドンに轉居し、『モオニング、クロニクル』に筆を執る。其の傑作の短詩は大抵これに掲載せられき。此の際精勵して一大作を物せん^の志ありしが、不規律なる生活の馴致せる習癖は、酒と阿片との爲めに愈々甚しくなり、糊口の爲めには筆を握るだに懶く感じて、遂に去りて獨乙に遊び、そこにて若干の作ありき、中にもシルレルが劇詩『アーレンスタイン』の翻譯の如きは原作に勝る好辭なりと稱せらる。同十年雜誌“Friend”を發行せしが、程もなく中絶しき。これより不幸打ち續きしかば、同十

六年には其の妻と家族とをサウヤーに托して、復たロンドンに赴き、ハイグートなる外科醫の許にて晩生十九年を支ふるの道を求めき。“Biographia Literaria”“Zapola”“Aids to Reflection”“Table Talk”“Remains”等はこの間に成りしものなり。一千八百三十四年歿しき、齡六十三。

上に擧げたる作の中にて、『エンシメント、マリチア』及び『クリスタベル』の如きは、其の短詩『クアレ、カン』及び『戀』の二篇と共にコールリヂが四傑作と稱せらる。總じて革命時代に出でし詩人、殊に湖畔派の詩人は思想の斬新なるを以て著はれしが、中にもコールリヂの如きは其の最も清新なるものなりき。然れども之れと同時に、彼の派の弱點は最も著くコールリヂが詩にあらはれたり。所謂弱點とは情の爲めに詩を弄する嫌あること是れなり。彼等は如何なる詩題に遇うても情を唯一の具となせりしが、其の情やあまりに度に過ぎたり、テーマが「馬鹿らし」と嘲り、セインツベリ氏が「虚飾を脱して虚飾に入る」と評せしものは是れなり。而してコールリヂが『戀』の篇は其の極端なるものなり、プレトリーの戀愛と稱するも尙妥ならざる觀あり。然れども其の格調の流麗にして詩林の整備せるは新流の詩人中彼れに

及ぶものなし。クレーク曰はく

「コールリッパの詩にはパアンズが詩に見るが如き脈管に溢るゝほどの熱血もなく、ウオオ
グチオスが詩句に屢々見る家常談話の格言となるが如きものも稀なり、而も二子の彼
れに及ばざるは其の想像の Compact なる點にあり。彼れが失はスペインサアの失に同ト
くあまり純粹に詩的にして詩的ならざる何物をも容さざるが如き點是れなり」と。

以上は詩人としてのコールリッパの評なり。彼れは亦た一方に於て頗る有力なる
批評家なりき。彼れは頗る獨乙哲學の感化を受けたり、されば堅く一種の主義を
持して、盛に論辯し、批判せりき。晩年ハイゲートの僑居にありし時、其の崇拜者は
彼れが詩歌哲學、神學の談論を聞かんとて處々より集會し、皆詩人としてより批評
家、散文家として彼れを尊重しき。殊に彼れが英國に於て、シ、エ、ク、ス、ギ、ヤ、研究の開
山たりし功は永く忘るべからざるものなり。

ザン、キーツが生涯は以上の諸詩人中の最も短き者なり。而も其の詩人たるの
資格は、其の最も秀でたるものゝ中に就いて最も秀でたりし一人と稱美せらるゝ
ことを記せざるべからず。一千七百九十五年に生まれたり、馬寮の小吏が子なり。
家貧しく、學校に入る能はずして近隣の私塾に通學せしが、幸ひに其師友を得て其

の學力を養へりき。十五歳にして一外科醫の弟子となり、こゝに七年餘を費し、
が、一千八百十七年始めて其の詩集を公けにし、所謂コックチー派の主領リ、ハント
及びハズリットの知遇を得、これより師のもとを辭し、少許の金を懷にして、颯然英國
の各地方を巡遊しき。其の詩篇 "Endymion" はウェート島に於て成りしものにて、千
八百十八年に出版せられき。後ち伊太利に漫遊せしが、一千八百二十一年肺を患
みて斃れき。齡僅かに二十六。

キーツの生涯は是くの如く短期なりしかば、其の有數の天才たりしにも拘らず、其
の作尙甚だ少く、且つ其の詩形の如きも未だ圓熟の域に達せずして止みにき、而も
其の作の多くはコールリッパ、シエリ、サウシー等の作に比して遜色なきものなり。
彼れが聲價は近年に至りて更に大に上りぬ。セインツベリ氏の如きは曰はく

ローマンチック派の大氣運が特に生みし兒は、疑ふらくは只一のキーツあるのみ、彼れは
純粹單獨に感して作せり。蓋し、コールリッパ、ウオオグチオス、スコット、サウシーの如きも、い
づれも感ぜずして作りたるにはあらねど、彼等は本來作者なりしが故に、作しつゝある
間に此の思想を得る便もありしならん。キーツが生れながらに其の感を有せしとは
同日の論にあらず。其の他、バイロンは根本的に此の思想に反對し、ただ時々相接せ

しこざあるのみ。シェリーに至りては天人の群なり、人とすら稱し難し、況や英國人の稱をや。實にキーツは現世紀に於けるあらゆる詩人の祖といふべし。彼れはテニソンを生み、而してテニソンは他の詩人を生みしなり。キーツの功績と價值とを評し得て、要を悉せりといふべし。

六二〇

トマス、カムベル(カメルとも)は保守派の詩人なり、其の主題は間、流石に新様の色を帯べるも、其の作風はローマン派といはんよりは寧ろクラシック派といふべきものなり。一千七百七十七年クラスゴーに生れき、保守政黨の一人なり。同九十九年『期望の樂み』("The Pleasures of Hope")を出版して詩名を一代に知られき。これより獨逸に遊び、ホーヘンリンデンの戦を視察し、國に歸りて其の不朽の名作『爾ち英國の水兵よ』("Ye Mariners of England")及び『バルチックの海戦』("Battle of the Baltic")を作りき。これより"Gertrude of Wyoming"、其の他二卷の詩集を著しき、概ね劣作なり。かくて名譽の生涯を経て、一千八百八十四年に歿しき。カムベルが作は件の二軍歌を除くの外は、殆ど取るに足るものなし。凡そ保守派に屬する詩人け別に大なる天才なきも、少しく儕輩に擢んづる伎倆あらば容易に其の名を成すを得べきのみならず、彼等のうちや、高上なる力を有する者に至り

ては、佳作二三を出だすとに多く困難を感じざるべし、然れども元來靈活の想像力を有するに非ざれば、其の常作に至りては概ね無氣力、平凡なるを例とす。要するに、彼等は稀有の大才にもあらず、さりとて流石に庸才にもあらず。カムベルが如きは其の一例なり。尙カムベル以後テニソンに至るまでの間に名を著はしたる詩人の記憶すべきものを擧ぐれば

トマス、ムーアは其の一なり。彼れは愛蘭の詩人なり。一千七百七十九年に生れ、一千八百五十二年に歿しき。ロンドンにてパイロンが無二の信友たりき。其の『パイロン傳』はこれが爲めに成りきといふ。一千八百十三年"The Twopenny Post-bag"を作しぬ、有名なる諷刺詩なり。同十七年長篇の叙事詩"Tailla Rookh"を出版し、次いで諷刺詩"The Fudge Family"を著しき、これをその名作とす、快活の氣全章に溢る。其他"The Epicurean" (及び『天使の戀』"Loves of Angels")等皆名あり。

リー、ハントは其の二なり。彼れはロンドンの人、千七百八十四年に生れき。初めより家兄を扶けて新聞事業に従事し、用意周密の批評家として群輩の上に卓出

せりき。はじめてキーツが靈才を觀破し、之れを世間に推獎せしはハントなり。韻語の作にては“Nile”は莊麗、“Jenny Kissed Me”は流麗、其の他“Abou ben Adhem”“The Man & the Fish”等なり。一千八百五十九年に歿しき。

サミュエル、ローザアスは其の三なり。彼れはこの一群中にての年長者なりき、一千七百六十三年に生れき。同八十六年『記憶の樂み』(“Pleasures of Memory”)と題せる詩篇を作して其の名を世に知られたり。次ぎて『コロムパス』、『チャクリン』等を作しき。一千八百五十五年九十五歳の高齡に達して卒しぬ、其の作いと少し。

ウォルター、サエージ、ランドアは其の四なり。彼れは散文家としては佛のユーゴに似たる筆致を有せり。詩人としてはキーツ以後に於て最先に名を知られし作家なり。著はす所甚だ多し、其の處女作“Gebir”はミルトンの風調にローマン派の詩趣を加味したるものなりしが、其の當時には世人の一顧をだにも得ず、纔かにサウシーとデクインシーとが其の異品たるを認めたりしのみ。後年の作に係る“Rose Aymer”及び“Divee”は短篇ながら佳作なりといふ。一千七百七十五年に生れ、一千八百六十四年に歿しき。

S. Rogers.

W. S. Landor.

W. L. Bowles

ウィルヤム、ライル、ポールズは其の五なり。一千七百六十二年に生れき。オックスフォード大學を卒業して後著述に従事し、先づ『短歌十四首』を公にす。“At Tynemouth”及び“At Bamborough Castle”等や、名あり。

以上の外、チェームス、ホッグ(一七六三—一八五五)、トマス、ロエル、ベッドリス(一八〇三—一八四八)、リチャード、ヘンヂスト、ホオン(一八八四死)、レチシヤ、エリザベス、ランドン女史(一八〇二生)、ヘンリー、ティロア(一八八六死)、トマス、フッド(一七九八—一八三九)等、また多少名聲ありし作家なり。

第六章 新代小説家

パアチー女史の晩作——恐怖譚の流行——リユサスとマチューリン——其の傑作『メルモツス』——オースチン女史とエッヂチオス女史——エッヂチオスが諸作——オースチンが諸作——オースチンが位置——歴史小説——スコット——其の他の歴史小説家

第十八世紀の編に叙説せし如く、同紀末に於ける小説の著述は頗る饒多なりしのみならず、其の作家のあらはし、技能の如きも往々にして頗る秀拔なるものもありしが、尙仔細に觀察すれば、次期即ち十九世紀の始までは、小説の氣運尙未だ熟せ

ざるの趣ありき。さきに『エヴライナ』を著して名を騒壇に揚げたりしバアチー女史は、彼の作に續いて、時の讚評家が完璧とたゞし『Cecilia』と云ふ一作を物し、今世紀のなかば近くまでは存へしが、後年世に出だし、『Camilla』(一七九六)、『The Wanderer』(一八一四)の如きは、要するに、失敗の作と評すべきなり。爾後女史はまた指を小説に染めざりき。

此の時に當りて、曩に佛國より入り來りて政治社會に急激の思潮を傳へたりしチャコピン主義斥けられ、隨うて十八世紀風の哲學も漸く衰へ、彼のゴドキン、ホルクロフト、ペーヲ等が作りし、半ば政治的にして半ば哲學的なる小説も讀書社會に饜かれ、其の蹤を追ふ者も全く絶えにき。然るに所謂怪談物、殘忍談、Tale of Terror(恐怖譚)を作する一派のみは、此の際依然として世人に歡迎せられたり。其中奥の祖マッシュー、リキス Matthew Gregory Lewis(一七七五—一八一八)といふは十九世紀の初めにいで、其の文名を轟かし、これと同時にチャールズ、マシューリン Charles Robert Maturin と云ふ作者出で、やがてはリキスを凌ぐ程の人氣ありき。マシューリンは一千七百八十二年に愛蘭土に生まれ、一千八百廿四年同處にてみまか

りぬ。はじめは職を教會に奉ぜりしが、性あまりに矯激にしてかゝる事に成功すべき望なかりしかば、後には心を文學に傾け、作する所の怪談甚からざりき。就中其の悲劇『Bertram』は、コールリッヂに酷評せられたりしにも係らず、スコット、パイロン二家の徳憑によりて、ドリュエリー、レイン座の場に上せられ、一時世の喝采を博したりき、但しその後上場せし同人が作『Manuel』及び『Fredelpho』は皆失敗の作なりき。又説教集をも出版せり。但し、彼れが文界の眞生命は此等の諸作には存せずしてむしろ其の小説にありといふべし。彼れが三十歳以前に假名にて出版せし小説三種あり、曰はく『The Fatal Vengeance』 or 『The Family of Montorio』曰はく『The Wild Irish Boy』曰はく『Milesian Chief』是れなり。尙『Melmoth the Wanderer』及び『Albigenses』等なりの數篇あり、『Women』(一八一八)、『Melmoth the Wanderer』及び『Albigenses』等なり。此の中『メルモッス』は傑作と稱せらる、これは延命の報酬として靈魂を惡魔に賣らんことを約し、估者若し我が手中より他人に靈魂を取り去らしむることあらば、直に破談たるべしといふ約束を脚色の骨子として作りたるものなり。譚の筋あまりに煩雜にして岐談の多ければ、冗漫に流れ、且つ此のたぐひの作に通例なる

甚しき誇張の筆致多きため、全軀の調諧を傷りたる失はあれど、尙ほ其の一代を震憾し、殊に佛の名家バルザックに影響を及ぼし、今に至りても幾分の譽を失はざるを見れば、『メルモッス』もまた有力と稱しつべし。此の書行はれて同種類の著簇々として續きいでしが、それらはなべて覆響の料たるに過ぎざりしなり。之れよりさき、オースチン女史は、既に幾たびも彩筆を揮ひて著す所一二のみならず、ざりしが、上梓の機を得ざりし間に、マリヤ、エッチャオス女史の爲に敢なくも一步を先んぜられき。マリヤ、エッチャオスは愛蘭土にて相應の資産を有せし市人の女なり、一千七百六十七年に生まれ、一千八百四十九年に逝りき。女史は身を終るまで、文名を保ち得て、言行はた其の名に愧づる所なかりき、剩へ近時に至りては、令譽更に一段を加へたり。スコットは女史を推稱して、おのが作れる蘇國小説は女史の愛蘭土小説に負ふ所尠少なざる由を謂へり、但しスコットの如き好人物は間、他人に對して過褒を惜まず、却りて中正を得ざることあり、悉く信ずべからず。こゝに女史が小説の重なるものを擧げんに、『Castle Rackrent』(一八〇一)は純粹の小説たる趣致には乏しけれど、愛蘭土の地主等が無慚放埒にして一二代間に産を

破り、流離落魄するありさまを現寫せる一大繪卷物とも見るべし。さて女史が作中精巧を以て優れるは、『Belinda』(一八〇三)は十八世紀末の婦女の遊惰蕩逸を活寫して躍々たらしむ、又『Tales of Fashionable Life』のうちには妙篇『Absentee』あり、又『Ormand』の靈活なるは『ラックレント城』に伯仲す。その他千八百三十四年に『Helen』を作せしまでに尙ほ若干の著作あり。女史また消息文に長じき、夙に其の作を蒐集して之れを印刷に附したりしが、其の廣く公にせられしは一千八百九十四年のとなり。女史の父リチャードは好學の士なりき、當時流行の佛國的自由思想には感染せずして熱心に功利説を奉じ、經濟論を究めたりし人ながら、さすがに佛國哲學者の教育論、社會論等は幾分か味へりしものゝ如し。女史が壯年の作物には父の意見の影ほの見ゆるもの多し、而も作としては之れが爲に益を得たる所ありきとも見えねど、『The Parent's Assistant』その他、専ら少年向きにとて作りし著述、及び清爽なる『Moral Tales』(教訓譚)は多少間接に父に負ふ所ありしが如し。按ふに、小説家たるの資格よりいへば、上に擧げたる外に、『Temora』、『Harrington』、『Funnis』並びに女史が作の最長篇『Patronage』の諸著をも合せて、エッチャオスは、ペアチーを殿とせる

十八世紀小説家とオースチンを前驅とせる十九世紀小説家との中間に位すべき作家なりと稱すべし、是れ一にはエッチャオスが聞睹せし社會その物が過渡の状況にありしにも本づくべけれど、二つには女史の性情、思想及び文致の、何れかといへば舊時代に近く、彼の晰然たる近世風、瞭然たる普遍的氣脈を缺く所ありしに職由せずんばあらず。女史は天才に遠からざるいみじき技能を有し、且つ滑稽にも、女史の著“*Essay on Irish Bull*”及び小説、書簡文等を讀みても知らるゝ如く、長じたりしが、惜むらくは總じて最も肝要なる用意を誤りたり、すなはち女史は個人といはんよりも寧ろ類型といふべき若干の愛蘭土人の外には多く人物を描くこと能はず、動もすれば所謂偶人を作りて魂を入るゝことを忘れたる概あり。要するに、女史の筆法は極めて爽快なれども確實ならず、圓滿に話説し得れども創意の圓滿を缺くこと屢なり、隨うて自ら眞に創造し得たりといふべきものは、殆ど無し。さもあれ、上に引けるスコットの言を信心得べくば、此の閨秀が間接に創製せし所は流石に乏しからざりしものゝ如し。

ゲーリーン、オースチンの地位は頗る前者と異なれり、女史は千七百七十五年十二月

十六日ハムプシャ州なるステヴントンに生まれき、該地の牧師の女なり。概ね郷土附近の地に住して平和靜穩の生涯を送り、常に中等社會の地方士族カントリー・ジェントルメンと往來せりき、蓋し女史の一家も件の階級に屬したりしなり。女史は一たびも嫁せずして一千八百十七年七月二十四日ウインチェスターにて永眠しき。女史が小説の完きものは六篇あり(一)“*Sense and Sensibility*” (二)“*Pride and Prejudice*” (三)“*Mansfield Park*” (四)“*Emma*” 是れなり。以上は其の存在中に(前後七年の間に)あひくに發兌せられ(五)“*Northanger Abbey*”と(六)“*Persuasion*”とは死去の翌年世に出でき。さて此等の作がいづれも世の好評を博して女史の名の一代に高かりしは偶然にあらず、其の非凡の價値は夙にスコット以下第一流の批判家に認められ、現今に至りては其の光譽いよく加はりぬ。按ふに、オースチン女史は、スコットと相並びて十九世紀小説の双親とも稱しつべし、詳にいへば、若しスコットにして十九世紀に於ける傳奇ロマンティック歴史物ノベルの父たらば、オースチンは正に十九世紀に於ける小説ノベル(世話物)の母なるべし。女史が巾幗の身にして十九世紀の新文運の魁たりしこと、最も驚くべし。其の處女作は、其の出版の月日よりいふも、近世風なる同位の他作家の先んじたり、而し

て其の價值よりいへば、彼此相比較するだに殆ど全く不當の沙汰たらんとす。夫の“Northanger Abbey”の如きは、稿成りて後廿年の久しき間、篋底に藏められ、“Pride and Prejudice”（此の篇最も人物の性格をあらはせる上乘の作の大跡も略、同じ頃の起草なりきといふ。是れに因りて之れを觀れば、一方には結構、脚色にこそは稍、近世風の趣あれ、着筆、落想の鹽梅は彼のリチャードソンの小説よりさへも寧ろ十九世紀的氣脈に疎き、パアチー女史が作“Camilla”の世にもてはやされし時に當りて、他方に妙齡の一女ありて、服装、言語などの皮相をだに除けば、現に生活する近世男女と毫も異ならざる幾多の人物をば如意自在に描きつゝありしこと事實なるが、是れ豈奇なる對照にあらざや。

さもあれ、オースチン女史の美妙なる天才も未だ善美を盡せりとは稱すべからず。例へば、甲は其の外形に舊套の致あるを嫌らず思ふべく、乙は其の女性批評家の特長たる細緻なる反語を解せざるべく、若しくは好まざるべく、第三流の讀者は其のあまりに穩健にして激越ならざるをあかず思ふべし。近世の批評家、或は女史をそしりていへらく、オースチン女史の筆法をたゞふるは男子の力負けなり、こは婦

人に具はれる綿密なる半諷刺的觀察を文學上に應用せるに過ぎずと。さりながらこは勿論酷評なり、按ふに、かくの如き評者は、然らばオースチン女史と前後して出でし女流小説家中に能く此の女性的天賦を發揮せる者のなきは如何なる理ぞ、といふ反詰に遭は、恐らく其の答にたゆたひ、其の語窮せざるを得ざるべし。

オースチン女史の筆法には、フィールディングとリチャードソンの長所をや、低き度に於て結合し、これに近世の彩色を加へたるが如き趣あり、すなはち彼れの如く豊饒機敏ならざれども、眞摯と生氣とはむしろ彼れに優るべし。而して精到なる反語に女性の倂を寓したる、對話の筆致の繊細なる、乃至人心の動機及び諸種の氣質の分析の緻密を極めたるなど、頗るリチャードソンに似たる所あり、女史は近世小説壇の一明星といふべき也。

オースチン女史が小説の特質かくの如く、而して其の讀書社會に對する勢力はた頗る大なりし時に方りて、**歴史的小説**の別派北の方蘇國に起り、非常の勢ひを以て讀書界を風靡し來たり。所謂別派とは既に第六章にて語りたりしローマン派を指せるにて、ウオルター、スコットは其の錚々たる代表者なり。夫れ歴史的小説

歌及び小説の作者はスコット以前内外幾十百なるを知らずと雖も、未だ曾て一人の彼のスコットの如き成功を博せざりしは何故ぞや。一人の未だ曾て彼れの如く世間の歓迎を得ざりしは何故ぞや。

按ずるに、第十八世紀の中葉までは、英國と大陸とを問はず、學者の史に對する觀念は、他の記録、年表等に對すると大差なく、學者、讀者共に、或時代の史とは該期中に起りし事件の死記録とのみ思念せりき、されば當代の思想、感情若しくは國風、國粹の如きは悉く之れを度外視し、季候、風土、習俗の如きも絶えて其の注意を促さざりき、隨うて史の多數は極言すれば學理上に何の益もなき死記録たりしなり。史に對する觀念かくの如くなりしかば、所謂史的小説、史的詩歌の如きも今日の物とは趣を異にし、或時、或處、或特殊なる人情、思想と其の季候、風土、習俗とを描寫し、若しくは驅歌せるものにはあらで、たゞ現代、現土の人情、風景に過去の人名、地名を附したるに過ぎざるものなりき。かゝりしかば讀者はたとひ幾百卷を繙くも、之れによりて過去を知り、異邦を視るなどの感あるべくもあらず、况んや榮枯消長の大法、進化必然の理脈などを窺ふことをや。當時の歴史小説の人生に對する關係は、歴史其の

物にひとしくいと微少なる者なりしなり。此の時に方りて革命の急潮歐洲の全土に氾濫し、政治の新主義は佛蘭西より迫り、新哲學思想は獨逸より來り、此の潮氣いつしか多感の詩文人を動かし、詩歌に哲學派の起りしと共に、小説、脚本にローマン派起り、而して彼のサウソーの如きは論客をも兼ねたりし由は、己に第四章に述べたるが如し。スコットはた此時に出でたり。彼れはもと理論家ならざりしかば、辯論に其の主義を發表せしことはなけれど、流石に無意識の間に時の潮氣に感染し、其の作に於ては不知不識の間に其の主義をほのめかせり。彼れの封建時代を寫すや、及ぶ限りはそを活寫せんと勗めしなり。スコットが筆は、所詮、封建的人情の眞底に透るに至らざりしかど、國土、山川、景致、風俗の微は流石に過去のまゝに描かれたるが如き概あり。換言すれば、明かに歴史小説の半面程を成功し得たるなり、兎に角に彼れが史的小説は、從來の作に比して、幾段か人生の眞に近づきたりしものなり。スコットの當時にもてはやされしは、職としてこれに因れるか。(尙ほ其の時人に愛顧せられし諸縁は前の第四章を參照すべし)。

スコットが摸倣者は彼れが生前にも輩出せしが、今下に其の重立ちたる人々を擧ぐ。

ジェームズ G. P. R. James (一八〇一—一六〇) と エインスオス Harrison Ainsworth (一八〇五—八二) とは共に多作を以て著はれたり。殊にジェームスは歴史的小説以外にも筆を執りしかば、其の作數十篇に及び、處女作 "Richelieu" を始めとして "Darnley" "Mary of Burgandy" "Henry Masterton" "John Marston Hall" 等は皆其の名を成し、作なり。エインスオスは歴史小説専門の作家にして "Jack Sheppard" "The Tower of London" "Crichton" "Rookwood" "Old St. Saul's" 等の作あり、兩者の技倆を比するに、ジェームスは史乘の智識該博なりしかば、其の穿鑿ローマン派以上に出で、間々當代の真相に庶幾したる例もありき、但し事件の結構、人物の對話等には未だ技倆の圓ならざる處多し。エインスオスは風俗摸寫の點は到底ジェームスに及ばざれども、敘事、對話の妙は讀者を感ぜしむるに足る。されど、要するに、兩者共にスコットが摸倣者たるにとゞまり、其の長所だにも詩人としてはスコットが範圍以上に出づる能はず。

スコットの繼續者中、蘇格土の小説に於て最も著はれたりしものを ゴールト John Galt とす。千七百七十九年 エールシャヤに生れき。該地方の風俗は彼れが作中に

最もいみじく寫しだされたり。父は西印度會社の罷職船長なりき。ゴールトの傳は詳かならねど、兎に角變化浮沈に富めりしもの如し。一千八百四年 ロンドンに赴きて文學の業に就きしが、後ち郷に歸りて "Ayrshire Legates" 及び "Blackwood" を著して名ありき。同二十一年、加奈陀商社に入りて北米に航せしが、業意に満たずして復た國に歸り、流離窮困の後、同三十九年に歿しき。ゴールトが詩歌、劇詩は、概して批評する價值だになきものなり、然れども多少ユーモア(諷諧)の才あり、殊に小説に於てそが郷里の土情風景を寫し得て眞に逼れる、慤くも一讀の價ありとせむ。"Ayrshire Legates" "Annals of Parish" の如きは是れなり。Sir Andrew Wylie "The Entail" "The Provost" 等亦名あり。

尙此の他にもゴールトと時代を同うし、且つ少多の作ありて其の伎倆彼れとや、伯仲せりしものに、第一 Dr. Moir (其の作 "Mansie Wench" 名あり) Mrs. Morgan ("The Wild Irish Girl" の著者) John Banim ("O'Hara Family" の作者) Crofton Croker ("Fairy Legends" の作者) 等あり。

フックは Theodore Hook (一七八八—一八四一) は ショール ヲ四世及び ウィルヤム 四世の

治世中に最も名聲ありし作者なり。富有の家に生れて十分の教育を受け、後ち小説家となりて盛名を得しのみならず、新聞記者としても成功し、其の政黨に對する諷刺文の如きは、今尚ほ讀むべき價值ありと稱せらる。然れども其の小説 *Sayings and Doings* "Gilbert Gurney" "Gurney Married" "Maxwell" 等に至りては、其の趣向概ねスモーレットより得たるものにして、其の文章はた蕪雜不明の個所多し。

ブルリアリントン Edward George Bulwer Lytton (世にリットン卿と稱す)はケムブリヂの人なり、一千八百年に生れき。幼きころ既に詩歌の作あり、一千八百二十五年には詩によりて司法卿の賞を得たりき。後ち國會の議員となり、職に在ること十年、同二十五年男爵に叙せられ、後ち殖民長官 Colonial Secretary となりて同七十三年に歿しき。リットンが文學上の生涯は政治上の生涯よりは一層光榮あるものなりき。其の處女作 *Falkland* (一八一四)は匿名にて世に出だししが、時人の評判はとり／＼なりき、さて、次ぎの *Pelham* を公にするや、初めて其の名を署せしが、此の作一層の成功なりしかば、其の名忽ち全都に喧傳しき。これより四十五年間絶えず著作に従事し、時様小説、罪人小説、古奇譚及び歴史小説等の作通じて數十篇の

多きに及びたり。其の名最も噴々たる *Paul Clifford* "Eugene Aram" "The Pilgrims of Rhine" "The Last Days of Pompeii" "Ernest Maltravers" "Zanoni" "Rienzi" "The Last of Barons" "Harold" 等には妙處趣からずと雖も、其の缺點はた著きものあり。リットンは夙に時好に應じて家庭小説を作りしが、これはた同様の成功を得たり、其の作 *The Caxtons* "My Novel" 及び *What will He do with It* の如きは、或種の讀者には、其が最傑作と稱せられき。一千八百六十一年家庭小説より一轉して神怪譚を作し、先づ *A Strange Story* を著し、次ぎて *The Haunted and the Haunters* を物しき。後者は同種類の小説中最も完全なるものと稱せられき。晩年に至りて又た社會小説に轉じ、寫實と諷刺とに力を用ひき。"The Coming Race" "Kenelm Chillingly" 及び *Parisians* (此の篇歿後に出版)の如きは是れなり。

按ふに、多能健腕、彼れの如きは稀なるべし。小説上にかばかり多く著作ありし傍ら、彼れは數篇の脚本をも作しき、就中 *The Lady of Lyons* "Richelieu" 及び *Money* の三篇は、演じ得べき脚本として見るべきものなり。此の間また詩作を絶たず、創作には概して失敗したれども、シルレルの翻譯は佳と稱せらる)又 *New Monthly*

Magazine”に關係して時々諸種の評論を寄せにき。實に、多作の點に於ては、十九世紀中彼れに及ぶもの殆どなしと評しつべし。

現今に至りては、彼れは痛く所謂評論家の爲に貶せらるれど、公平に評すれば、これは例の一時天才視せられし反動の結果たるに外ならず。彼れが作に缺點のいと多きは争ふべからざれど、流石に他の企て及ばざる妙處もなきにあらず。或は曰はく、彼れが缺點は歸一の薄弱なると誠實の乏しきとにあり。其の時尙を追うて様々の作を著し、は、とりも直さず、彼れが本領の確立せざるを證するものなりと。此の語よく彼れが病根を指摘し得たり、さもあれ、是れやがて彼れが長所の存する所にして、物に應じ、事に隨うて、自在に其の筆を替へ得るは、所詮尋常文才の企て所ばざる所なり。セインツペリ氏は曰はく

彼れが文才は底、淺き、肥土の如し、如何なる草木も急速に萌芽し生長するを得べし、而も程なく凋落に至るを免れず。

と評し得て甚妙なり。

第七章 ギッケンス及びサッカレ

ギッケンス——其の畧傳——其の諸作——其の價值及び特質——サッカレ

——其の畧傳——其の諸作——其の特質と價值

ギッケンス、ギッケンス は一千八百十二年ハムプシャヤなるランドポットに生れき。父はポットマウスなる海軍局の書記なりしが、ギッケンスが九歳の時其の職を罷められしかば、ロンドンに歸りて貧困の生を送れり。さればギッケンスは十一歳にして其の親族に寄食せざるべからざる身となりて靴墨製造の業を見習ひしが、程なく父と件の親族と間に隙を生ぜしかば、其の家を出で、ロンドンに歸り、始めてカムデー街なる一小學校に入學しき。かくて三年の後、父は議院の吏となり、ギッケンスは一狀師の事務所には雇はれ、専心法律を學び、十九歳の時には父の職を嗣ぐを得たりき。一千八百三十一年より同三十六年に至る間に “The Sun” “The Mirror of Parliament” 及び “The Morning Chronicle” などの著あり、 “Sketches by Boz” も此の最後の年の出版なり。同年また有名なる “Posthumous Papers of Pickwick Club” を著しぬ。同三十八年 “The Pickwick Papers” “Oliver Twist” 及び “Nicholas Nickleby” を同四十年 “Master Humphrey's Clock” “The Old Curiosity Shop” 及び “Barnaby Rudge” を作しき。

中にも『The Pickwick Papers』は稀有なる好滑稽小説としてもてはやされ、『Master Humphrey's Clock』に至りては其の發賣冊數七萬に達しきといふ。彼れが小説の人氣は直ちにスコットの作のに次げりき。後ち二年を経て、北米を巡遊し、歸國の後『American Notes』の著あり、こは銳利機慧の觀察によりて仔細に米國人の長短を評騰したるものなり。翌年『Martin Chuzzlewit』の初篇及び最も成功せし短篇『Christmas Carol』を物しき。同年遠くセニアに遊び、『Martin Chuzzlewit』の稿を終へ、同十四年にはロンドンにて『日々新聞』の主筆となりしが、幾程もなく退社しき。さて同四十六年より五十七年に至るの間には『Dombey and Son』『David Copperfield』(こは其の幾分は作家の閱歷なるべしと信ぜられたるもの)『Bleak House』『Little Dorrit』等の作あり。同五十年雜誌『Household Word』を發行し、同五十九年には『All the Year Round』を發行しき。後『Tale of Two Cities』『Great Expectations』『Our Mutual Friend』等の作あり。一千八百七十年『The Mystery of Edwin Drood』の未定稿を遺してみまかりぬ、齡五十九。

チャッテンスは學校教育を受けしこと乏しかりし人なり、故に博くは古人の作を讀み

しこともなく、隨うて其の作古人に負ふ所多からざりしなり。但し嚴密にいへばスモーレットとフックとよりは多少影響を受けし跡あり。彼れはかくの如く學植深からざりしかば、該博卓抜の識見は之れを彼れが作に望むべからず、而も此の缺點は偶、彼れをして深く中等以下の社會に同情せしめし所以にして、美術上の意見政治上の主義社會上の問題、其の何れを問はず、常に所謂中級主義を以て之れに對しき。且つやかゝる性習の必然の結果として、彼れは世の學を銜ふ者乃至倨傲なる上級社會に對して平なる能はず、其の筆を執るや絶えず此等の徒を諷刺冷嘲して止まざりしが、惜むらくは學者及び上流に關する聞見、其の間接の知識と共に乏しかりしかば、其の苦心の想像も上流の真相に達する能はず、隨うて其の諷刺も往々にして門外漢の落書にひとしかりき。

按ふに、無は何物をも生ずる能はず、此の失敗は其の力量の不足に由るよりは寧ろ其の境遇の然らしめし所なり。さもあれ、其の中級以下の社會に對する觀察は穿細實に驚歎すべきものあり。一たびチャッテンスの筆に上れば、人や事や、性癖や、服装や、其の笑ふべきもの、其の憫むべきもの、其の賞すべきもの、其の憎むべきもの、微に

入り、細に入り、言語や、舉動や、一々生きて躍らざるは稀なり。時を同うして此の伎備に於て彼れに匹敵し得しものは、恐らくは只だ佛の名家バルザックのみならん。而も尙嚴密に觀察すれば、此等人物の言語、舉動、性格も、多くは彼れが作中の世界にのみ活動するもの、現在には絶無にして稀有と評せざるを得ざるもの比々是れなり、されば彼れが作を讀む者、そらるに篇中の人物に同感して、憎み、笑ひ、悲しむと雖も、到底真に之れと同化し、共に功過を経験すらんやう感ずることは稀なり、是れ其の人物が往々ヂッケンスが作中の人物にして現世間の人物たらざるが故なり。之れを要するに、ヂッケンスの長所は其の剛健なる活氣と其の無盡藏の滑稽と其の顯微鏡的外面觀察となり、而して其の短所は誇張と不自然と膚淺と荒唐と浪瀆となり。

遮莫英國小説がヂッケンスの作に至りて一進歩をなしたるや争ふべからず。十八世紀の末より十九世紀の首へかけて、スコットが新に歴史小説の一躰を創製してより、天下靡然として之に倣ひたりし中に、ヂッケンスは所謂風俗的小説より脱化して別に寫實的社會小説を著し、遙かにリチャードソン、フィールディングが脈を紹きて更に

其の精微に入りたりしは、頗る多とすべき功績なり。此の點に於いてはウィツプルが説頗る其の要を得たり、曰はく

ヂッケンスはフィールディング、スモールレット及びゴールドスマス等が嘗てものせりし實際生活の小説を復興して、更らに之れに加ふるに個性の發揮を以てしたり。さはいへど、其の人物の思想の、所詮は作者が思想に外ならざる事は彼の二三家のと相同ト。彼のフィールディングが人物を表はすや、頗る巧妙なる伎倆を以てせり、彼れは其の人物の觀察者となりて、其の言動を評するに諷刺的滑稽を用ひながら、如才なく其の鏡を隠蔽せり、而も其の洞察は事相の根柢に透り、人物が云爲によりて人情の眞を捉ふるの妙、恰も彼れ等の自ら知るよりも多く知る所ありて然るものゝ如し。彼れが小説は其の脚色も自然、事の波瀾も自在にして圓滑、加之實際生活を描ける傍ら幾分か人生の秘音を傳ふるが如き感あり、是れ職として其の洞察眼の犀利なるに由らすんばあらず、ヂッケンスが眼は、事物の外形に對しては別にフィールディングと異なる所もなければ、其の向ふ所甚だ廣かりしを以て、勢ひ一切事相の眞底に達する能はず、且つ動もすればあまりに人工を用ふるの果は虚構に陥り、爲めに物の實相を失はんとせり、要するに、心的方面に於てはフィールディングよりも淺かりきと雖も、よく同胞の誠情を以て諸種の人物に對し、其の恩愛を叙し、其の哀傷を寫し、其の情感の優美にして純粹なるものを描

くの妙に至りては、夏かにフィールデンが上にあリ、云々。

と。兎も角も大跡に於ては、チッケンスはフィールデン等よりも一步を進めたりし作家なり。其の名聲近時大に降したれど、其の一大作家たるの譽れは長く英國文學史上に録せられて残るべし。

チッケンスが著は、小説の外に、詩歌と記叙文とあり、共に小説に比しては甚しく劣れるものなり。

十九世紀の中葉に於て、チャールズ、チッケンスと相併びて、文名一時に高かりしものをウィルヤム、メークピース、サッカレーとなす。其の生涯はチッケンスと大差なかりしも、幼時の境遇は頗る異なり。一千八百十一年印度カルカッタに生まれき。其の家名族なりければ、幼より秩序正しき教育を受け、小學校より中學校を経て、ケムブリッジなる神教大學校に入りしが、程なく父の遺産を受傳し、退學して佛京パリに赴き、畫工とならん心算なりしが、偶と過ちて悉く其の資産を失ひしかば、志を改めて文筆に従事し、先づ“Fraser's Magazine”といふ雜誌社に入りぬ。これより諸種の雜誌に關係し、後には“Paris”社に入りて諷刺の筆を揮ひたり、現

W. M. Thackeray.

に存する其の雜著集は甚だ浩繁なるものなれども、それすらも當時の著の只一部分に過ぎずといふ。彼れの筆は時の他文士のとは趣を殊にし、讀者を刺動する力當初はいと漠然たりしかば、世上の褒貶一ならざりき。此の風は獨り雜誌の文に止まらずして、一冊となりて現はれたる“Paris” (1840) “Irish” (1843) “Sketch-books” “Catharine” 及び “Barry Lyndon” 等はた然り。さもあれ其の滑稽諷刺の妙に至りては夙に具眼者の認むる所となれりき。普く世人のサッカレーが異才なるを認知せしは一千八百四十六年以後即ち其の傑作の小説 “Vanity Fair” の世に出でし後なり。(此の作は同四十九年に完結せられき。次いで “Pendennis” (小説) を著しぬ、こは隱然著者が自傳とも見做しつべきものなり。後ち評論の作 “The English Humorists of the Eighteenth Century” を著し、が、縦横自在に其の得意の筆を揮ひたるは、一千八百五十二年に作りし “Esmond” (小説) なり。『エスマوند』は此の種の作にては古今有數と稱せらるゝ者にして、女王アーン時代の人物、風俗を活現して躍如たらしめたる伎倆は彼の歴史小説を以て標榜せりしスコット等をして却走せしむるに足る。さて其の翌年より向う三ヶ年の間には “The Newcomes” といふ小説を作せり

風俗小説としては第一位のものたるのみならず時人の玩賞も亦第一位なりき。この作成りて後ち二年間にサツカレーは亞米利加に遊ぶと二回なりき、歸郷の後“The Four Georges”と題したる特色ある傳記を著ししが、これまた大に歓迎せられき。一千八百五十七年より其の翌年へかけて“The Virginians”を作しぬ、これも第十八世紀末の風俗人情を寫せるものにて、『エスモンド』と共に彼れが作中の双壁なり。同六十年再び雜誌記者となりて、“Cornhill Magazine”に“Lovel the Widower”及び“Philip”の二篇を掲げき。そのころ“The Roundabout Papers”と名づけたる叢書を出だしき、彼れが妙文の短きものは多く此の中に見いだすべし。同六十三年彼れは一生の力を傾注して最近の社會を描破したる一大作をものせんと思ひたちぬ、然るに起稿後幾ばくもなく病を得てみまかりぬ。脚本の作も一二篇あれど特に批判する程の價値なし。

サツカレーが作は、其の青年期のと其の最短篇とを除くときは、殆ど皆諷刺冷嘲の筆に成れり。作家が道德上の觀念は隠れたるが如くにして頗るよく現はれたり。社會の諷刺家としてはヂャクセスに比してサツカレーの高きこと數等なり。彼れ

を稱へて豫言者と言はんは過ぎたりとも過ぎたり、但し彼れを貶して他の戲謔者者流の斑に置かんは失當の甚しきものなるべし。彼れの笑の裏面には餘んの涙ありしことを記せざるべからず。

彼れの韻語また見所なきにあらず、其の名あるものは一千八百五十七年に出版せし雜著集中にも載せられたれど、其の本領の詩歌に存せざることば衆批評家の夙に認めたる所なり。按ふに、彼れは社會及び自然の事物を詩眼をもて觀若しくは感ずること能はざりしにあらねど、而も之れを觀若しくは感むたりといふは彼れの快しとせざりし所、即ち其の感慨情緒を在りのまゝに高唱せざるを良しとせりしなり、換言すれば、彼れは詩人的に事物を感ずるを惡しとせずして、詩人的に歌ふを女々々とせりしなり。曰はく、「歌ふも何の效かあらんと、蓋し一種の實際主義にしてやがて彼れの英國人たるを證する者なり。但し英國人はた人なり、他の南歐人と共に泣かざるにあらず、たゞ悲みて傷らざるのみ。眼は涙に沾ひながらも、心に毅然たる丈夫兒の相を失はずして、或は慰藉の道を講じ、若しくは救濟の方を案ずる、是れサツカレーの特質なり。此の熱情と此の真情とあるが故に、彼れは其の

小説中にて嘲諷せる人物に對しても、其の詩歌に於ては、時に哀切なる悲調を漏らせることなきにあらず、之れによりて詩歌が人心最底の聲なるを見るべし。要するに、サッカレーは詩情に乏しかりしにあらず、其の精妙なる想像、其の壯大なる詞調は、間々其の作中に於て見いだすを得べし。是れセインツペリ氏等が近時に及びて詩人としてのサッカレーを推稱するに至りし所以なるべし。

サッカレーが傑作の随一たる“Vanity Fair”は「男主人公なき小説」として名あり、されど女主人公と見做すべき者は二人あり、情なくして智あるリベッカ、シャープ女と智なくして情あるアミリヤ女と是れなり。前者は傲慢にして世才に富み、且つ大胆なる生得なるが故に、他の助けを借らで浮世を跋渉す、後者は温良貞淑にして可憐なれど、其の性や魯なるが故に屢々數奇の境遇に泣く。全篇諷刺冷嘲を以て充たさる、其の皮肉なる人生觀は間々人をして眉を擡めしむる事なきにあらねど、其の人物に至りてはさながら活きて躍るの概あり、以て能く前の惡感を解除す。且つ之れを咀嚼し來たれば、刺諷嘲諷の裏面に著者が同情の深く冷く潜めるを見る。

“Vanity Fair”に於て現代を描して成功したるサッカレーが筆は、“Esmond”に於て

Virginians.

百五十年前の風俗を寫破して同様の効果を收めたり。此の作者元來脚色を構ふるに拙なるが、此の篇もまた脚色の上に何の異彩もなく、彼の『ベンデンニス』と同工なり、即ちすべて記事を主人公カルテル、ヘンリ、エスモンドが自傳體となせり。只其のステュアート王統の末造に於ける言語、風俗を直寫して精を極めたるは驚くべし。此の作や、趣味の上よりいへば、彼れが小説中第一に位すべしと稱せらる。其の主人公エスモンドは彼のチャールズ、グランチンに依據する所あまりに多き嫌あれど、而も智仁勇兼備せる理想的英國人としては遺憾なきに近し。“Virginians”は其の後篇として作られしが、こはエスモンドが孫の傳なり、而して作としてもまた孫見ほどの價值あるのみ。

サッカレーは人物評傳にも巧なりき、“On the English Humorists”及び“The Four Georges”の如きは其の最も傑れたるものなり。

第八章 其の他の小説家

マリヤット—リヴァ—サスレー—ビーコック—ボオロー—

マーチノ—女史—ミッドフォード—女史—其の他

英文學史

第五編 近代の文學 第八章 其他の小説家

デッケンス、サッカレの周邊に輝けりし小説世界の小文星の主なるものは左の如し。

フレデリック、マリヤットは軍事小説を以て著名なりし作家なり。一千七百九十二年に生れき。少壯にして軍隊に入り、二十四歳の時既に一隊の指揮官たりき。ベルミースの戦ひの折には一艦の長に進みたりしが、自ら其の氣質の軍人たるに適せざるを悟りて、一千八百三十年斷然職を捨て、文筆に従事し、これより死に至るまで十七年間絶えず小説を著作せりき。作中の佳なるものを "Peter Simple" "Mr. Midshipman Easy" 及び "Jacob Faithful" などとす。趣向も、人物も、海上の風景を寫すことなども、重にスモーレットの軀に倣へるなり。隨うてスモーレットが缺點たりし人物及び事件の不規律乃至其の諧謔のわざとらしきこと等はマリヤットはた之れを遺傳し、且つ之れに加ふるに考案の粗雑と叙事の不精緻とを以てせり。然れども其の全軀の着想と滑稽とに至りては、流石に見るべきものなきにあらず。

マリヤットは韻語をも綴り得たりき、概ね粗俗にして鑑賞に適せずと雖も、稀には清

新なる作もありとぞ。

チャールズ、ジェームズ、リヴァは一千八百六年アイルランドに生れき。マリヤットよりは多様の境涯を経たる作者なりしかば、其の作のづから變化に富みたり。彼れはダブリン市なる神學校を卒業して世に出で、歐洲と亞米利加とを漫遊せし後、一千八百三十七年ブラッセルなる公使館の醫師となり、職に在りしこと六年、此の間 "Harry Lorrequer" "Charles O' Malley" 及び "Tom Burke of Ours" 等を著しき。何れも活動と奮躍の氣との充滿せる軍事小説にして、中に Charles O' Malley は其の傑作なり。一時は "Dublin University Magazine" とする雑誌を興して、絶えず其の作を掲げたりしが、時好の軍事小説以外に一轉せるを悟る、更に愛蘭風と大陸風とを折衷して "Roland Cashel" "The Knight of Gwynne" 等の數篇を著はしき。かくて後フロレンスに涉り、一千八百五十二年スベツヤにて副領事となり、五年の後トリーストといふ處の領事に轉じ、同七十二年に歿しき。晩年に至りては人心内部の觀察に心を注ぎ、實際の生活と種々の性格とを活現する小説を作らんと工夫せしが、未だ一作をも成すに及ばずして死にき。

B. Disraeli.

マリヤット及びリヴァと時を同うせる第三流以下の小作家中には Captain Glascock, Chamier, Basil Hall, Michael Scott 等あり。

ペンザミン、ダズレーリは近代著名の政治家にして、總理大臣とまでなりしベカンズフィールド伯のとなれば、其の一生の功業は敢てこゝに贅せざるべし。若し夫れ其の小説は重に青年期に成れるものなり。一千八百五十二年下院の議長になりし以後にも、即ち同七十年と同八十一年とにも“Lothair”と“Endymion”との二作ありしが、共に其の以前の諸作に劣りたり。其の傑作はむしろ其の弱年の作に在り。一千八百二十七年より十年間に作られし“Vivian Grey”“The Young Duke”“Confarini Fleming”“Alroy”“Venetia”“Henrietta Temple”の如きは其の作の佳なるものなり。作意も筆致も双つながらリットン卿の作に髣髴たり、但し“Vivian Grey”はリットンの處女作“Falkland”と同年に出版せしものなれば、ダズレーリはリットンを摸倣せりともいひ難し。さて同四十四年、四十五年、四十七年の三たびに引き續きて“Coningsby”“Sybil”“Tancred”の三作を著したり、何れも政治小説にして、最も得意の作なりしが、其の眞價は決して多大なる者にあらず。彼れが著作に

通じて最も著きは佛のゾルテールの影響の著大なることなり、而も藍より出で、藍の色をすら其の儘には傳ふる能はずして、徒らに其の短所をのみ套襲せる氣味あり、すなはち其の諷刺時としては個人的となり、私意的となり、且つ屢々實際と離れたり。然れども其の作の時人にもてはやさるゝの度は著者が政治上に昇進すると共に進みたり、朝野の紳士は當世の英傑の著作として一作出づる毎に之れを歓迎し、兎も角も購ひ求むることを忘れざりき。

トマス、ラヴ、ビーコックは一千七百八十五年に生れて、不秩序なる教育を受けし作家なり。齡三十三歳にして始めて“Headlong Hall”と題せる諷刺小説を著し、爾後一千八百三十年に至るまでに、引き續きて“Melincourt”“Nightmare Abbey”“Maid Marian”“The Misfortunes of Elphin”及び“Crotchet Castle”の五篇を作せしが、程なく東印度會社に入りて重職を得にければ、爾後三十年間は絶えて著作する所なかりき。一千八百六十年に至りて“Gryll Grang”を著し、後五年にして歿しき。齡八十二。ビーコックの諷刺は頗る銳利にして、動もすれば露骨に過ぐる嫌ありしが、漸く圓熟するに及びては、一種趣味ある滑稽のうち能く其の鋒鏗を包みたり

T. L. Peacock.

り。ヒーコックは韻語にも長ぜりき、特に其の宴席の爲にとて作りし作の如きは、諧
諷縦横、而も流石に野卑に陥らざる所愛讀するに足るといふ。

ジョー ルジ、ボオロー (一八〇三—一八一) はヒーコックより若きこと十八歳、彼れ
にひとしく甚だ亂雑なる教育を受けたりき。幼きころより尋常人の心を向けざ
る方の文學に心を傾け、例へば、スカンヂナヴィヤ、ロシア、スペイン、ローム、エジプト等
の諸國語を修め、且つ種々の異常なる閱歷を経たりき。"Lavengro" (一八五一) 及
び "The Romany Rye" (一八五七) の如き諸作の材料は此の閱歷の間に成りにき。
後ち聖書出版會社に雇はれて、其の賣弘めの爲めにとて魯西亞、西班牙等に赴き、西
班牙にては之れが爲めに危難に遭ひしとあり。此の間に得たりし材料は、一千八
百四十年に物せし自叙牀の小説 "The Gipsies of Spain" 及び同四十三年の作 "The
Bible in Spain" に利用せられたり。本國に歸りて後二十餘年を経て "Wild Wales"
といへる一篇を著し、がそれを名殘としてみまかりにき。ボオローが小説は其
の旅行日記と大差なし、共に實地の見聞遭遇を材とせるが故なるべし。其の文致
には到底他人の摸すべからざる趣味あれども、之れを小説として全局より評すれ

ば多く珍重すべきものにあらざ。

ハリーエット、マーチノー女史 (一八〇二—一七六) は初めはユニテリアン教義を主
旨とせる宗教小説の作家、後には活潑なる排宗教家として知られたり。經濟論に
關する物語を作ることを得意とせしが、一千八百三十二年に物せし "Illustrations
of Political Economy" は時の好尚に投じて好評ありき。少年の讀み物にとて物せ
し作の中其の最も名あるは "Feats on the Fiord" にして、小説にては "Deer brook" 佳
し。何れもエッチテオス女史の作意に倣ひたる者にて對話も圓熟せり。一千八
百七十六年、七十五歳にて没しき。女史の思想は時の俗見に離るゝこと甚しか
りしが爲めに、保守派の批評家には不當の批難を受け、改進黨には溢美の褒評を得
たりき、而も公平に評すれば、其の才や、識や、多く稱すべきほどに秀でたるにはあら
ず。

メレー、ラッセル、ミットフォード女史 一千七百八十六年に生れき、醫家の女なり。
家貧なりしが爲に、齡二十四歳の時作詩に従事して、一集を公にし、後ち又劇をも作
れり、其の脚本は演ぜられて名ありき。又雜誌『ロンドン』の爲に數篇を寄せて令名

ありき。後年此等の諸作を蒐め“*Our Village*”と題して出版せり、篇中最も名高き叙景の材料は概ね其の居の近傍なるテムズ河畔の風光より得たりといふ。可憐瀟洒玩讀すべき價あり。一千八百五十五年に没しき。小説家としては稱すべき程にはあらねど、一枝の形管を以て能く兩親と其の身とを支へたりし精根は感ずべきなり。其の他當時に稍、名ありしものを擧ぐれば、“*Haji Baba*”の作者チェームス、モリヤアあり、“*Anastatus*”の作者トマス、ホープあり、“*Granby*”及び“*Tremaine*”の作者リスターあり、“*Frankenstein*”の作者シェリー夫人等ありき。されども彼のエリオット女史及びキングスレー等の世に出でしまでは、特に意を牽くべき程の傑作は未だ英國の小説壇に現れざりき。

第九章 定期出版物の發達

十八世紀の新聞紙、雜誌——十九世紀の諸雜誌——コッベットと『*ウィークリ*』、*レヴュー*スタア——ゲエツフレートと『*エザンバラ*』、*レポーター*——シドニ、スミッス——『*クォールタリー*』、*レポーター*の諸記者——其の他の雜誌——ラム——ハズリット——*ウィルソン*——*ロッグ*——*ハート*——*デクイン*——*シー*——*リ*、*ハント*——*コ*——*ル*——*コッザ*——*マジン*——*スタア*——*リಂಗ*——*フイツ*——*セラ*——*ラ*——*ド*

大作家の出でざりしにも拘らずして新作小説とだに言へば頗る歓迎せられたりし此の小説の隆盛期と相併びて、否、寧ろ此の隆盛と相俟ちて、第十九世紀の初期以來一時に長足の進歩をなししものを定期出版物となす。定期出版物の重要な部分を占むるは新聞紙と雜誌となり。蓋し新聞紙、雜誌は能く自ら發達せしむるのみならず、他の諸發達をも攝取して自家が生長の滋養分となししなり。彼の小説の如きも、一冊子となりて單行する以前に、大抵先づ新聞紙、雜誌に掲載せらるゝを例となせりき。韻語の作亦た然りき。其の他政治、法律、經濟、風俗等に關する文章の如きも、歴史、神學、哲學等の立論、考證に關する文章の如きも、概ね先づ新聞紙、雜誌によりて、社會に紹介せらるゝを例としたりき。讀者も早く知らんことを望み、著者もまた廣く讀まれんことを希ふ、是れ實に近世の學問界、讀書界のならひなり。されば玉石同架は止むを得ざる結果にして、掲載の順序と其の論說の價値とは、毎號もとよりまち／＼なりき。さもあれ、不朽の大文字は、流石に自ら定評を得て、後に大小の冊子となり、以後昆に傳はりたり。すなはち作者にとりては何等の不利もなく、讀者はた居ながらにして諸作品の陳列場に臨むの感あり、其の風の

延いて我が邦に及び、今や世界の流行となりぬること、故ありといふべし。按ずるに、新聞紙雑誌が發達の初期は、第十八世紀の末二十年の間なるべし。當時社會上の題目には、アチソン風の輕妙なる論文尤も行はれ、宗教上には、非^{アンチ}チャコピン派の論戰甚だ盛んなりき。然れども到底十九世紀の初めに、出でし『エチンバラ評論』、『週報』(“Weekly Register”)若しは『ブラックウッド雑誌』に見えたるが如き目覺しき批評、創作には比ぶべくもあらざりしなり。殊に雑誌は、第十八世紀の末には僅かに“Monthly”及び“Critical Review”ありしのみにて、何れも尙幼孩、四肢未だ具足せざる姿なりき。スモレット、サウヤー等が之れに關係せしころは、しばらく活潑なる觀を呈したりしが、世俗には未だ重視せられず、學者はた止むを得ざる事情あらざる以上は稿を投ずるを好まざりき。常置記者の如きも、多くは一知半解の學說を諸種の問題に適用して一時の責を塞ぐに過ぎず、隨うて精細の評論、不黨の議論の如きはもとより望むべくもあらざりき。

第十九世紀の初期に一時盛譽ありしは、ギッフォード Gifford の創興せし『クォールタリー・レビュー』(“Quarterly Review”)なるべし、是は第十八世紀の尤も注意すべき定期出版

物なり。一時はサウヤー之れが主筆となり、續いてコールリッチ之れが寄書家となりにき。是に於て在朝在野の名士、碩學、時々之れに寄書し、漸く讀書界を風靡せんとせり。是れより同種の出版物次第に増加し、遂にウイラム、コッベット、フランシス、チェッフレ、シドニ、スミス、ジョン、ウイラム、チャールズ、ラム、リー、ハント、ウイラム、ハズリット、トマス、デクインシー、ジョン、ギブソン、ロックハート等の諸記者輩出しき。夫れ新聞紙雑誌の歴史は取りもなほさず其の記者の歴史なるがゆゑに、こゝに逐次に此れ等記者が功業と特質とを述べ、傍ら定期出版物の發達を示さん。

ウイラム、コッベットは、フラインハム近傍の小作人の子にして、一千七百六十二年に生れき。幼時は父に従うて犁鋤を執れりしが、やゝ長じて一狀師の書記となり、やがて轉じて兵籍に入り、軍學を學ぶこと七八年にして參謀軍曹となりけるが、故ありて脱籍し、佛蘭西、亞米利加に歴遊し、“Peter Porcupine's Journal”の誌上にて時の佛蘭西、チャコピン黨及び亞米利加の民政黨を攻撃せり。一千八百六年月英國に飯り、やがて有名なる『ウィークリー・レジスタア』(“Weekly Register”)を發刊す、此の『週報』は甚だ有益なりとして歡迎せられき。かくてあること數年偶々

其の軍隊を攻撃せし筆時法に觸れて、一時禁獄の身となりしが、其の間に『週報』の基
 本金を失ひたり。出獄後(一八一七)再び亞米利加に航し、百方盡力の末一二月にし
 て再び『週報』を刊行す。適切な記事陸續として絶ゆることなく、聲價前日に倍した
 りき。一千八百三十五年にみまかりぬ。

コッベットが著は合綴せられて浩瀚なる書冊をなせり。"Peter Porcupine"に掲げし
 もの十二卷、"Register"より選集せしもの六卷、何れも尢然たる大冊子なり。其の
 他 "Rural Rides" "History of Reformation" "English Grammar" 等の著十數篇あり。
 就中 "Rural Rides" は記事の面白きのみならず、文章また甚だ佳し、記者が浮沈の境
 遇のさながらに現れたる、取りわけて面白し。但し "History of Reformation" は獨斷
 臆測の記事多く、其の他の時論亦た偏見多し。コッベットが文章は總じて雅馴なれ
 ども、其の議論、好尚等には疵瑕なき能はず、而も尙十七世紀のパンヤン、十八世紀の
 デフォー等に比して耻かしからざる國文學の一代代表者たり。其の文辭は、もとス非
 フトに負ふ所趣からざりしが、其の性質、教育彼れに似ざりしが故に、後には嚴然た
 る一家をなせり。コッベットが政府、社會に對する議論は、動もすれば偏固瑣屑に流

れたり、或は單に農民の便宜を先にして一國全軀の利益を後にせんとし、或は極力
 して常備軍の廢止若しくは國債の償還を急言せしなど、實際論としては重んずる
 に足らぬ説なりしかども、其の語氣及び文調の急迫なるや往々痛切の讜議の如く
 聞かれしゆゑ、一時は世俗の喝采を博したり。要するに、コッベットはスヰフトが諷
 嘲反語に代ふるに直截の激語を以てせしもの、所詮スヰフトより得たる處はたゞ
 其の立言の侃々諤々たる點に止まりしなり。

コッベットが『週報』に於て卑近の考察と議論とを以て社會の事相を評論せしと同じ
 ころに、一層高尚なる題目を捉へて専ら文學的に評論を力めしものを『エヂンバ
 ラ評論』となす。此の雑誌の創始者に付きては二説ありて、今尙定まらず。フラ
 ンシス、デヰフレーなりとするものとシドニ、スミスなりとするものと是れなり。
 されど二人が共同の發意なりきとする説最も事實に近し。前者は蘇國人にして
 後者は英國人なり。

フランシス、デヰフレー はスミスより若きこと二歳にして、一千七百七十
 三年に生れき。エヂンバラの人、父は州廳の權吏にして有力なる保守黨なりき。

チマフレールは小學校を卒へて後ちクラスゴーなる高等學校に入り、相當の教育を受けて牧師となりしが、業意に適せざりしかば、一千七百九十八年ロンドンに立ちいで、文士として世に立たんと欲しぬ、然るに急に地位を得る能はざりしかば、又其の生都に販り來りてシドニ、スミスと共に『エヂンバラ評論』を發刊せしが、件の雜誌の方針に付きては全然スミスの創意に従ひきといふ、即ち發行者の意見を以て寄書家の議論を左右することなかるべしとさだめ、昂めて批評の自由を許し、さて當時の名流、碩學に請囑し、相當の報酬を定めて稿を集めき。一千八百二十年十月に其の第一號を發兌せしが、其の誌面さながら共和政治の面影を現じて、統一闕如たる有様なりしかば、更に方針を改め、遂にチマフレール自ら總括の任に當ることとなりぬ。是に於てや該誌は殆ど保守政黨の機關の如きものとなりぬ。(當時之れに關係せし文士中スコットは其最も秀でたるものなり)然るに之れに資金を寄贈せし輩は重にホイッグ黨即ち改進黨の名士なりしかば、後ちに數年にして内部に乖離生じ、竟に新評論雜誌“Quarterly”の發刊を見るに至りき。

『エヂンバラ評論』は、後年其の競争者の爲めに大打撃を受けて一頓挫せしが、兎も角も、十九世紀新聞雜誌の初生期に於て、衆に先立ちて呱呱の聲を挙げし功は没すべからざるのみならず、初生の兒としては頗る健全に生ひ立ちしものと言はざるべからず。且つや其の立論の時としては過激に流れたりし失もあれど、全冊に創新の氣の充滿して殊に青年が精神を鼓舞せしと常に射利の念を脱して誠意事に従ひしとは、其の不統一の失を補うて餘りありきといふべし。其の記者の如きも主筆チマフレールが才筆の外に學問と經驗とを兼ねたりしレスリーとブレイフェアとあり、無双の機才ありて事變の處理に長ぜりしシドニ、スミスあり、精勵倦むことなかりしフローハムあり、所説堅實にして文藻浮靡ならざりしホオナアあり、加ふるに博覽能文のスコットを以てし、相結びて馳騁を試みしは、實に一世の奇觀なりき。チマフレールは後ち擧げられて法官となり、終生其の職に在りしが、決斷の明晰と公平とを以て名ありき。彼れが文學上に最も力を盡し、は千八百二年より同二十九年の間なり。輓近に至りては、總じて雜誌の主筆は唯、諸種の稿を集めて適宜に編輯するのみにして自ら筆を執ることは少きを常とす、此の評論の後年はた然り。されど當年のチマフレールは自ら精勵して毎號六項程は必ず自家の筆にて物し

きといふ、隨うて多少の疎忽と失敗と無き能はざりき。パイロンを漫罵し、ウオヅ
ヲオスを嘲罵し、甚しきは同雜誌の記者にして其の親友たりしスコットをすら誹譏
せしことあり。其の他の小文士に對する不深切はた屢ありき、さもあれヂェッフレ
ーは一方に於て超凡の長所なかりしにあらざ、只其の文學上の見解の往々にして
宜しきを得ざりしのみ。さはいへど彼れは尙當時の一大批評家たるを失はず、就
中衆に先んじて時文の趨勢を觀察し、整然統括して評論するの技は當時彼れに及
ぶもの稀なりしなり。又彼れは其の偏見、誤解をすら整然と組織するの能ありし
なり。又彼れが提出せし問題は必ずや早晚來たるべき緊要問題なりしなり。一
千八百五十年に歿し、齡七十八。

政治上の主義のほかは常にヂェッフレーと多少見解を異にして好對照をなし、者
をシドニ、スミスとす。スミスは一千七百七十一年に生れき。父は相當の
家産もありて教育も乏しからざりし人なりき。スミスは長じてオックスフォード
なる一大學に入り、卒業の後はソリスベリ、ブレインの宣教師となりき。一千七
百九十八年エチンバラに赴き、本職の外に雜誌の評論に筆を採りしが、ヂェッフレ

と共に『エチンバラ評論』を發行せしは此の時なりき。さて此の府に住すること
五年にしてロンドンに赴き、諸種の業務に従事し、兼ねて心理學を教授し、かたはら
『エチンバラ評論』に其の寄稿を絶たざりき。後ち保守黨なるリンドハアスト卿
の知遇を得て安樂なる牧師職を授けられ、終生該職にありて一千八百四十五年に
歿しき。

シドニ、スミスとヂェッフレーとは、其の生地の異なるが爲に、氣稟上に英人と蘇人と
の差ありしのみならず、其の好尚、長短將た殆ど正反對なりき。ヂェッフレーは感情
を重んじ、文學を文學として愛玩すること深かりしが、スミスは之れに反し、作を
作として玩賞することを惡み、且つ感情に拘泥することを非どしたり。ヂェッフレ
ーは頓智、諷刺の才に乏しく、スミスは之れに裕かなりしと同時に、其の諧謔の底に眞
摯堅實なる思想を包みき。但し其の時人に愛せられしは、此の眞面目の主義より
は寧ろ其の滑稽の機敏にして即妙なるにありしなり。蓋し溢るゝが如き其の頓
才は隨時隨處に迸發し、嚴格なる政治論たると親友に與ふる手簡たるとの別を問
はず、苟も事を説き、理を叙ぶるに便なりと思惟せし時は、常に之れを用ひたり。要

するに、彼れが諷諧は常に、理性の用具たりき、何れの場合にも、滑稽其の物の爲め乃至一時の興の爲めなどに之れを濫用せしことなし、隨うて彼れが滑稽はデルテールのに似たるよりは寧ろスヰフトのに近きものなり。兎も角もスミスの滑稽は『エチンバラ評論』の一粧飾たりしのみならず、合冊となりて世に出でし後も尙ほ依然として玩賞せられき。

『エチンバラ評論』の記者中他には取りたてゝいふべき程の文士なし。夫のフロームの如きは、政治、經濟の論者としては意を率くに足れど、文客としては稱するに足らず、マッキントッシュはたむしろ哲學者として遇すべきものなり。但し、『エチンバラ』の強敵たりし『クォールタリー』の記者には、ギッフオドあり、カンニングあり、エリスあり、スコット及びサウチャーあれども、此等は單に雑誌記者としてのみ論ずべきにあらねば、こゝには略き、今はたゞ

デモン、バーロー及びアイサック、チスレーリの二家を略述して更に次ぎの雑誌記者に移らん。バーローの生涯は複雑なりき。貧賤の家に生れ、幼にして製造所の書記となり、次に水夫となり、また數學の教師となり、後ちマカートニーが有名なる

J. Barrow.

I. Disraeli.

支那航海に従ひ、轉じて南米に航し、年四十にして海軍省の秘書官となり、在職四十餘年、一千八百四十八年、齡八十五にてみまかりぬ。バーローは『クォールタリー』の社員にして、地理及び海軍史を擔當せる記者として名ありき。アイサック、チスレーリはヘカンズフィールド伯の父なり、一千七百六十六年に生れき。幼時特に嗜好する業務なかりし爲めに、智能不具の童として輕侮せられしが、廿六歳にして始めて一文を草し、之れより記者となりて終生其の業に力めたり。文學上の奇事、逸話を集めたる『Curiosities of Literature』の前部は其のころに著し、ものにして尙別に『Calamities of Authors』及び『Quarrels of Authors』又『Amenities of Literature』等の著あり。就中『Curiosities』は今も尙珍重せらるゝ、彼れが傑作なり。前叙三雑誌に次ぎて世に出でし著名の雑誌二種あり、『Blackwood's Magazine』と『London Magazin』と是れなり。前者は一千八百十七年エチンバラにて發刊せられ、歩武堂々長き年月の間繼續せり。後者も同年にロンドンに現はれ、一時は華やかに運動せしが、幾程もなく斃れたり。前者は保守主義を懐き、後者は自由主義を取れりき。但し前者にも自由主義の人なかりしにあらざ、後者はたゞ、クインシー

の如き保守主義家を有し、ラムの如き中立主義家を有しき。二雑誌相對峙して互角の勢を張ること數年に亘りしが『ロンドン』は其の主筆ジョン・スコットを失ふに及びて復た頭を擡ぐること能はざるに至りぬ。其の掲載範圍の廣かりしことに於ては、二者共に雑誌の名に負かざりき。按ふに、『エチンバラ』と『クォールタリー』とは所謂評論の雑誌にして、記載の事項も批判評論の外にいざりしが、『ブラックウッド』は然らず、最初より詩歌、小説、評論、傳記及び其の他の事項に對しても平等の地位を與へたりき、而して『ロンドン』はた此の例に倣へりき。後者はチャールス、ラム、ハズリット、デ、クインシー、フッド、ミットフォオド女史等之れを扶け、後者はウィルソン、ロックハート及びウエットリック、シェパードの三頭政治にマシンの應援其の誌面を飾りき。以下年齢の順に従ひて、先づ

チャールズ、ラムより叙せん。ラムの文致は未だ剛健といふべからず、著す所もまた甚だ少かりしが、其の着想と其の措辭とは、共に群に超え、精緻簡淨、加ふるに輕妙洒脱の致あり。ラムは千七百七十五年ロンドンに生れき。父は狀師の書記にして忠實の人なりき。ラム幼にしてクライストホスピタル基督教育兒院にて教育せられ、夙に多望の名

C. Lamb.

ありき。業を卒ふるの前、父の傭主たりし人、東印度會社の要職を得にければ、ラム父子も亦た之れに従ひて就職すべき筈なりしに、偶、ラムの姉メレ、發狂して其の實母を殺しぬ、ラムも亦害に遭はんとせしが、辛くも之れを逃れたり。ラムは怨を忘れて懇に姉を看護せり、狂氣せる姉も病の間歇中には厚く其の恩を感謝しきといふ。蓋し此の間の經驗はラムが詩想に裨益する所多かりき、彼れが温乎たる微妙の想像は、多く此の間の閱歷に基くといふ。

ラム幼より十六七世紀の諸作を愛し、熱心に研究せりき、故に其の初期の作は大抵該紀の風調を帯びたり。彼れが姉と共に著し、"Tales from Shakespeare" (『沙翁劇を種の物語』) チャールズは悲劇のを、メレは喜劇のを物せり) は其の文致精妙にして、筋に善く原作の面影を傳へたり。之れより先き一千七百九十九年エリザ朝の悲劇に倣ひて "John Woodvil" といふるを作しき、此の作、世評の悪しかりし割合には拙からざる作なり。これと前後して "Poem" "Rosamond Gray" "Specimens of English Dramatic Poets" "Adventure of Ulysses" 及び "Poetry for Children" 等の著ありき。但し彼れが才筆の十分に現はれしは彼の『ロンドン』雑誌』發行の後なり、そは

餘四十六才の時なりき。件の誌上にて彼れは名高き「Essays of Elia」の正續兩篇を續載しき。是れラムが傑作の文集にして、いみじき諷諧の文に富めり。要するに、彼れが諸著に通じて歴々たる特徴は、其の十七世紀の作家殊にバートン、フルラア及びアラウンより嫺雅温藉の文致を得たりしこと、其の十八世紀の論文家より精緻織巧の筆意を受けしこと、其の諷諧を如意にして悲より喜に轉ずるの自在なりしこと、其の人生觀の健全なりしこと、其の先天的に文學を愛して之れを解釋するに妙を得たりしこと、其の想像の高上なりしこと等なるべし。シー曰はく

ウォオズナオスは隠者風の田園詩人なり、而してラムは都會の生活中より其のインヌレシーモンを得たり、而も誠實、微妙、深遠、は毫も彼れに譲らず

と。げにヤラムは純然たるロンドン見なりき。彼れは都會を去ることを無上の不幸と感じたりき。「ロンドン雜誌」が其の意氣に投せしこと宜なりといふべし。一千八百三十四年に歿しき。ラムは夙にコールリッチと親交し、其の紹介によりてウォオツナオス、サウソー等と相知れりき。當代の批評家トマス、デクインシーは彼れをたゞへて、單に英國にてのみならず、歐洲にても第二流以下には下らざる文士

なりとなし、其の文學士の功績は佛のラ、フォンテーヌと伯仲すと評しき。

ウィルヤム、ハズリットはチャールス、ラムとは異なる方面に於て時の文壇に重きをなし、詞客なり。多年愛蘭土に住へりしユニテリアンの教師を父として一千七百七十八年に生れき。二十歳の時、父は職務を帯びてシユロブシャヤなるウムと云ふ處に赴きしが、宗義相同じかりしかばコールリッチは屢訪ひ來り、ハズリットは之れが爲めに甚なからぬ好感化を受けしに似たり。幼きより美術の作品を愛玩し、且つ多少斯道の素養ありしゆゑに、其の初めて公にせし論文は美術に關したるものなりき。後ち數年ロンドンに販りてチャールス、ラムと相知り、其の姉の友たりし女と結婚して、暫くソリスベリ、ブレンなるウインタアスローに退き、一千八百十二年再びロンドンに立ちいで、評論の筆を社會百般の事に着けて、雜誌、新聞の紙上に其の名を知られき。後ち重に「ロンドン雜誌」に力を盡し、文學、演劇及び美術の記叙評論に力めき。歿せしは一千八百三十年九月にして、最後の三十年間は彼れにとりて最も不幸なりし年なりき。生計の不如意なりしが上に、妻に棄てられ、人の爲に欺かれ、又主義の敵として保守黨の雜誌、殊に「クォールタリー」及び

『ブラックウッド』に攻撃せられ、親しき友とすらも交りを遂ぐる能はざりき。是れ老かしながら情熱餘りありて狷介に過ぎたりし性の致し、所なり。文士の不遇は境遇乃至社會の狀態などに因由することも多かれど、ハズリットの不幸の如きは、主として其の自ら招く所なりき。セイノンツベリ氏曰はく

批評の才イタリヤ無愛相イタリヤの性質とが相伴ふは必然か、將た偶然かはしばらく措く、兎に角にハズリットは、其の性質の矯激なりしと共に、非凡の批評的伎倆を有せしは事實なり。種々の點に於て彼れは當時の大批評家なりき。

と。總じて彼れが著作は其の部分よりも其の全軀に趣味多きを常とせり。

但し其の最長篇“Life of Napoleon”『那翁傳』及び其の初期の作“The Principles of Human Action”の如きは殆んど價值なきものなり。彼れが得意の著述は品評叙説の小品なり、而して其の題目の範圍いと廣く、集めて別冊子となしたる物のみにても十種の多きに及べり。之れを大別して三種とす、第一美術、演劇に關するもの、這は比較的に不得意のものなりしが如し。彼れは劇を讀み、物(詞章)として觀ることに重きを置けり、之れを所作(科介)として論じたるはいと粗雑なり。美術(畫)の趣

味に於ける彼れが修練も十分ならざりき、加ふるに前世期中に於ける同種の論文中模範として見るべきものいと少かりしかば、品評、批判の文おのづから完全なる軀をなす能はざりき。彼れが技藝評論中の白眉と見るべきは“Conversations with Northcote”なれども、これすら美術論は割合に乏しく、文學論及び音樂論其の多きを占めたり。第二は總稱して雜論ともいふべきもの、或は彼れが最大伎倆をこゝにありと傲すものあれど、恐らくはこは其の外觀に眩惑したるもの、説ならん。但しハズリットが此等の評論は、其の文學的觀察の深邃と批判の犀利とに於ては、尠くも前代の諸評家よりもすぐれたり。“Going to a Fight”“Going to a Journey”“The Indian Jugglers”“Merry England”“Sundials”及び“On Taste”等は記憶するに足る名什なり。

さて第三は文學に關する評論なり、彼れ雜種の評論にも秀でたれど、文學の評論には更に一段の妙を得たりき。按ふに、文學に於ける其の學植は他の場合に於けるよりも一層深淵なりしなり。然れどもまた時にはラム、ハント等の容易に發見し得しことをすら誤解せしこともあり、而して多少の偏頗と迂濶とは彼れが評論の

ここかしこに常に存する缺點なり、而も “The Characters of Shakespeare” “The Elizabethan Dramatists” “The English Poets” 及び “The English Comic Writers” の四大篇及び其の他無数の断片に就いて之れを観るに、彼れは英文學を評論せし英國人中に裕かに第一流たるの位置を占むべきものなり。彼れは彼のスペンサーが「詩人中の詩人」と稱せらるゝ如く、或は批評家中の批評家とも推稱せらる。彼れが過誤は部分に於ける過誤にして、全軀に於ける其の批評の實質は人の容易に企及し得ざる所なり。セイイツベリ氏更に曰はく

彼れの偏見は屢々其の評論に附隨せるならひなるが故に、吾人は彼れが嫌惡すと稱するを聞くも、雖もいと或末なる場合にだに尙流石に危み疑ひ、之れに従ふを躊躇するの念を生ず。然れども身自ら批評の業に當りて進歩遅々たるの人若しくは自ら書を讀んで能く好惡の言を取捨し得る人に取りては、ハズリットが著作は内外稀有な珍寶なるべし。

と。

此の時に方り所謂、コックネー派即ちハント、ハズリット等の一派に反對し且つ保守主義に抵抗して興りたる壯者の一團軀あり、之れを “Blackwood's Magazine” の一派と

す。筆鋒の鋭利なる、之れに當る者悉く傷くの概ありき、而して彼の「エチンバラ評論」に伴へりし黨同伐異の陋風絶えて無かりき。最初はチン、ウィルソン John Wilson、ヂモン、ギブソン、ロックハート John Gibson Lockhart 及びチームス、ホック James Hogg 等筆を執りて盛んに「エチンバラ」の固陋を攻撃せしが、程なく愛蘭土の南部より學識經驗に富めるウィルヤム、マッソン William Maginn 來りて之れを扶け、大に其の誌面を整頓しき。此の一團中最も年長なりしものは

ヂモン、ウィルソン なり。抑、「ブラックウッド雜誌」は名義上はブラックウッドの發行なりしが、其の編輯は共和的組織によりて成り、別に主任と稱する者なかりしが、常に其の運動の指導を掌りしはウィルソンとロックハートとなりき。ウィルソンの此の雜誌に關係するに至りしは全く偶然なりしが如し。ウィルソンは一千七百八十五年に生れき。父はベイスリーにて製造を業とせし富有の商人なりき。ウィルソンは幼にしてクラスゴー及びオックスフォードの高等學校にて教育を受け、少にして父が巨産を享け、廿六歳にして結婚し、ウインダミーヤに住して地方紳士の生活を送りしこと數年、此の間古今の書を玩讀し、又ウォオゾフォス、コトルリッチ、サウロ

等と交り、就中ウ・オゾテオスの詩風を好みき。其の自作“Isle of Palms”(一八一
二)及び“The City after the Plague”(一八一六)等の如きは、専らウ・オゾテオスに倣へ
るものなり。後者の發兌せられし前、偶不幸にして其の家産を失ひしかば、之れよ
り文筆を以て生計を營さんと志し、先づエヂンバラに赴きしが、『評論』の主筆ヂ
フリーと相稱はざりしかば、遂に同志を糾合して“Blackwood's Magazine”を興すに至
りき。かくてChristopher North(及び其の他二三)の假號にて陸續種々の題目に筆を
執りき。此の時の作は後に“Christopher North in his Sporting Jacket”といふ一冊と
なりて出でき。就中其の“Notes Ambrosiane”は政治、文學及び其の他種々の題目
を説述せるものにて、時人のめでくつがへりし名作なりき。其の頃作せし小説も
亦た歡迎せられき。一千八百二十年には倫理哲學の教授としてエヂンバラの大
學に聘せられき。後ちロックハートの事に關してロンドンに赴くに及び、遂に『ブ
ラックウッド』の首席記者となり、十二年間一口の如く之れに勤めしが、晩年健康の衰
ふるに及びては、彼の教授の職をも辭し、又絶えて雜誌にも關係せず、一千八百五十
四年にみまかりき。

ウィルソンの叙説文は平凡稱するに足らず、其の詩歌はたスコット、バイロン及び湖
畔派詩人の間に立ちては特別の光輝を放つ能はず、只其の雜種の叙説文は此の種
の筆に一生面を開きしものと稱すべし。其の文の強健にして富麗なる、古今に比
類多からずとす。按ふに、雜種の記事たるや、従前は概ね無味乾燥にして散文を以
て名ありしバーク、ギッボンに尙ほ時には冷淡枯槁の憾ありしに、ウィルソンに至
りて一機軸をいだし、花あり、實あり、肉あり、骨ある一軀を翹め、枯淡の記事には尤も
句調を注意し、嚴肅なる論文の次ぎには輕快の談話を置くなど、全軀の配置調合甚
だ宜しきを得たりしかば、讀者卷を終るまで厭倦をおぼえざりき。さもあれ、もと
深大の學識、準確なる持説あるにあらねば、其の百般の事を評騭するや、往々にして
是非眞贋を混同せしことあり、されば其の雜著集(大抵『ブラックウッド』に掲げしもの)
十卷を取りて之れを通覽するに、其の文章の形式、雜多なると同時に其の内容はた
精粗不同なり、忽ちにして嚴肅雄大、忽ちにして些屑陋俗、忽ちにして沈痛激越、忽ち
にして冷淡輕浮、時には文學の深刻なる解釋者の如く、時には區々たる死記の徒た
り。讀書社會の彼れに對する褒貶の一定せず、今日に至りては一時赫々たりし名

望の大に衰へたる趣あるも宜なるかな。同時代なる「クォールタリー」記者が言に「吾人は彼れ(ウィルソン)が著の世に愛玩せらるゝこと能く今後十二年に及ぶや否やを保する能はず」といへる、必ずしも冷罵の妄語にあらず。

ウィルソンと相併びて「フランクウッド」社の牛耳を執り、善く之れと相交り、而も別様の趣味を以て當時に顯はれたりしものは、デヨン、ギブソン、ロックハートとす。一千七百九十四年カムバステサンに生れき。父は州廳の長吏なり。ロックハートも、ウィルソンと同じく、グラスゴー及びオックスフォードにて教育せられしが、皆卒業に及ばずして去りて、獨逸に遊び、歸朝の後、蘇格土法廳の裁判官となりき。されど辯論不得意にして其の業に安んずる能はざりし折から、會「フランクウッド」の發刊に遭ひしかば、乃ち入りてウィルソンを扶け、忽ちにして首席記者となり、一千八百十九年始めて一書を公にす、「Peter's Letters to his Kinsfolk」と題したりき。翌年スコットが長女を娶り、之れより數年間エヂンバラとチーフウッドとに住して、絶えず「フランクウッド」に筆を執り、傍ら四篇の小説と「Spanish Ballads」と題せる詩巻を物しき。同二十五年具スコットの破産せしや、ロックハートはギョフォードに繼ぎて

「クォールタリー評論」の發行者となり、「フランクウッド」を退社してロンドンに赴き、兼ねて「Fraser」雜誌の記者となり、文學、政治の叙説に其の筆を役したり。スコット歿するに及びて、其の詳傳の編撰に着手し、一千八百三十七年より同三十九年に至りて卒業しぬ、有名なる「Life of Scott」(「スコット傳」)是れなり。次に成りし「Life of Napoleon」(「那翁傳」)も亦た好著と稱せらる。同四十三年ランカスター公が莊園の會計監となりぬ、後ち十年、心身衰弱せし爲め「クォールタリー」記者の職を辭し、同年の冬に歿しき。

ロックハートの全著は、未だ一緒に蒐集せられたるものなけれど、其の著作いと夥し、其の論說の範圍も廣く諸方面に涉りて、見るべきもの尠からず。彼れは論じ且つ作せし人なり。嘗て「フランクウッド」紙上にてキーツを罵倒し、又「クォールタリー」にてテニソンを譏刺せしが如きは、其の過失の甚だしきものなれど、流石に詩人としても取り所なきにあらず、否、超凡の才を有せしこと明らかなり。其の「Spanish Ballads」は(一八二二)サウザーとスコットとを典型として作せしものなるが、頗る見るべきの作なり。又彼れが時々物せし小篇は、諷諧に秀で、且つ間々燃ゆる如き情

熱を示せり。然れども詩歌は畢竟彼れが閑餘のすさびにして、其の本領は散文に存したり。散文の著作中最も名あるものを『スコット傳』とす。スコットが人物の温良高雅にして才學のいみじかりしと其の閱歷に關する材料の富豊なりしとは、蓋し此の書の成功に尠からぬ便益を與へしならめど、編者が功勞もまた多きに居ることは彼のポスネルが『デモンソン傳』と相併びて古今人物傳中屈指の名著たり。『那翁傳』(スコットの『那翁傳』を撮要せるもの)はた多く之れに譲らず。彼れの小説はすべて四篇あり、何れも當時には好遇せられざりき。處女作 “Valerius” は古文牀の物語にして讀む者いと少し、次に著はしは “Reginald Dalton” と題してオックスフォードの活世態を寫さんと試みしものなるが、同じく失敗の作なり。さて “Matthew Wald” は最後の作にして、一狂夫を主人公とせるものなるが、これもまた陰鬱に過ぎ、奇激に流れたる作なり。最も佳なるは “Adam Blair” なり、こは “Valerius” と同年(一八二一)に成りしものにて、いと短き作なれど、脚色も人物も宜しきを得たり、主人公なる寡夫が隣家の細君を戀慕する切情など、よく寫したり。

T. De Quincy.

トマス、デ、クインシー はウィルソンと同年(一七八五)に生れき。父はマンチェスター

アの商人なり。七歳父を喪ひ、母と共に棲みて日々同市の小學校に通學し、後去りてオックスフォードに赴きて其の一大學に入り、卒業に及ばずして退學し、グラスミヤに徙り、そこに住せしこと十二年、此の間先づ『ロンドン雜誌』の寄書家となり、次いで一千八百二十六年『ナラックウッド』社に入り、まづ『レッシング論』を掲げ、又有名なる論文 “Murder considered as One of the Fine Arts” を物しき。同三十年家族を携へてエチンバラに徙りしが、晩年に至るまでも該雜誌に寄稿することを怠らず、此の間有名なる雜著あまたあり、兼ねて “Tait” 雜誌をも助け(一八三四—五二)晩年には其の全集の校訂に従事し、十四冊の大編を完成して同五十九年に歿しき。

件の十四冊に收めたるもの、中 “Confessions of an Opium Eater” (一八二一出版)は最も有名なる作にて、文章の雄渾暢達古今多く其の儔を見ず。レズリー、スチーブン氏が彼れの文章を稱揚して、之れを假りに意義なき文字とせんも、其の高渾なる風調は尙よく讀者を動かすに足るといへるは、必ずしも溢美ならざるべし。さて其の史論、雜説の類にては “Flight of the Kalmuck Tartars” を最も佳なりとす。蓋し其の篇の何等の種類に屬するを問はず、彼れが作の最も清妙なる個處には概ね夢を假

りて其の想を表せるもの多し、是れ其の得意の獨壇場なりき。曩きにウィルソンを評したる『クォールタリー』の記者又テ、クインシーを評して曰はく、

要するにテ、クインシーは英國の大文豪なり、非常に精細なる批評家なり、決して自己の確信を枉げざる正直の學者なり、コールリツヂに次ぐべき哲學の討究者なり。彼れ一たび去りて『アラックウッド』は其の繼紹者を得る能はざりき、彼れが文章は他の倣ふべからざるものなればなり、云々。

リ、ハントは詩人としても知られたりしが、其の本領は寧ろ散文の批評にありしが如し。而も其の詩人的温情は、他作家を譏刺嘲弄するよりも寧ろ其の末技にだにも同情を寄するの傾向を馴致せりき。一千八百八年其の弟と共に『Examiner』を發行し、十四年間之れに筆を執りき。此の間嘗て事によりて禁錮せられしが、出獄の後引き續き『Reflector』(一八一〇)『Indicator』(一八一九—二一)及び『Companion』(二八二八)等を發行し、且つ伊太利に遊びて『Liberal』と題したるを携へ歸りき。其の著作の佳なるものは大抵新聞紙、雜誌に掲載せられたり。彼れは健筆比ひ少なく、一人にして日刊の諸記事を擔當し、『Tatler』を發行せし時の如きは、十八ヶ月間全く他人の力を借らず、又『Leigh Hunt's London Journal』を刊行せし時の如きも、二年

間其の誌面の半ばを引き受け、尙ほ傍ら他の新聞紙、雜誌の寄書家となりて、絶えず其の著を掲げきといふ。但しかゝる斷篇は概して劣著たりしこと勿論なり。彼れは力めて説の偏頗を避け、穩健着實を貴びしが如し、されど尙動もすれば淺慮狹局の弊なきこと能はざりき。彼れは物の真相を看取するの力敏ならざりしにあらねど、流石にセイムツペリ氏の所謂「蝴蝶的性質」^{バタフライ・ナチュア}より來れるものも多く、彼の翻々として菜花に戯れ、徒らに飛英を追隨するが如き失ありき。其の逸早くキーツが異品を看取せしも、恐らくは此の種の觀察に基きしならんか。然れども彼れの作家を稱揚せしは、一々其の眞に銘感せし結果なりき、批評の爲めに批評するが如き振舞は無かりしなり。要するに、彼れはラム、ハズリット等に比すれば其の觀察の深さこそ劣りたれ、誤謬は彼等よりも少かりしならん。彼れが位置は詩人たるキーツ、シェリーと批評家たるラム、ハズリットとの中間にありといふべし。

ハートリー、コールリツヂは詩人サミュエル、テローア、コールリツヂが長子なり。一千七百九十六年に生れ、幼にして穎悟夙にウオヅテオス、サウソー等を驚かしき。小學校を卒へて、後オックスフォードのマートン大學に入り、該校の爲めに盡す所あり

しが、後暫く『フラックウッド』に筆を執り、且つ一私塾を起しきついで某書肆の爲めに『Biographia Borealis』を著して後クラスミヤに退きて著作の校訂等に從事し、一千八百四十九年に歿しき。遺著七篇は家弟編輯して出版せり、『Poems』二卷、『Essays and Fragments』二卷、『Biographia Borealis』三卷なり。中にも『Biographia Borealis』(後ち父の補修を経て『Lives of Northern Worthies』と改題して世に出だせり)は其の觀念持説の表はれたる點こそは『詩集』『論集』に及ばされ、兎に角彼れが傑作の隨二にして、其の良文學史家たることを證せり。彼れが詩篇亦父を辱めざる佳什に乏しからず、而も其の本來は詩人たるに適せずして寧ろ批評家たるに適したりき。彼れが詩を作りしは周圍の風尙に動かされたりし結果のみ。其の批評の才分如何は其の『論文集』に於て見るべし、庸劣なる個處も少からねど、着眼の周細にして用意の全局に亘りたるは稱すべし、就中『Ignoramus of the Fine Arts』の篇もつげやんる。ウーラム、マジンは從來の史家には輕視せられたれど、其の記者としての筆力と功業とは以上の諸文士と伍を與にして愧づる所なかるべし。一千七百九十三年愛蘭士コルクなる學校教師の家に生れき。ダブリンの神教大學にて優等の

W. Maginn.

卒業をなし、暫く父の業を扶けしが『フラックウッド』の發刊せらるゝや、其の記事、軼裁の意に協ひしがために、エチンペラに赴きて該社に投じ、『Ensign O' Doherty』と云ふ假名にて盛んに諸欄に筆を揮ひき。後ち去りてロンドンに赴き、保守派の諸雜誌を助け、遂に一千八百三十年の頃ロンドンの『フラックウッド』にも『Fraser』を發行し、或は云ふ發行を助けたるのみと、さて『エチンペラ』『ロンドン』『クォールター』『フラックウッド』等の諸先輩を凌ぐばかりに當時の俊才を集め、自らも之れに努力せしが、健康漸く衰へ、資金缺乏し、一千八百四十二年に歿しき。

マッソが著は、雜誌物の外に詩歌、小説の作あり、詩集中『Homeric Ballads』は有名なり。或は痛く之れを推重するものもあれど、詩としては格別の作にあらず。小説は一も成功の作なけれど、『フラックウッド』に掲げたりし小品は何れも特得の文章にして、中にも、『Story without a Tail』の如きは趣味ある作なり。嚴正なる評論中シムルターピヤに關する評論の如きは、以て彼れが學識見を見るべく、又其の批評眼の銳利なるを見るべし。彼れは滑稽頓智に富み、兼ねて愛蘭土風の悲哀と風調の美とを具す也。

マンが“Fraser”社に網羅せりし一群の英才は、いづれも當時の錚々たる詞客なりき、其の業の中道にして廢せしは惜むべきとなり。件の一群は當時“Fraserians”（フリーザー派）と稱せられたり、就中最も名ありしを擧ぐれば Irving, Gleig, Egerton Brydges, Allan Cunningham, Carlyle, D'Orsay, Brewster, Theodore Hook, Lockhart, Croker (愛蘭士鬼神譚の作者) Jerdan, Dunlop (有名なる『小説史』の著者) Colt Hogg, Coleridge, Harrison Ainsworth, Thackeray, Southey, Cornwall 等あり。此等諸記者同時に相併びて執筆せしにはあらねど、舊新過渡時代のサウヤー、コールリッヂが全く新時代なるサッカレ、カーライルと共に同一紙上に筆を執りしは奇觀なり。即ち此の雑誌は過渡時代と新時代との第二の過渡をなしし者なり。按ふに、斯る現象の生ぜしは所謂偶然の結果なるべく、又雑誌其の物の性質にも由りしならんか。或は當時雑誌新聞紙類の非常に數多く出でしが爲めに、其の記者の估價の經濟上低減せしにも由るならんか。さもあれ、サッカレの如き、カーライルの如きは他の『エヂンバラ』改革後の『マコーレー』『ウエストミンスター』のミル等と共に單に一雑誌氏を以て終りし者にあらず、否、或は哲學に、或は歴史に、或は小説に、別に嚴然として殊なる一格を持

J. Sterling.

し、隨うて其の文學上の事業も自らチマフレ、スミス、ウィルソンの輩と異なる所あれば、今此の章に於て彼等の上に説き及ぶべくもあらず、委しくは章を別にして講述する所あるべし。

ザン、スタアリングの名の今日に高きは其の文學上の功業の偉なるに由らずして、寧ろ(一)其の性行のカーライルが不朽の筆によりて傳へられたると(二)彼の有名なる「スタアリング社」の開祖なりしとに由れり。父はエドワードとて“Times”の發行者なり。ジョンは一千八百六年ヒュートの島に生れき。幼時家庭にて相當の教育を受け、次にクラスゴアの學校に入り、十九歳にしてケムブリッヂなる神敎大學に轉じ、夙に有爲多望の譽を博しき。後ちトリニチー、ホール(神敎學院)に入り、“Athenaeum”の寄書家となり、西班牙事件に關係し、且つ西印度に航しき。歸郷の後同院を卒業し、重に雑誌に筆を執り、一千八百四十三年に歿しき。其の一生の閱歷と其の思想の經過とより見れば、常に所動の位置にのみありしが如しと雖も、其の著作に於ては、内容、外形ともに儼然たる一家の機軸ありて、主張の見るべきものありしなり。但し彼れは事に當りて自ら營々せず、寧ろ同輩をして其の長を表はさ

しむる度量ありしが故に、其の社の如きも十分に當時の英才を集むるを得たりしなり。社中の重立たるものは Tennyson, John Stuart Mill, Carlyle, Allan Cunningham, Houghton, Francis Palgrave, Thirlwall の如き是れなり。尙第二流以下に屬せしむべきものには Blakesley, Worsley, Hepworth Thompson, H. N. Coleridge, Francis Doyle, Edmund Head 及び G. C. Lewis 乃至 Malden, Frederick Pollock, Philip Pusey, James Spedding, Twissleton, George Stovin Venables にして中には宗教問題にのみ留意せし者もあり、政治界に在りて重に政治上の評論に従事せしものもあり、文學者といはんよりは寧ろ學者といふべかりし者もあり、種類は様々なれど、兎に角親密に相結合して大に當時の雜誌的文學を飾りたり。

スタアリング社の一員にはあらねど、此の社と親密の關係を有して常に雜誌の寄書家として著はれたりし者を

E. Fitzgerald.

エドワード・フィッツゼラルト（一八〇九—一八三三）。とす小學校を卒へてケムブリッジの神教大學に入り、卒業の後三十年程の間は別に業務に従事せずして、日々讀書、思索、耕作、游泳等に耽り、且つ深くカーライルと交り、議論を上下せりき。始めて其

の著を公にせしは既に半生を過ごし、後にて、いづれもケムブリッジ在學中の舊著なりき。深く西班牙語を修めて、カルデロンが脚本を譯し、多少の成功あり、乃ち轉じてベルシヤ美文の翻譯に従事し、二三の著述あり。其の全集は三冊となりて出でしが、書簡其の多分を占めたり、這は其の批評眼を窺ふに足るべきものなり。人と爲り篤實なりしが、多く人と交はらず、交はれば必らず誼厚きを常とせりき。此の性質はよく其の評論に表はれたり、其の言ふ所常に一方に局し、自家が敬重せざる人の作に賛辭を加ふると稀なる代りに、其の一たび意に稱ひし人の著に對すれば、分析解剖、微に入り、細を穿ち、作中の妙處は一々指摘して至らざる所なし。亦一種の批評家といふべし。

以上挙げたる者の外に、當時の雜誌、新聞紙に關係せし詞客を數ふれば、尙數十百の多きに達すべけれど、其が文學上の事業は到底以上列舉せる者の上に出づる能はざれば、今は一々之れを擧げず。

第十章 歴史家

史家と詩人——十九世紀の史家——ハラム——ロスコー——ミト

フオオド——ターナアとリンガー——メルクレ——マクロー——
 アーノルド——其の他諸家

第十九世紀の初め二三十年間は、あらゆる文學の一時に興隆せし時期なれば、此の間に於て歴史的文學の發達せしこと敢て異しむに足らざれども、流石に後者が興隆の因縁には多少の特殊なるものゝあるは、按ふに、歴史家の性質の他文士の異なるに由るならんか。稀世の名匠につきて之れを觀れば、詩人(創作家)も、歴史家(記實家)も、等しく天稟の才を要し、兼ねて修鍊を要すると論無けれど、さりとて二者を同一視せんはいみじき誤謬なるべし。等しく才といふも、詩人の才と史家の才とは明かに相異なり、等しく學といふも、詩人の學と史家の學とは大なる差別あり。詩人と史家とに要する才、學、識の性質と程度とは、こゝに詳説する餘地なけれど、たゞあらしを言はば、想像の不羈自由と考證の慎嚴緻密、詩興の颯逸と研鑽の精刻、同情の深切と判断の嚴正、此等特殊の資格は、何れも一方には必須なるも他方には要なきもの、セイツペリ氏が詩人に天分タフタあるを要するは、猶ほ史家に才能オレトあるを要するが如しといへるは以上の要旨を蔽へるものなり。

唯、夫れ詩歌は天分を要す、天分は天の成す所にして世に現るゝこと甚だ稀なり、故に詩歌は間歇的に隆替す。唯、夫れ歴史は才能を要す、才能は多く修養に負ふ、故に史學は繼續的に進歩す。按ふに、十九世紀に諸種の文學の勃興せしは其の前世紀に遲鈍、無爲なりし反動にして、自然の數のみ、譬へば枯木の陽氣に逢うて再び其の芽を開發するが如し。其のうち歴史は此の例に似ず、反動の結果といはんよりは寧ろ一進歩と稱すべきなり、前世紀の史家が遺せりし史的著述は當期の研究に尠なからぬ便益を與へたればなり。常磐木の春に遇ひて、いよゝゝ其の緑を増せるに比すべし。蓋し十八世紀に於ける大歴史家ヒューム、ロバートソン、ギボン等が餘業は、革命時代に及びても打破せられず、詩人、政治家、社會學者等に利用せられて多少の利子を生み、以て十九世紀に傳へられき。

先づ過渡時代の史家を觀んか、第一には餘暇乏く史料不如意なりし時代に、尙ほ一生を斯道に委ねたりしウィルヤム、ゴド井ン(一七五六一—一八三六)あり、哲學に本領を措きながら史學の功業尠なからざりしザームス、マッキントッシュ(一七六五—一八三二)あり、史的敘事の一新體を擧げて、"History of the Peninsular War" (半島

戦争史』をもて讀史界を風靡せしロバート・サウジーあり、同じく『半島戦争史』を殆ど同時に物して批評家をして異口同音に「英國の海戦史中最も精好なる者」と讃せしめしウィルヤム・ネーピア（一七八五—一八六〇）あり。其の他、ムーア、カムベル、スコット等が著作の中にも後の史家の採用すべかりし筆致、着眼も少なからざりき。彼等は間接若しくは直接にマコーレー、カーライル等の爲めに基礎の一角を築きしものなり。以下少しくこれらマコーレー以前の史家に就きて觀察せん。

ヘンリ・ハラム（一七七七—一八五九）は歴史を以て本領とし、傍ら文學に力を盡しき。父はプリストルの副牧師、兼ねて『エチンバラ評論』の記者にして、有力なる改進黨員なりき。文學上の好尚も高く、筆も説も共に超俗の名ありしが、其の子ハラムは其の資性をさながらに受け傳へて生れたり。少壯にして一寺院の役員となり、生計ゆたかなるを得たりしかば、終生衣食に追はるゝこともなく、力を其の業に専らにすることを得たり。一千八百十八年より同四十八年に至る三十年の間に、政治及び文學に關する歴史的著述數篇を著し、之れによりて其の名を一世に知られたりき。『View of the State of Europe during the Middle Ages』（中古歐洲諸國の

情况』『Constitutional History of England』（ヘンリ七世よりジョージ二世まで）及び『Introduction to the Literature of Europe in the 15th, 16th and 17th Centuries』（十五、十六、十七世期中歐洲文學概論）一八三七—三九等是れなり。彼れが著は政治に關するものと文學に關するものと、其の價值相等しからず。前者は、其の偏狹なるホムグ派改進黨の主義の爲めに誤まられて、少なからぬ瑕疵を有し、觀察はた冷酷に過ぎたり、されどかゝる一部の失は未だ以て其の長を没するに足らず、憑據の精確と記事の明晰とに至りては當時他に比なければなり。然れども其の文學史と文學的評論とに至りては頗る服すべからざるものあり、其の確説として引照せる言は、今や何の價值なきもの多く、且つ著者みづからの所論の如きも、尋常一樣の人物、題目に關する限りは必ずしも當を失せざれど、少しく異様の題目、人物を評論するに當りては、一概に其の偏せる準繩を以て之れを律せんとしたるが爲めに、不妥に流れ、淺に失し、然らざれば乾燥となり、讀者をして事の真相を會せしむる能はず。

ウィルヤム・ロスコー（一七五三—一八三一）はリヴァプールに生れき。不十分なる教育を受けて人となり、他人の書記となりて辛くも糊口し、其の餘暇に文學を

研究し、竟に伊太利文學に精通せる文學者となりき。一千七百九十六年『Life of Lorenzo de Medici』を著はし、後ち九年の研鑽を積みて有名なる『Life of Leo the Tenth』、『オ十世傳』を編しき。兩著共に、英國にてよりは、寧ろ大陸にて愛讀せられき。ロスコーは熱心のホムグ黨にして、幾分か頑固の失なきにあらざりしかど、其のキッポンの脈を紹きて、よく歴史精神の普及を力めたりし功は没すべからず。ウ、ルヤム、ミトフオド（一七四四—一八二七）はロスコーよりも年長にして、史學上の功績も亦た多く彼れに譲らず。キッポンとは同僚にて、共に熱心なる保守黨なりき、而して政治上の主義を歴史に適用せし點はキッポンにも越えたり。是れ其の一生の大作『History of Greece』、『希臘史』（一七八四より一八一八に至る三十四年に亘りて出版せらる）に著大なる瑕疵ある所以なり、さもあれ當時行はれたりし希臘史中には、之れに匹敵すべきものは絶無なりき。ロスコーとミトフオドとが、斯く外國古代の歴史をのみ研究せりし間に、二名の壯年史家現はれて、**國史研究**の緒端を開きぬ。之れをシャロン、ターナー（一七六八—一八四七）及びデジョン、リングガード（一七七一一—一八五二）となす。

リングガードは舊教派の僧にして、はじめは宗教上の著述と説教とに従事せりき。其の歴史上の著述は、事實の精確と編纂法の熟練と自家が宗教主義に拘泥せざる公明と其の文章の雅馴とによりて空前の良著と稱せられたり。實に彼れが著は、其の斷片の末までも、後の史家の模範たるに足れり。ターナーは彼れに比して更に幾分かの異彩あり、其の文の美こそ遠くリングガードに及ばざれ、英國史の研究に熱衷して陸續著し、史籍のうち『History of Anglo-Saxons』、『アングロサクソン史』一千七百九十九年出版）は、従前の史家が進むに躊躇せりし難境に歩を投じ、遑焉たる開國の昔に沂りて、雜然たる傳説の中より仔細に虚實を討究し、始めて一道の明路を開きしもの、其の功勞は永く後人の謝すべき所なり。フランシス、バルグレーヴ（一七八八—一八六一）は英國古代史に關してはターナーの繼嗣たり。ロンドンにて生長し、初めは法律を業とし、其の攻究の必要より古代の制度及び家系の關係等を調査し、又佛國の古語を學びしが、生來の嗜好は彼れを驅りて、竟に其の職業を轉せしめたり。一千八百三十二年士爵に叙せられ、やがて閑職を得たり。爾來主として歴史の攻究に従事し、晩年に至りて『His-

“*History of Normandy and England*”の一書を世にいだしき。一生の大著としても耻かしからぬものなり。其の二子亦た父に繼いで名あり、其のうち一人は尙生存すといふ。バルクレューツと相併びて

T. M'Crie.

トマス、マクリー (一七七二—一八三五)あり、蘇格土新教派の史家として一方に雄視せりき。ウオルター、スコットが“*Old Mortality*”を痛罵せし評論の如きは、固陋淺薄、殆ど讀むに堪へざれども、熱心の考察を以て蘇格土と英倫土との古史を調査して編撰せし“*Lives of Knox*”(一千八百十二年出版)及び“*Melville*”(同十九年出版)の如きは價值ある著述なり。

歴史の攻究かく年を逐うて盛んになりゆきしにつれて、名ある史家輩出し、著作はた多かりしかど、中にはとりたてゝ紹介するに足らぬ史家もあり。但し、此等小史家の勞力だに斯學に貢獻する所なかりしには非ず。夫れ修史の事業は猶開墾の事業のごとし、一畝を耕すときは一畝の獲あり、半畝を耕すときは半畝の收あり、此の故に力の微なるものを拒まず、量の益、多きをよしとす。詩歌、小説に至りては然らず、譬へば妙峰の孤頂に如意の寶珠を得んとするが如し、大鵬が垂天の力を借ら

ざれば能はず、學鳩斥鴳の群飛は徒らに蓬蒿の間を騒がすに過ぎざるなり。此の故に小詩人の業は文學史上に記せざるも妨げざれど、史家の名は其の小なるをだに忘るべからざることあり。此の意を兼ねて前に漏れたる知名の史家と其の著の重なるものを次第不同に擧ぐることを左の如し。

パトリック、フレイザー、チッター Patrick Fraser Tytler (一七九一—一八四九)……“*History of Scotland*”なり。

アーチボールド、マアリン Archibald Alison (一七九二—一八六九)……“*History of Europe during the French Revolution*”なり。

ヘンリー、ハート、ミルマン Henry Hart Milman (一八六八)……“*History of Christianity to the Abolition of Paganism*” “*History of Latin Christianity*”なり。

ジョージ、グロート George Grote (一七九四—一八七一)有名なる“*History of Greece*”の著者なり。

コンノップ、サアルターン Connop Thirlwall (一一九七—一八七一)……“*History of Greece*”なり。

此の他、マコーレーに出でしまでに一時尤も名ありし歴史家は彼のクラッドストー
ンの師たりし

トマス、アーノルドなり。アーノルドは一千七百九十五年ウワイト島に生れ、
ウインチェスター及びオックスフォードの二大學にて教育せられ、齡二十歳にしてオ
リエル大學(Oriel)の校友に選舉せられ、又高等法院の幕に應じて羅甸文と英文と
にて論文を草して賞を得たり。當時のオックスフォードは教義の嚴守を強ひずして
寧ろ信教の自由を許せり、されば學生の所信思ひくにして、多くは合理的信仰を
主張し、中にも其の極端なるは彼の、高尙にして乾燥なる合理主義^{ラショナルイズム}を奉ずるも多
かりき。アーノルドは此の自由信教の主義を悦び、卒業の後も牧師となることなく
テムズ河畔なるシールハムに私塾を開きて、専ら教育に従事せしが、後十年にし
てラクビーの校長に推選せられき。此のあひだに於ける其の講述と説話とは、間
接に後の文學に影響せり。後年專意著作に従事し、『History of Rome』(『羅馬史』)を
著す。此の書一千八百三十八年、同四十年、同四十二年の三回に出で前後三卷にし
て止めり、即ち第二ビローニク戦争なまでをものしてみまかりしなり。此の他

『Introductory Lectures on Modern History』あり、又其の宗教、文學の議論は當時尠からぬ
勢力ありき。此の歴史は叙事の赫裁學術的にして取捨選擇宜しきを得たり。其
の文亦明晰にして遒勁なり。

第十一章 マコーレー

マコーレー——其の傳——其の著述——其の特質——韻語家として——論
文家として——歴史家として——彼れが史筆の特質——マコーレーの
人格

天の人に附與する無上の恩賜は、聰明なる資性を享けて生れ、恩威偏せざる父母の
手に育てられ、終生順境に處して名を揚げ、家を興し、永く後生に推重せらるゝとは
れなり。トマス、バビングトン、マコーレーの生涯は、恰も此の例に當れり。
父ザカリー、マコーレーは蘇格土の舊教信者にして、眞摯熱誠、事に當りて身命を顧
みざるトリーリ黨の一名士、嘗て奴隸賣買の反對運動に率先せし人なり。母はク
エーカア宗徒の子にして、慈愛の情深く、理非正邪の分別正しく、信念堅固にして事
に動ぜざる性質なりき。トマスは一千八百年某月リースダアシャヤに生れき。幼

にして穎悟、六七歳にして既に能く文を綴りき、或はいふ、七歳の時はやく己に聞き集めたる史談を材として英國小史を編せんとせしことありきと。はじめは家庭の教育のみを受け、十三歳にして小學に入り、十八歳にしてケムブリッヂの神教大學に入りしが、いたく數學を嫌ひて、該課の時間には竊に文學上の著作を讀むことを常とせりき。一千八百十九年と其の翌年とに於て懸賞の募に應じ、「Pompeii」及び「Evening」の二詩篇をもつて金牌を得、且つ同校の校友に擧げられき。在學中に其の父巨産を失ひしと同時に逝りければ、トマスは一身に若干の負債と數人の弟妹とを引き受けて自立せざるべからざる難境に立てり、偶々「エヂンバラ評論」の主筆デラフレーの知遇を得て一千八百二十五年同誌の寄書家となり、彼の有名な「Essay on Milton」(「ミルトン論」)を掲げ、こゝに立身の階子を得たりき、是れ其の散文の處女作なり。立論明確にして行文瑰麗なりしかば、頗る時人の注意を牽きぬ、爾後専ら評論の事に従へりき。當時は評論記者の估券今日よりは高かりしに、彼れ既に數篇を物して名聲漸く著はれしのみか、元來ホッドグ黨に屬せりしかば便宜また一しほなりき、蓋し該黨は年少の英才を誘掖提擢するに力めたりしなり。

後ち程もなくランスタウン卿の周旋によりて、始めて國會議員に選舉せられぬ、時に年三十一。

かくて幾程もなく英王ジョージ・ルソ四世崩じ、ウィルヤム四世代りて位に即き、國會は例によりて解散せられたり、此に於てマコーレーは佛國に漫遊し、其の政界の現狀を視察し、歸國の後再びカーンの地より選舉せられて國會に入りぬ。當時下院と政府との間には選舉權擴張及び其の他の件につきて一大葛藤あり、議場頗る騷擾し、論戰日に沸き、殆ど底止する所なかりしが、マコーレー此の間に立ちて有名なる長演説を試み、滿場を震駭し、數回の論戰の後、遂に肝要なる諸案を通過せしめ、これより一體して第一流の雄辯家となり、筆舌雙達の政論家として、一時は大政治家ヒットと併稱せらるゝ程なりき。一千八百三十二年内閣はマコーレーが改革案に於ける功を思ひ、之れに酬ゆるに印度事務委員の職を以てせり。翌々年印度マドラスへ航行す。當時印度は英國に取りて重要な問題の繫る處なりき。而してマコーレーは熱心に之れが整理と調査とに盡力せしが、尙夜間と早朝とには文學の研究を怠らずして數篇の論文を著はしき。四年にして事務終り、歸途に就き、途次

伊太利を過ぎ、一千八百三十八年に英國に歸りしが、該赴任中に一生涯の資産を作り得ければ、斷然政界を退き、専ら餘生を文學上の著作に委ねき。『エチンバラ評論』の讀者等は久しくマコーレーが歸朝を待ちわびたりしかば、今や日に迫りて其の著を請ひ、未だ一新著をも出ださざるに盛名は處々に傳唱せられき。按ふに、印度赴任は彼れに取りては少小ならざる便益を與へし者なり。彼れは之れによりて其の名譽、財産の根柢を作りし外に、到底他の方法にては得る能はざる東洋的智識を得以て其の名著『クライツ傳』、『ヘスチングス傳』を不朽の作たらしめき。

一千八百四十二年及び其の翌年“Lays of Ancient Rome”と“Essays”『評論集』とを公にし、さてこれより其の畢生の力を傾けて修史の業に従事し、精攻深討、同四十八年に至りて『英國史』“History of England from the Accession of James II”の第一巻及び第二巻を世に出だしき。社會の歡迎前古に比なく、十日にして初版の三千部を盡し、四ヶ月にして一萬三千部を盡し、翌年に至りては既に六種の版ありき、其のうち某書肆の出版の如きは二十萬部に達し、獨逸は六種の翻譯をなし、魯西亞、佛蘭西、伊太利、西班牙、ポランダ其の他の諸國も各争うて其の翻譯に着手しき。同五十

五年其の第三編及び第四編成りて聲價尙ほ依然たりき。マコーレー自ら人に誇りて曰はく、余が『英國史』の第三、第四の兩篇に匹敵すべき著は、古今唯、彼の第一、第二の兩篇あらんのみと。得意想ふべきなり。彼れ既に全く政界を退き、一千八百四十八年にはケムブリヂ大學に聘せられしをも辭せしが、同五十二年止むを得ざる情誼ありて更にエチンバラの代議士となり、再び議場に臨みて屢、演説する所ありしが、偶、其の心臟を害ひ、心身著く衰憊し、一千五百五十九年十二月に至りて遂に其の書齋の安樂椅子に永眠しき。齡六十歳。彼れが名譽ある閱歴、性行及び逸事は一時の話柄となりて喧傳せりしが、尙ほ其の詳傳は數年の後ち甥、ウォールツ、トレ、エルヤンの手にて編せられき。この傳趣味ある記事に富み、文章また雅馴、平明、ボス、ヌルの『ジョンソン傳』、『ロックハートの『スコット傳』と共に人物傳記中屈指の著に屬す。

マコーレーは當時の實際社會に於ける理想的紳士とも稱すべく、種々の方面に於て傑物たりし如く、文學上に於てもまた第一流の地位を占めき。今便宜のため其の一生の著作を韻語、論文及び歴史の三類に分つ。こゝに其の演説類を略せるは

其の内容の政治に關する所多く、文學には縁遠ければなり、而も文章として之れを見れば、他の論文よりもむしろ一層雄渾にして、抑揚波瀾の妙に富めり、特に老後の演説の如きは、麗を銜はず、奇を求めざるに、威儀自ら備はり、十萬の王師、肥馬盛装して以て胡兵に向ふの概あり。

さて以上の三者は、何れも稀有の好評をもて迎へられしものなるが、稱贊の眞價以上なりだけに、其の反動も亦た甚しく、歿後程なく種々の批議を蒙りたり。其の史論は淺薄を以て目せられ、其の文章は千篇一律と筆癖とを以て難ぜられたり。就中最も劇しく攻撃せられしは、其の韻語の作にして、博學卓識を以て第一に推されたりし批評家マッシュレー、アーンホルドの如きも、彼の『Lays of Ancient Rome』、『古羅馬譚』を甚だしく嘲難したりき。而して韻語に對する此等の非難は、マコーレー恐らくは辭する能はじ、彼れは決して秀でたる詩人にはあざざりしなり。彼れが思想は餘りに積極的、實際的にして、其の辭句はたあまりに明白、時としては露骨なりき。されば彼の夢現の兩界に逍遙し、現にありて夢を描き、夢に遊びて現を寫す底の妙機は、彼れの到底企及し得ざる所なりき。詩として稍、見るべきは其の最短篇章ろ

世に知られざる)『Jacobites Epitaph』、『The Last Buccaneer』等なるべし、但し其の彈詞例へば『Jury』、『The Armada』及び『Naseby』の如きは、押韻嚴正にして句々金玉の響あり、意達し、筆從へる概あり。而も彼れは到底文章家にして詩人にあらず、其の辭は妙なるも俗腸を悦ばしむるに足るのみ、其の調は佳なるも俗耳を樂ましむるに過ぎず、天地人の神韻を歌ふがときは彼れの能くせざりし所なり。要するに、彼れが詩は其の政治的事業と一般、一時的にして永久的にあらず、宜なり其の『無敵艦隊』に成功して『古羅馬譚』に失敗せしや。

詩に全敗せしマコーレーは、散文に多大の功を成せり。其の論文の如きは、兎も角も同種類中大ぐひ多からざる者なり。『ミルトン論』のはじめに『エチンバラ評論』に掲げられしや、デマフレは其の文の異彩あるに驚き、稱嘆して曰はく、君はそも那邊より斯かる文致を得來りしぞと。而してマコーレーの能文は決して偶然に成りしものにあらず、彼れは大學に在りし間、常に思を潜めて希臘、羅馬の右文章を研鑽し、傍らよく近世の名文章に注意し、就中キッボンとハズリットとに私淑し、嘗て私かに二氏の躰を折衷し、之れに自家特有の風致を加へ、推敲万回して一篇の論文をも

のせしとあり、そは故ありて公にせざりけれど、彼の『ミルトン論』よりも數年の前に成りしものなりといふ。彼れは老年に至るまで當時の苦心を忘れず、常に該篇を以て『ミルトン論』の上にあるとなしにき。一生中に物せる傳論の重なるものは、『ミルトン』、『サウザー』、『ピット』、『チャサム』、『アヂソン』、『ホレーズ』、『ウォルポール』、『クライヴ』、『ヘスチングス』、『フレデリック大王』、『王政復古時代の劇詩家』、『ボスエール』、『ハラム』及び『ランク』等にして、何れも皆殆んど同様の得失を具せり。蓋し彼れが議論と批評とは、動もすれば岐路に走り、本論の範圍外に亘る。人物又は著作を批評するや、其の筆動もすれば批評の範疇を逸し、本題を外にして餘論岐談を專とするを例とせり。こは從來の論客にも間ありし失なれど、マコーレーに至りては遂に其の極端に達したり。かゝる批評も、或種類の讀者にとりては却りて興味あり、亦幾分かの益なきにもあらぬぞ、惜むらくは文學に對するマコーレーの所見は高尚深遠なるものにあらず、隨うて俗流を抜け出でたる讀者にとりては、著者が縷々の辯は偶々以て厭倦を醸さしむるに足るのみ。加之、著者が博覽強記は、往々にして其の著に累をなしき、又其の過分なる材料準備は、往々著者を

して其の取捨に迷はしめき、而して其の弊殊に印度に關する諸論説を多しとなす。是れ其の論の概して散漫に流れ、徒らに廣きに過ぎて深きに至る能はざりし所以なり。且つや彼れの積極的なる、如何なる難題をも疑問の姿のままに存し置く能はずして、強辯曲解、以て其の斷案を得んと欲しき、彼れが眼より見れば、如何なる者も不可思議ならず、如何なる人物も隱微を有するとなかりしなり。其の人物を批判するや、庖丁の牛を解くが如く、而も餘りに截然たり、また餘りに歴然たり。其のスキフットを、天才ある猶太人と速斷し、ベーコンを、大智ある俗骨と速斷し、マーポローを、貪欲にして慧智ある狗盜と速斷したるが如き、概ね此の類なり。然れども彼れが文章には、一種靈活の氣あり、其の見聞若しくは想像せし光景、其の信ぜし所の議論、其の感ぜし所の情念は、最も明快なる文章によりて、さながら讀者が心念に入る。彼れは此の明快に加ふるに、スキフット、コッベット輩が企て及ばざる詞藻の豊富を以てせり、故に其の文雄渾にして瑰麗、晴日高厦の輪奐たるを望まんが如く、暢達又平順なり、駟馬を大路に驅らんが如し。而も是れ皆彫琢刻鏤の餘に成りしものなり。

以下少しく彼れが本領たる歴史上の著作に就きて觀ん。

抑、修史は彼れが老後の事業にして、之れを試みんの志は既に少壯の時に起れりしが、當時は血氣尙旺盛にして、目ざましき政治界の生活に心牽かれ、加ふるに讀書述作の閑暇乏しかりしかば、偶筆を執るも僅かに片々たる雜誌的論文に止まりしが、其の印度より歸りしや、家産既に成り、心亦沈靜し、加ふるに自ら多年政治界に有りて内外朝野の事情を審かにするを得たりしかば、此等知識を應用して前代の事情を觀察し、重に政治的方面より國史を編成せん、の念勃々として禁ずる能はず、遂に彼の大篇を成すに至りき。今之れを通觀するに、流石に其の全學識を集注して、のせる者なれば、一見恰も彼れが諸論文を集大成したるもの、如く、中にも第一卷は最も勝れたり。其のチャールズ二世崩御後の英國の狀勢を叙せるや、銳利透徹の史眼を以て從來の諸史籍傳記を博涉し、よく事實の眞否を判別し、錯綜混亂せる當時の社會を整然詳寫せる縱横自在の筆は、尠くも稀有と稱するを得べし。然れども、セインツベリ氏のいへる如く、此の書あまりに浩瀚なるを以て、若し作者が素志の如く其の事實を一々に記憶せんとせば、讀者は彼れ百五十三歳まで存へしハール

Part の健康長壽と、Champ Job の勇猛不退轉とを有せざるべからず。按ふに、浩繁は必ずしも咎むべきにあらねど、著者が其の黨派心を禁ずる能はで、動もすれば或個人の爲に曲説強辯し、要もなき些事に紙筆を費し、竟にかゝる過大の冊子をなすに至りしは惜むべき次第なり。夫れ史筆の客觀的たるべきは辯を要せざる所なれど、史家はた一種の主義、意見を有するからは、其の史をものするや、勢ひ

「如何なる賢明の史家といふことも、知らず識らず史中に已に理想の偉人を作り出ださんとするを免るべからず、マコーレーが其の著にオレンジ公ウィルヤムを擇びたる、亦たこの弊に屬す。彼れはウィルヤムを以て全く自己が理想の人物とし、譬へば彼の灰白の紙を純白ならしめん爲めに其の周圍を黒塗するが如く、彼れはウィルヤムの反對黨寧る自家の反對黨を捉へて百方之れを譏誣したり」。

さはいへど、此の失は始終マコーレーに纏綿せりしにはあらず、黨派に關せざる事を記するや、彼れは史家の公正を失はず、秩序整々、繁簡宜しきを得たるのみならず、毎に一樣の熱心を以て仔細に周圍の事情を察し、例の明快の筆を以て之れを叙し、讀者をして親しく聞賸するの感あらしむ。

更に一言すべきは、彼れが其の歴史中に文學の變遷をも併叙せしこと是れなり。

按ふに、こは英國に在りてはマコーレーに始まるといふを得べし。彼れは十分の注意を以て時勢と文學との關係を觀察せしのみならず、彼の好古家若しくは風土記者の如き熱心を持して、親しく詩人、文士の生地を觀察し、以て其の地勢、風土の特質をも活寫せり。

要するに、マコーレーは英國紳士の好標本なり。彼れは多能、多才、當時の學問、藝術殆ど通ぜざる所なかりき。たゞし抽象的なる數學と哲學とを好まず、中にも哲學を無用の長物と貶し、詩歌の妙を判ずるにも、人情の微を察するにも、悉く英明なる常識を以てせりき。然れども又、よく他人の説を聞くを好み、如何なる劇務にある時も嘗て讀書を廢せざりき、而して其の強記なりしは、ミルトンの『失樂園』を暗誦するにたゞ二回の通讀をもてしきと傳へたるによりても知るべし。彼れは終生無妻なりしが、幼兒を愛すること人に超え、其の甥と共に戯に演劇するをこよなき樂みとなせりき。其の自作の脚本は全く此の用にとて作りしなりき。又友誼に厚く、一たび交はれば必らず其の誼を遂げにき、されば人稱して、全身悉く善良の人といへりき。平素大に都會を愛し、山野を厭ひ、愚人と惡漢とを惡めり。素行廉正なり

しが、尙當時の紳士者流には珍らしからぬ些少の不徳は、必しも之れを行ふに躊躇せし人にあらず。嘗て伊太利に遊びしや、税關の吏に三クラウンを與へて其の手荷物を檢することなからんことを請ひぬ、吏黙して金を受く、マコーレー馬車に搭じて將に去らんとす、彼の吏再び來り、職を行はんが爲めに車に入らんとす、御者制すれども聽かず、マコーレー乃ち曰はく、賂を受けて職を廢せざる正直の吏は英國紳士の好伴侶なり、來れ、我れ汝が同車を許さんと。以て其の爲人を見るべし。彼れは何れの時に於ても常に英國紳士を以て自から居りしなり。

第十二章 カールライル

其の血統——其の傳——其の諸著——カールライルの品性と功業——文學者——歴史家——其の特質——其の人生觀——宗教觀——諸家の批評

凡そ如何なる時世にも謳歌すべき方面あれば、必ず彈劾すべき方面もあり。第十九世紀前半の如きは、此の兩面の最もいちむるかりし時代なり、マコーレーと共にカールライルの世に出でしは、蓋し異しむに足らざる也。兩者は共に散文學上の傑物たりしのみならず、政治上、社會上の思想に於ても其の進歩せるものゝ代表者な

りき。第十九世紀前半に於ける英國世相の全豹は、畧、此の二人によりて窺ふことを得べきなり。

トマス、カーライルは一千七百九十五年十二月、蘇格士ダムフリースシャなる小邑エックルフェカンに生れき。彼の果敢勇猛にして、よく言ひ、よく行ひ、鋼鐵の如く堅固にして弾力性ありと稱せられしトマスは其の祖父にして、エックルフェカン五人男の一人、争闘石工の随一人と綽名せられ、信心鐵の如く、疑惑の念に犯されず、無要の言を發せず、過去の不快を語らずして唯、上帝をのみ懼れたりしチエームスは其の父、而して世々嚴肅なる教理を奉じて敬虔誠實を以て知られたりし一女子マーガレット、エートケンはその母なりき。トマスは幼時かゝる父母の膝下にありて嚴肅なる教育を受け、無益なる遊戯を禁ぜられ、母よりは讀書、作文の初歩を授かり、父よりは算術を教へられ、餘暇には戶外に出で、自然の風色を樂むことを勧められき。郷學にあること三四年、十歳にしてアンナンの中學に入りしが、動作遲鈍にして常に孤獨を好むをもて朋友に嘲られ、泣虫トムと綽名せられき。十五歳にしてエヂムバラなる大學に入りしが、在學中最も留心せしは宗教及び哲學にして、數學は之

れに次げりき。

一千八百十四年其の普通科を卒へ、親友エドワード、アアボングの周旋にてアンナの數學教員となり、ついでハッキングトン及びカアクウォチーの地に轉じ、同十八年に至り、職を棄て、エヂムバラに赴き、かしこに流浪すること數年なりき。此の間數篇の人物傳を著してブリュスタアが『エンサイクロペヂヤ』に投じ、又『Life of Schiller』、『シルレル傳』を『ロンドン雜誌』に投じき。此の篇は同二十五年に一冊となりて出版せられしが、五年を経てゲーテが筆に成れる序文を附して獨乙文に反譯せられ、カーライルの名始めて大陸に傳はりき。一千八百二十六年、チェーン、ウエルシといふ女を娶りぬ、ウエルシは彼のジョン、ノックスの裔なり、夙に才學の名ありて識見俗に超えたり。カーライルは其の以前に言ひ込める數十の縁談を却けて自ら選定せし夫なりき。之れより先きカーライルはチエーフレーの知遇を得て、『エヂムバラ評論』の寄書家となりしが、其の文致あまりに奇矯にして粗放なりしかば、チエーフレー辟易して嘆じけらく、君そも那邊よりか這般文牒を得來りしぞと。是れ嘗て彼れがマコーレーの渾成に驚きて發せしと同一の疑問なり。他の言によりて一

歩も譲るとを好まざるカーライルは、是に於て斷然エヂムペラの地を去り、其の妻の所有地なるクレীগンブトックの僻地に退きぬ。時に一千八百二十八年なりき。爾後六年の間驚くべき刻苦精勵を以て『パァンス論』外十四篇の著を卒へしが、皆一種の特色ある文學論として見るべきものなり。

就中經營慘憺の著は有名なる『Sartor Resartus』、『衣服哲學』なり、架空の獨逸教師トイフルスドロアクを一篇の主人公として、盛に宗教、哲學及び文學に關する奇説を吐かしめたる縦横自在の滑稽の間、深刻骨に透る諷刺あり、兎も角も奇著といふべし。此の書の成りしは一千八百三十一年なり。而してロンドンの書肆中一人も其の出版を承諾するものなく、纔かに親友ロックハートの厚意によりて『フレーザ雑誌』に掲載せしが、大聲俚耳に入り難く、罵詈訕の惡評は雨の如く下り、中には、彼の文は句頭より讀むも句尾より讀むも全く同意なりとすら譏笑せし者もありき。獨り只一面議の友たりしエマアソンは、亞米利加に在りて、大に之れを推稱し、百方盡力の末、始めて一卷の書として米國にて出版せしめたり。カーライルがクレীগンブトックに窮居せし六年間の事業は、其の妻に負ふ所甚だ多しといふ。

妻女は其の生計の費を給せしのみならず、奴婢としての賤業を親らし、六年一日の如く其の夫に奉侍せりき。

既にして世は漸く偉人の聲を解するに至りしかば、一千八百三十四年更にロンドンにいで、某街なる一屋を購ひ、こゝに爾後四十七年の居をトしき。同三十七年彼が最大作『History of the French Revolution』、『佛蘭西革命史』出版せらる。名のみ徒らに傳はりて書は購讀する者なく、櫃は再び空乏を告げたり、乃ちコールリッチ、ハズリットが故智に倣ひて文學上の講話を公開し、以て纔かに焦眉の急を免かるゝを得たり。有名なる『Heroes and Hero-worship』、『英雄論及び英雄崇拜論』は此の講話筆記の一篇なり(一千八百四十一年出版)。同三十九年『Chartism』成り、同四十三年『Past and Present』、『過去及び現在』成りぬ、後者は當時の政治問題に對する著者が所感を録せしものなり。『雜論集』亦た之れと前後して出版せられき。一千八百四十五年『佛蘭西革命史』に次ぐの大作『クロムエル傳』、『Oliver Cromwell』成りぬ。此の時彼れが名聲漸く高く、世人はた一作毎に其の意を理解するに至りしかば、此の著はじめて廣く歡迎せられ、忽にして數版を重ねき。之れをカーライル

が著作の社會に好遇せられし初めとす。エクルフェカンの窮措大は、今や文壇の獅子王を以て目せられ、一吼百獸を懼伏せしむるの概ありき。

爾後五年間は、別に著作なく、時々演説と來客の應接とに歲月を送り、一千八百五十年に至りて『Tatter-Day Pamphlets』をものしぬ。こは最も激烈なるスキャフト的諷刺(寧ろ叱咤)なり。翌年『スタアリング傳』を著す。穩雅周細の文、彼れが著作中稀れに見る所なり。かくて後、更に畢生の心血を搾りて、其の會意の人物を描かんと欲し、遂に普王フレデリック大王を擇びて、熱心に其の研究に従事し、簿書堆裡に苦心經營すること十四年、この間大陸に遊び、親しく實跡を討究すること二回、一千八百五十八年最初の二卷を脱稿し、同年に出版せり。同六十五年に至りて、全部七卷完結せり、『フレデリック大王傳』是れなり。贊嘆の聲内外に噴々たりき。程なくエヂムバラ大學に聘せられて校長『Lord Rectorship』となりしが、偶、其の妻逝りしかば、(カーライル時に年七十一)爾後また大作に筆を着けず、僅かに『ジョン、ノックス傳』『Early Kings of Norway』『Shooting Niagara』等二三の短篇を著し、外は、重に其の妻が紀念録の編輯に従事し、稿成りて一千八百十一年に歿しき。齡八十七。

カーライルが遺稿は、其の傳と共に史家フルードの手にて出版せられしが、其の記事所傳者の性行及び内密事に亘りてカーライルが名譽、威信を毀損する嫌ひ多かりしかば、カーライル崇拜者は皆起ちてフルードが所爲を咎めたり。されど兎に角に、カーライルが品性の不具なりしと其の一生の幸福ならざりしとは明かなり、而して彼れと生涯を共にせし者もまた幸福なる能はざりしや事實なり。其の妻ウエルシが、晩年人に向ひて、天才の人の妻たることの不利不幸なるを戒告し、遂に其の夫に請ひて別居を求むるに至りしにても、其の然りしを知るべし。按ふに、カーライルは、傲岸の人、唯我獨尊の人、何人に對しても、其の現存者たる以上は、決して敬意若しくは満足を表する能はざりし人なり、否、大概の人に對しては、嘲罵の口を衝いて出づるを禁ずる能はざりしなり。其の例外たりし者は、按ふに、グーテのみならんか。彼れは口を極めて社會の敗風を叱咤せしも、如何にして之れを救ふべきか、明確なる方策を建てしことはなし。彼れは寧ろ破壊者なりき。野に叫ぶ豫言者に似たる所はあり、理想ある救世者を以て目すべくもあらざりしなり。彼れの語は常に漠々たりき。是れ其の初めに於て世人に了解せられざりし一因なり。

さもあれ、世の漸く彼れを知りて、其の語を解するに至りしや、初めは無意義の妄語の如く思はれしものも、導世の箴言となり、矛盾の怪説と見えにしものも、語逆理順の格言となり、十九世紀の英國に於ける豫言者として有爲なる青年間に偉大の感化力を有するに至りき。而して此の反動は、最近二三十年間に至りて、更に第二の反動を惹き起し、カーライルが名聲は甚しく墜落するに至りたれど、そは前の崇拜の、マコーレーの場合にひとしく、眞價以上に流れたりし必然の結果のみ、二つには時勢進歩の結果なり。

いふまでもなく溢美なれど、豫言者としてのカーライルの功も、没すべからざるものなきにあらねど、そは社會上の事業なれば暫くさし措き、偏に其の文學上の事業に就きてのみ觀んに、彼れは所詮詩人たるよりは、むしろ宗教論者、宗教論者たるよりは、むしろ批評家、批評家たるよりは、むしろ歴史家たりし人物なり。其の著述いとく浩繁なれど、其の半ばを占むるものは彼の三大著、『佛蘭西革命史』、『クロンエル傳』及び『フレデリック大王傳』にして、これらは皆純然たる歴史若しくは詳傳體の歴史なり。其の他『シルレル傳』、『スタアリング傳』は史と傳とを兼ねたるもの、『サルトル、

レザルタス』は自傳體の著、而して主題の多く文學的なる『雜論集』すらも、大かたは史傳の質を有せり。例へば、『英雄論』、『過去と現在』の大部分、『那威古代の諸王』、『チン、ノックス論』の如き是れなり。夫の政治上の議論を録せる『ラースト、デー、バム、フレック』すらも、凡そ一國の政事は其の歴史的事件に至大の關係ありといふ主意に基きて物したるものゝ如し。個人の行爲は歴史を造り、歴史は又よく個人を造る、猶ほ一波の動いて萬波のつゞき起らんが如しとは、カーライルが終始口にせりし所なり。さればこそ、彼れの文學を批判するや、文學を單に文學として獨立的に批判せずして、常に之れを史上の一現象として批判し、且つかくせざる世の批評家等を異端を修する者として難むたれ。さて此の歴史主義は、そが哲學上の意見にも及びたり、彼れは政治哲學、宗教哲學、純理哲學、其の他の哲學、其の何れを問はず、其の終極の目的は社會の現實を離れて抽象的に事物の眞理を學ぶに有らずして、寧ろ實際的に現在に應用し、未來の人間を嚮導して正道に上らしむるにあり、換言すれば、現在、未來の人間をして天上界に到らしむるの道を發見するに外ならずとなせりき。按ふに、よしや其のはじめの歩武は抽象的なるにもせよ、若し之れに因りて絶對の

眞を發見するを得ば、現在、未來の人間をして天上に到らしむる道、やがて自ら明かなるべし、さすれば抽象的眞理の討究は實際的濟世の大願と究竟は同一のものにあらずや。然れども、かゝる疑問は、曾てカーライルが心頭には浮ばざりしなり。彼れは、一方に於いては、彼の「上帝を忘るゝ者」を憎みしと共に、他方に於いては、常に人間界の諸現相に注意して、謂へらく、事件と事件との關係は、父母と其の子との關係の如き單純なるものにあらず、如何なる些細の事件といふとも皆過現時に起れる百般事件の結果にして、此の事件亦他の一切事件と相合して第二の事件を醸成す。歴史は畢竟一團塊のみ、人間史の上より見れば、事件に大小の差別なし。要するに、歴史は新聞紙を蒸溜せるものに他ならずと。されば彼れは、能ふべくば、人間史を編せん、の志ありしが、こは彼の『フレデリック王傳』にすら前後十四年を費し、此の著者の到底成就するを得ざる所なりき。但し、之れを其の全著に徴するに、何れの篇、何れのページにも、此の主義の影は現れたり。其の修史上の抱負の「マコーレ」などに比して遠大なりしを見るべし。

らず。彼れは謂へらく、史上の出來事は成形の固^{ソリッド}なり、幅あり、長あり、深さあり、筆紙の記叙し得る所は線のみ、線は以て軀の各^{フェイス}、外^{フェイス}、面^{フェイス}をすら描く能はず、况んや其の内^{フェイス}、面^{フェイス}と實質とをやと。於是、彼れは其の叙事の軀に一機軸を出だし、破格の筆を驅りて不羈奔放、ひとへに事件を叙寫して餘蘊なからんとを力めたり。試に『佛蘭西革命史』を繙きて之れを見よ。忽ちにして繡窓の麗姫、忽ちにして野人ミラボー、乃至其の父の狂行、忽ちにして暴徒の囂集、忽ちにして南國の葡萄架。外國の關涉を叙しては列國公使の容貌、態度、得失に及び、前代の盛世を論じては英雄事業の頽廢と不滅とに及ぶ。何れが先にして、何れか後なるか、何れが主にして、何れが客なるか、秩序あるが如く亦た無きが如く、關係あるが如く亦た無きが如し。テームは曰はく、知りて之れを讀めば、身活劇場裡にあるが如く、知らずして之れを讀めば、徒らに岑々たる頭痛を醸成するのみと。然り、カーライルは該革命の活劇をまづおのが腦中に畫きいだし、頭ゆらぎ、目くるめくに及びて、咄嗟之れを筆に現じたりしなり。『クロンメル傳』と『フレデリック大王傳』はた同一の筆法に成れり。冷靜なる史家の眼を以て觀察し、愼嚴なる史家の筆を以て徐に過去を敘述せんよりは、むし

ろ炎々たる詩人的同情を傾けて全身を其の事件の爐中に投じ、造化に代りて再び該事件を活現し、以て後の讀者をして大人間史の一端を、冥々裡に看得せしめんとする、是れカーライルが修史の理想なり、而して其の文章の滅裂と險怪とは此の意に伴へる必然の結果のみ。

彼れが本領たりし歴史の特質は、略々以上の如し。以下少しく彼れが人世に對する觀念を窺ふべし。

テーム曰はく、カーライルは清淨教徒ピュアニティの隨一人なりと。而してカーライル亦た曰はく、清淨教主義は吾が所謂英雄主義の殿最後の現象なりと。然れども彼れは到底純粹なる清淨教徒にはあざりしなり。其の信仰の根柢のあくまでも眞摯にして、上帝を尊び、永劫を忘れざる點は、げに清淨教徒の信じたりし所にひとしと雖も、彼の嚴に己れを持するの餘り、他を律することの峻嚴に過ぎ、遂に甚しく情に悖り、冷酷に趨るが如きは、カーライルの（慙くも理想上に於ては）惡む所なりき。彼れは詩人的熱情を以て衆に同感するを理想とせりき。清淨教徒は曰はく、何をか道徳的精神といふ。曰はく、上帝を尊榮する精神是れなり。何をか善といふ。曰

はく、よく上帝に奉事するとは是なり。如何にして上帝に奉事すべきか。夫れ塵寰は穢土なり、人間は罪惡の動物なり、人祖が罪惡によりて生まれたりし故なり。かゝる罪惡の身を以て上帝に奉事せんと欲せば、宜しく身を淨うし、行ひを正うし、五慾を去り、七情を捨て、ひとへに上帝の意に隨ふべし。上帝は畏るべし、議すべからず、罪大に、識小なる人智を以て上帝を議せんとするは、徒らに罪惡を重ねんのみと。而してカーライルは謂へらく、是れ豈に自然と人間との半面を限蔽するものにあらずや。げにも人間の苦樂は憫むべきものに過ぎざらん、人生由來智者に乏しく、現在の快樂に耽りて永劫の苦難を悟らず、徒らに一時の懶眠を貪りて深夜に叫喚の聲あるを聞かず。然れども人若し一旦此の迷夢を破らんか、未來に向ひて自ら其の地を作ること無きを保せんや。げにや上帝と惡魔とは、共に等しく實在なり、人を誘ふ者は惡魔に非ざれば上帝なり、念々刻々人の行動するや、天堂に近づくに非ざれば地獄に近づくと、而して之れを知り、之れを明らめ、さて自ら其の去就を決す、善からずとせんや。換言すれば、人は盲従と束縛とを脱して、さて信心堅固なるを得べきにあらざるか。正義の爲めには不撓不屈、而もよく邪を怒るの度を失せ

ざるを得べきにあらずや。徳行高くいみじうして、而も能く向上擴張の近世的精神を有し得べきにあらずや」と。是に於てや、彼れはゲーテが著を繕きて其の所信を固め、其の疑團を釋きにき。清淨教徒は曰はく「善を行ひ、以て上帝に事へよ」と。ゲーテは曰はく「善美を併せよ、一切を併せよ、而して圓滿の人となれ」と。見るべし前者の峻嚴にして偏局し、後者の自由にして廣大なるを。是れカーライルの竟に清淨教主義以外に逸出せし所以なり。

カーライルが哲學、宗教に關する思想は、獨乙の碩學に負ふ所多し。然れども彼れは抽象的に人間及び天道の解釋を求めんとせし者にあらず。ゲーテはカント、ヘーゲル等に比すれば、其の説きかた抽象的ならざれども、尙ほカーライルとは趣きを異にす。ハリエット、マーチノー曰はく

「ゲーテの廣大にして明光ある人生觀は、晩年のシェークスピアの同トく、氣鬱れたる時、高きに登りて靜かに外界の景象を見渡すの概あり。カーライルの豫言者的運動は、譬へば垢面敝衣にして雜沓紛擾の間を縱横に馳驅するの趣あり」

と。蓋し、彼れが社會に對する獅子吼の聲は、其の實際上の効用の多少は暫らく措

く、有爲活發なる少壯者が耳には、兎も角も壯快なる音響たりしやいふを俟たず。やゝ人生を眞面目に考察し、之れに處理する最良の法を知らんと欲する者、又はたゞ現在有形の快樂に安んずる能はずして未來の方向を知らんと欲する者、要するにマコーレー一輩が所説に満足する能はざりし輩にとりては、實に曉鼓の鑿々たるを聽くの感ありしならん。

夫れ英國第十九世紀の初期は有形、無形の事物の一時に伸張せし時、新生存の途の頓かに開かれし時、農業、工業、商業の希有の勢ひを以て一時に隆盛に赴きし時なり。而して之れを獎勵し、之れに謳歌せし者は彼のマコーレーなり。さもあれ人間は永く燦然たる外飾にのみ眩惑して、其の當來と歸趨とを窺ひ知らずして止むべきものにあらず、カーライルが熱罵も亦た所以ありけり。

第十三章 カーライル以後の歴史家

キングレーキ及び其の同時の諸史家——フォオスタア——バックル——フ
リーマン——グリーン——フルード——其の傳——其の諸著——其の文章

カーライルの歿後歴史界は一頓挫を経験し、只纔かにフルードのありて舊全盛の

餘光を傳へたりしのみ。さりとして修史の業の萎靡せしにはあらず否、マコーレー、カーライル等の蹤を追うて、一生を史的研鑽に委ね、種々の方面に於て史界を開拓せし者尠少なりきといふべからず。今その中に就きて、最も有名なる者を擧げんに

アレクサンダー・キングレーキ(一八〇九—一八九二)は博覽強記、考證の精を以て一時に冠たり。サマセットの素封家の子、少壯にして國會議員に選ばれき。始めて其の名の著はれしは、一千八百四十七年に著し、「Eothen」と題せる冊子なり。こは華麗なる文章にて綴りたる東洋漫遊記にして、同種の書類中當時第一の評ありき。後ち「History of the Crimean War」(「クリミア戦争史」)を編し、一千八百六十三年に初二巻を出版し、前後二十年にして完成しぬ。博引傍證、所謂「恐るべき考證」の一例に屬す。但し著者は最も些細なる事件にだに、能く其の相互の關係を發見し、一々之れを組織して有機的全体オルガニック・ホールドたらしむる技倆を有せしが故に、讀みて倦厭を生ぜざるのみならず、間々人事推動の因縁を採知するに足ること、猶ほ彼の好小説に於けるが如きものあり、只惜むらくは一回の戦争に一卷を費し、二年間の記事に入

巻を費せるが故に、史としては寧ろ煩に過ぎたり。且つ其の文體は、甚だ華麗にして流暢なるも、往々にして新聞紙の雜報若しくは小説の如き文體となれり、且つや自家が政治上の私見に泥みて記事に公平を失したる個處も少からず。

キングレーキとカーライルとの間に出世せし名ある史家三人あり、ジョン・ヒル、バートン、John Hill Burton、ウィルヤム・フォオナス、スキーン、William Forbes Skene、及びチャールズ・メリエール Charles Merivale、是れなり。バートン(一八〇九—一八八一)とスキーン(一八〇九—一八九二)とは共に蘇格土の學者にして蘇格土の修史官ヒストリカルフアインたり。前者は近代史、重に革命以後に著はれ、後者は所謂「Celtic Scotland」を以て郷國史の宗たり。メリエール(一八〇九—一八九二)はケムブリッジ大學の名譽校友にして、「History of Romans under Empire」(「羅馬帝國史」)を著はして、名聲ハラム、グロートに次げり。

ジョン・フォオスタア(一八一二—一八七六)は多年「エクザミナー」の記者として史傳の著に名あり、殊に英國内亂時代の史に精通し、「Arrest of the Five Members」を著はし、傳記ものには「ゴールドスミス傳」「スフフト傳」「ランドア傳」「チックェンス傳」等

H. T. Buckle.

の著あり。純文學の考證にも長じ、カーライル及びブラウニングに精通せり。さて此等の史家の中にて、最も異色を呈したりし者はヘンリ、トマス、バックルなるべし。一千八百二十一年に生れ、幼より史傳を讀むを好み、又十分なる教育を受け、一千八百五十七年 "History of Civilization" 『文明史』の第一卷を著はし、同六十一年に第二卷を出版しき。著者はもと全歐洲の文明史を編述せんの志なりしが、此の第二卷の出でし翌年に夭折せしかば、完成せしは纔に英國の分のみなり。此の書の出でし當時は、世間の好評甚大なりしが、程なく反動生じて、遂には不當の嘲罵をすら蒙るに至りき。此の書や、其の編述の体裁は勿論、文致、論旨に至るまでも、盡く純然たる佛國風の著にして、着眼の奇警、觀察の精刻、叙事の明晰、議論の大膽など、佛人中にてもテームを除きては、當時殆ど比肩すべきものなかりしならん、只動もすれば粗放なる獨斷に流れ、事件の關係を見ることあまりに直線的なりしが上に、彼の佛人の口癖を學びて、絶えず英國人は職工氣質の人種なりなど嘲刺せしかば、一しは英國人の反感を招き、非難攻撃一身に集りにき。按ふに、公平なる眼を以て見るも、獨斷の甚しき箇所多かるは拒むべからざる所なり、彼れが議論の憑

E. A. Freeman.

據として引用せる事實は、大概議論の奴隸たるに外ならざる姿あり。彼れは事實を基礎として議論を立てずして、議論成りて後に事實を取捨選擇せし觀あり。されど其の着眼は流石に奇警にして、發明する所尠からざるのみならず、其の文章はた明快にして力あり、殊に初學の讀者は知らず、識らず吸引せられて、卷を掩ふに至るまでも、餘事を思ふの遑なからんとす、亦た以て史壇の一名著となすに足る。エドワード、オーガスタス、フリーマンはバックルより二年後に生れ、三十年後に歿しき。文明史家としては、バックルに似たる點も尠からねど、教育、好尚及び宗教上の思想は、兩者全く途を異にせり。少にして英國古代史を研究し、多年の精査を積み、一千八百六十七年より同七十六年に亘りて "History of Norman Conquest" 『ノーマン征服史』を著はしき、是れそが第一の名著なり。爾後史及び史論を著すこと若干終に "History of Sicily" 『シシリー史』の未定稿を遺して、同九十二年に歿しき。フリーマンは一たびも公立の學校に入りしことなかりしかど、碩學の聞え甚だ高く、初めオックスフォード神敎學校の名譽校友に擧げられ、後ち又オックスフォードの近代史編修官に推され、有爲の子弟を率ゐて多年史壇の牛耳を執りにき。

七三〇

彼れは當時の史壇に於ける最も忠實なる學者なりき。其の所説の今尙ほ依憑すべきもの多きはいふを要せず、史中に建築の變遷を附説せしなど、彼れが創意として最も推稱せらるゝ所なり。フリーマンが文章の畫的なるは悦ぶべしと雖も、爲めに動もすれば冗漫に流れ、厭倦を催さしむるもの少からず、且つ其のあまりに多く、隱喻を用ひたるは、彼のマコーレーが聯句癖にひとしく、叙説の躰を傷けて餘りあり。されど、兎も角も、フリーマンは當時の史界第一流の人たり、殊に其の十一二世紀の記事の如きは、他の企て及ばざる所多し。彼れは雜誌、新聞紙にもたづさはり、『土曜日評論』の寄書家として多年社會問題、政治問題に筆を執りにき。フリーマンが門下彬々たる英材多し、中にも其の秀でたるを

デモンリチャード、グリーンとす。一千八百三十七年に生れ、同八十三年に歿しき、オックスフォードの人なり。大學にて教育せられ、卒業の後ロンドンにて教師となり、『土曜日評論』の寄書家を兼ねにき。其の名聲は最も歴史に高く、あまたの著述ありし中に、殊に『Short History of English People』、『英吉利國民小史』は最も好評あり。グリーンは熱心に時人を導きて、社會、文學、風俗、宗教、其の他百般の事に史的觀

察を爲す風を養はしめんと勗めき。此の希望は従前の史家とても抱けりしが、グリーンの如く通常の方法を用ひて好結果を收めし者はなかりき。彼れは時人の耳に入り易き近代の思想に基礎を置きて、古へを觀察し、其の今日ある所以の偶然ならざるを明かにし、趣味ある事實を引き來りて之れを證し加ふるにマコーレーぶりの瑰麗なる文を以て論叙し、知らずくの間に讀者をして詩的觀察の趣味と利益とを知らしめき。又『一事史』といふものゝ編著に従ひ、時代を逐うて國史の出來事を詳叙し、數十篇を以て完結せんの豫定なりしも、夭折せし爲めに、纔かに『The Making of England』、『英吉利開國』、『The Conquest of England』、『英吉利克服』等二三篇にして止みにき。

かばかり歴史家は多かりしが、其のうち特に著きはフルードなり。カーライルの歿後、歴史家として、文章家として、十九世紀後半の文壇に驍名を轟かせし、デュームス、アンソニー、フルードは、千八百十八年四月ダーチントンに生れぬ、父は教會の事務長なりき。オックスフォードなるオリエル大學にて教育を受け、一千八百四十四年卒業して、トラクテリヤンといふ一派に參し、教師ニーマンが感

化を蒙りしこと大なりしが、遂に一轉して懷疑派に入り、一千八百四十九年 *Notes* とす。假號にて “*Shadows of the Clouds*” と題せる小説を作し、暗に持説の變遷を語りき。爾來専ら文學によりて名を成さんと欲し、私かに先輩カーライルの蹤を追ひ、先づ『フレージャー』、『ウェストミンスター』等の雜誌に筆を執りて數年を送りたり。この間、思を史學に潜め、一千八百五十六年 “*History of England from the Fall of Wolsey to the Defeat of the Armada*” の第一卷を編しき。此の書は同六十九年に至りて完結せり。次ぎて其の雜論集 “*Short Studies*” 出版せられぬ。同七十一年より七十四年に亘りて “*The English in Ireland*” 『愛蘭土に於ける英國人』の三卷を著し、同八十一年より三年間はカーライルが遺稿の蒐集校訂と其の詳傳の編撰とに従事し、兼ねて “*Oceana*” 及び “*The English in the West Indies*” の著ありき。同八十九年 “*The Two Chiefs of Dunby*” を作しぬ、這是愛蘭土に關する歴史小説なり。かくて後フリーマンに代りてオックスフォードの近代史編修を主りしが、一千八百九十四年に至りて歿しき。 “*English Seamen*” は其の死後に梓に上りぬ。

夫れ人の世に在るや、或は常に冷水中に棲めるが如く冷靜にして終るものあり、或は熱湯中に棲めるが如く沸騰のまばらくも息まざるもあり。フルードの如きは後者に屬せるか。其が社會上、文學上の行爲は毎に時人に批議せられて、論辯喧囂の中に一生を終へにき。彼れが歴史の出版せられしや、フリーマンが率るにし一派は激しく之れを批難し、論争數年に亘りき。又其の愛蘭土に關する著の出でしや、愛蘭土の愛國者輩は皆之れを難じ、剩へ英國の紳士輩すらも多くは著者に反對しき。又其のカーライルの遺書を蒐めて其の逸事と性行とを公にせしや、先輩の私行をあばきて其の内事をさへに暴露せりとて、大に時人に難ぜられき。さもあれ此等批難、攻撃の多くは、政治上、宗教上等の意見の相異なるよりして生ぜしものなれば、こゝに其の當否を辯ぜんは難し。例へば、其のカーライルの “*Re-mains*” 『殘墨』に關する批難を案ずるに、こは主として德義上の問題たるなり。著述としての非難にはあらず。彼の事實に忠にして、加ふるに趣味餘りある人物評傳の好模範として今尙批評家にたゞへらるゝロックハートが『スコット傳』すら、當時はフルードの著にひとしく、若干の批難を蒙りしを思へば、名家傳の編撰の容易ならざるは察すべきなり。

フルードが歴史編述の方法を見るに、彼れは事實を精叙するを主とせしよりは、寧ろ之れを論定するに力めし傾きあり、隨うて頗る物議を醸したりしが、所詮彼れをしてかゝる躰裁を擇ばしめしは、半ばは時勢の然らしめし所なり。夫れグロート、マコーレー及び晩年のカーライル等が當時の讀史界に歡迎せられし主なる理由は、事々件々を精細詳細に叙説したる點にあり、而してかゝる精細詳細なる叙説は、多年間の精勵の結果なりとして稱歎せられき。然るにフルードの事を叙するや、之れに比ぶれば遙に粗なり、而も其の議論を行るや更に密なり、是に於て輕斷なる讀史界は臆測すらく、其の力むる所疑ふらくは少なかるべく、其の推斷臆測に成る所恐らくは多かるべしと。さもあれ其の實はフルードのかた、彼の三史家よりも、私見を以てして人物事件を褒貶すること却りて少なかりしなり。而も其の長所は、敵の爲には、缺點と思惟せられ、中立者の爲には不可なきものと見られたり。所謂長所とは何ぞや。熱心堅節なる愛國者にして、能く自國の長所を看取し、之れを推獎せしこと其の一なり、之れを難ずる者ある時は彼れは全力を傾けて之れに當り、舌に筆に、辯駁し、反論せり。よく歴史の眞義を會得し、事實の取捨概ね其の宜

しきに叶ひしこと、其の二なり。按ずるに、古今史家多しと雖も、單に事件を年代的に録して能事畢れりとなせる者多し、隨うて其の記叙するや、典據は正確に、考證は該博なるも、記叙に生氣無く、往々にして宛然事實の臚列に止まるもの比々是れなり、而してよく此の失を脱し、活寫の妙を兼具せる者、古くはシェーシチャーズあり、ヘロタスあり、クラレンドンあり、ギボンあり、カーライルあり、而してフルードの如きは尤なる者の一人なり。さてまた第三の長所は、其の文致の雅馴と明快となり。彼れが文章はマコーレー、キングレーキ若しはラスキンの如き瑰麗を以て勝るものにあらず、されば廣く世俗の喜ぶ所とはならざりしも、氣品俗を超越し、平淡一奇なきが如くにして、而も衆妙の躰を具へ、貫くに一片靈活の氣を以てす、十九世紀後半第一の妙文たるを失はず。

第十四章 テニソン

十九世紀後半の詩壇——其の特質——其の代表者としてのテニソン

——其の傳——其の諸作——桂冠詩宗の由來及び傳統——キーツとテニソン——テニソンの詩人としての特質、價値

第十九世紀後半期の詩歌は、之れを彼の純文學の極盛期たりしエリザベス女王朝若しくはアーン女王朝の詩歌に比するに、種々の點に於て、毫も遜色なきのみならず、觀念の深遠といふ點に於ては、復かに兩者に超越するものあり。夫の辭句の華麗と結構の纖巧とを以て特色とせしアーン女王朝の詩歌が、其の觀念に於て見るべきもの乏しかりしは、更にもいはず、彼の情熱と創新とを以て勝れりしエリザベス朝の詩歌とても、其の形而上の想念は概して卑しく、若し其の詞句の上に明かに見えたるを標準とすれば、スベンサー一人を除くの外は、重に人情の浮沈を歌ひ、人事の成敗を歌ふに止まり、未だ直接に、天地人の究竟問題に觸れ、人性最奥の消息に接し、あらはに之れを咏歌せしことは殆ど無かりき。蓋し、かゝる問題は當時の社會のいまだ留意せざる所なりしなり。降りて十九世紀に至れば、時運の大變動は人々の思想を刷新し來り、人皆外界の昌平に知足する能はずして、反省的となり、顧慮的となり、競うて生存の大問題を講ずると共に、過去、將來を推度して處世の方針を定め、安心立命の地を作らんと欲しき、隨うて詩人は、た此の風潮に化せられ、其の多涙多感の性に驅られ、率先して這般大疑問の解釋を與へんとせり。是に於て彼等は

思ひを凝らし、心を潜め、哲學、宗教の問題に亘りて其の抱懷を抒し、其の漸く覺悟する所あるや、更に其の聲を高うして、慰諭の福音を歌ひたり。彼等は、もはや舊詩人の如く、單に自然美を謳歌する者にもあらず、又單に人情を咏ずる者にもあらず、はた又單に自家一身の興感、咄嗟の哀樂を吟哦する者にもあらず、否、仔細に人生の秘機を察し、煩惱の由來を概念し、さて後ち靜かに筆を採りて、且つ批判し、且つ同感しつゝ、作せしなり。是れ其の片言、隻句に深遠なる觀念の影を映せる所以なり。

新詩風の一先驅として、又其の代表者の隨一として、夙に錚々の名ありしをアルフレッド、テニソン卿となす。

アルフレッド、テニソンは一千八百九年八月リンコンシャヤなる一村サマアヒに生れき。其の父博士ジョーロッパ、クレイトン、テニソンは同村なる寺領の監理者にして、其の母エリザベスは、一牧師の女なりき。アルフレッドは第三子にして、兄弟六人、妹一人あり。アルフレッドが初めて其の作を公にせしは、一千八百廿七年にして、齡十八歳の時なりき。こは其の兄チャールスと共に作せしを集めたるにて、題して『Poems by Two Brothers』(『兄弟詩集』)とす、(實は長兄フレデリックも此の著に與

A. Tennyson.

りきといふ。卷中なる諸作は、總べて十五歳より十八歳までの作なる由自叙に見えたり。是れより先きアルフレッドは七歳にしてロースの一學校(グラムマー、スタイル)に入りしが、居ると數年、故ありて家に歸り、兄チャールスと共に専ら父の薫陶を受けて人と爲れり。『兄弟詩集』は此の家庭教育間の作なり。かくて詩集出版の翌年(或はいふ翌々年の初めと)兄弟相携へてケムブリッジ大學の一校トリニチ、コレヂに入りしが、後ちいくばくもなくアルフレッドは懸賞詩篇に當選して名譽の金牌を得たり。"Timbuctoo"といへる詩は此の時の作なり。彼の歴史家ヘンリ、ハラムが子アーサー、ヘンリと相知りしも亦た此の際なり。後ちにアルフレッドが著はし、有名なる傑作("In Memoriam"、『紀念の爲めに』)は此の心友を追悼して作せしものなり。其の他在學中の交遊は、後年に至りてテニンソンと共に彼の「スタアリング社」に入りて文學、政治、宗教に隆々たる名を博せし人々なり。

上にいへる懸賞の詩「テムボクツ」は一千八百二十九年中に上梓せられ、同年七月の『アセニヤム』雜誌は好意を以て之れを迎へ、其の才藻をたゞへたり。按ふに、テニンソンが特質は己に此の壯時の作に見えたり、是れいと稀れなる現象なり。彼のバ

イロンの如きは近世稀れに見る所の逸才にして、其の文致、其の感想、奇峭遒勁、時流に卓然たる所のものあり、されども其の初めて作りし作「Hours of Illness」(『閑日月』)には其の特色殆ど見えず、尋常の英才と見られしのみ、況してや後年のバイロンの影は之れを認むるに由なかりき。(テニンソンが青年時の作尙一篇あり、題して「The Lover's Tale」)と云へり、多く「テムボクツ」に譲らざる作なれども、思ふ所ありてにや、遙か後年に出版せられき。

一千八百三十年更に一詩集を出版し、題して「Poems, chiefly Lyrical, by Alfred Tennyson」と云へり、抒情詩を主とせるアルフレッド、テニンソンが詩集の義なり。此の集中に載せたるものの中「Ode to Memory」(『記憶力に與ふる歌』)、「The Poet」(『詩人』)、「The Poet's Mind」(『詩人の心』)、「The Deserted House」(『廢屋』)及び「The Sleeping Beauty」(『睡美人』)の如きは、作者が前途のいよ／＼多望なるを示しぬ。(此の中「睡美人」は、何故にや、後の詩集には省かれたり)。此の集に對する世間の評判、就中諸批評雜誌の月旦は褒貶相半したりき、恐らくは非難のかた多かりしならん。かくて同三十二年(作者二十三歳の時)に第二の詩集世に出でたり、題して「Poems by Alfred Tennyson」

『アルフレッド・テニソン詩集』とあり。此の集に見えたるうち、最も清新と思はるゝは『The Lady of Shalott』、『ミナレットの妖姫』、『The Miller's Daughter』、『磨者の女』、『The Palace of Art』、『美術殿』、『The Lotus Eaters』、『無爲の島人』、『A Dream of Fair Women』、『衆美人の夢』等、何れも皆情理高遠、詞致典麗、之れを前年の諸作に比するに、風情風姿兩つながら、自然たるものあり。蓋しテニソンが詩人としての本領は此の時に至りて漸く其の圓境に近づけりしなり。之れより前の作は概して筆ならしの趣きあり、又詞調の琢磨と修鍊とに過半、其の力を奪はれたる觀あり。按ふに、一千八百三十二年はテニソンが詞壇の卒業期とも名づくべき年なるべし、即ち彼れが本色の確定せし時なり。さもあれ當時の諸評家は之れを遇すると必しも厚からざりき。例へば、ジョン・ロックハートの如きは戲謔的筆法もて『每週評論』^{ウィークリーレビュー}に之れを評し、『クォーターリー評論』の如きも、例のローマン派をよるこぼざる保守的感情より之れを貶し、『ブラックウッド雑誌』の如きも、テニソンの作には所謂コックチー派の風調ありとて難じたり。此のころの評にて允當なるを得たりしは、ジョン・スチュワート・ミルの評のみならん(一千八百三十五年七月發刊『ウェストミンスター』所載)。大才は由

來世に認めらるゝこと遅きならひなり、ミルトンが『失樂園』すら僅々十二ポンドに購はれしを思へば、一ミルの賛辭を得しだに、寧ろテニソンの多とすべかりし所なるべし。

爾後十年間は、折々雑誌などに寄稿するのみにて、久しく長篇を作せしことなく、倫敦よりハイ、ビーチ、其他二三處に流寓し、窮迫の日月を送りしが、一千八百四十三年(作者三十三歳の時)に至りて、更に新版の詩集を出だしぬ、こは已發兩集の粹を抜きて更らに若干の新作を加へたるものなり。新作中の傑作は下の數篇ならんか。曰はく『Ulysses』曰はく『Love and Duty』、『戀と道』曰はく『The Talking Oak』、『解語の榭樹』曰はく『Godiva』曰はく『The Two Voices』、『二聲』曰はく『The Vision of Sin』、『罪業の夢』。就中『二聲』と『罪業の夢』とは當年のテニソンを表現するものとして最も留意すべき價值あり、殊に前者の如きは、十九世紀のハムレット皇子が獨白と稱せられたり。此の新詩集出で、テニソンが詩名は始めて定まりぬ、英國の讀書社會は始めてテニソンの大詩人たるを知りぬ。此の集の如何にもてはやされしかば、出版の翌年に第二版出で、又其の翌々年に第三版出で、又其の翌年に第四版出

で、又其の翌々年に第五版の出でしを見ても知るべし。同四十七年に“The Princess, A Medley”と題したる長篇の物語歌成り、其の翌年には其の再版出で、同五十年に至りては“In Memoriam”梓に上りぬ。此の作は同じ年のうちに版を重ねること都合三たびに及びきとす。

一千八百五十年六月ヘンリ、セルウッドの女エミリーを娶りて妻とす、時に四十一歳なりき。是れより先同年四月時の桂冠詩宗ウオヅチオス卒して其の後を襲ぐ者なし。テニンソンとエリザベス、ブラウニングとは候補者に推されたりしが、多少の動搖の後、輿論はテニンソンに桂冠を捧げき。此の決定に與りて最も力ありしものは其の近作“In Memoriam”の好評なりきとす。

因に記す。桂冠詩宗は、或は譯して勅選詩宗、欽定詩宗などともいふ、其の由来は詳かならず。近世所謂桂冠詩宗の職分(即ち毎年國王の誕辰を賀する詩と新年の祝賀の詞を作ることを務むる職分)は凡そ一百年以前よりのことなるべけれど、是れより先き幾百年宮廷詩宗といふ職名の詩人ありて、常に宮廷に出入し、王家より祿を受けたり。宮廷詩人といふ名はヘンリ三世の朝に見え、桂冠詩宗の名を賜はりしは彼の詩祖チヨースアが嚆矢なり。さて之れを桂冠詩宗といふ由来を尋ねるに、もと大學にて學生が文

法學の學位を得るや、文法學の中には修辭學、作詩學をも含めりしが故に卒業の褒證として月桂樹の木葉冠を受くると同時に Poeta Laureatus といふ名を得たりき、月桂冠を頂く詩人といふ程の義なり。さて宮廷に入りて王家の用務に従事せし者は、大概大學の卒業生なりしが故に、月桂詩人 (Poet Laureate) の名はいつしか宮廷詩人と同義となり、やがて宮廷詩宗をば桂冠詩宗と呼ぶに至りしならん。メルナード、アンドリニス先づこの職に任ぜられ、ザヨン、ゲー之れに繼ぎ、ザヨン、スケルトン其の次ぎに任ぜられ、エドマンド、スペインサア、サミュエル、ダンエル、ペン、ザヨソソ、ワイルヤム、デーヴナント、ザヨソ、ドライデン、並びにトマス、シヤドエル等相ついで任ぜられ、かくてチーナム、テート、ニコラス、ロイ、リユーステン、シツパア、ホワイト、ヘッド、ヴァートン、バイの五人を経て、一千八百十三年ロバート、サウヅ、此の職に任ぜられ、ウオヅチオス之れを襲ぎ、さてテニンソンにうつりしなり。桂冠詩宗、勅選詩宗などいへば、無上の榮職のやうなれども、必しも然らず、時として一種の榮譽ある奴隸たるに過ぎず、少しく氣概ある者は或は之れを辭し、或は之れを厭ひしなり。但し近世ウオヅチオスに至りて大に其の位置を高め、更にテニンソンに至りて一層の價を加へしかば、今や桂冠詩宗は名譽の閑職となりぬ。この好例によりて桂冠詩宗の名、或は永く第一流詩人と同義に用ひらるゝに至らん。

さて翌年三月ベッキンガム宮に於て女皇陛下に謁し、同月更らに其の詩集の第七版を公にしぬ。“To the Queen”と題したる小品は此の版の卷首に添へしものにて、并

クトリヤ陛下に奉獻せしものなり。これより後ちの諸作は一々紹介するの違なし。こゝには其の尤なるものゝ題名のみを掲ぐべし。「Maud」といふ長篇は、一千八百五十五年に成り、同五十九年には「Idylls of the King」の第一成れり(此の内「Enid」「Vivien」「Elaine」及び「Guinevere」等諸篇を含む)世間の歡迎は、ハイロン以後無比と稱せらる。同六十四年には「Aymer's Field」「Sea Dreams」「The Grandmother」「The Northern Farmer」の四篇と共に「Enoch Arden」といふ物語歌出で、又同六十九年には「Idylls」の次篇出で、こたびは題して「The Holy Grail and Other Poems」といふ。此の集の中には「The Holy Grail」「The Coming of Arthur」「Pellens and Ettarre」及び「The Passing of Arthur」の諸篇を含めり。さて又同七十一年には『當代評論』の紙上に「The Last Tournament」にて翌年には「Gareth and Lynette」同七十五年には「Queen Mary」(劇の詩)同七十五年には「Harold」(同上)同八十年には「Ballads and Other Poems」にてたり。

一千八百九十二年十月五日、齡八十三歳にて歿りぬ。遺骸は彼のシェイクスピア、アチソン以下歴代の詩人、英雄の墳墓ある「ウエストミンスター、アムヘー」の墓地に葬られ

前古稀有の莊嚴華麗なる碑は此の大詩人の爲めに建てられたり。

エミール・シャープ曰はく「世に大詩人の初期の作を研究するばかり趣味あるはなし、さるは其の作の文學として價值あるが爲めならで、件の詩人の作として思想進歩の跡を討ね得べければ也」と。此の心を以てテニソンが初期の作を見、之れを他の詩人の作と比較する時は、趣味一層深きものあり。セイントンズベリ氏曰はく

「或人は英國詩風の傳統を論じてテニソンを以てキーツに類ぐものさなす。按ふに不當ならし。テニソンが一千八百三十年及び同三十二年に作せる詩集中其の圓熟なる作は嘗てキーツが新舊兩派の風調を折衷せる清新の諧音あると共に、時に此の折衷の不熟の燥音を有せしこと、彼のキーツが「Queen Uta」及び「La Belle Dame sans Merci」に見ゆるものと正さに相同し。然れども正當に兩者を比較すれば(物の比較ばかり誤解せられ易きはなけれど)其の相異或は顯然たるものあらん、而も兩者もとより大詩人たるに於て擇ぶ所なきは言を俟たず。キーツの短命なりしや、其の作未だ圓熟に至らずして止みきと雖も、彼れをして、若しテニソンが例の十年間に爲し、が如く、其の作を自ら批判していろくに修練し琢磨する餘裕あらしめば、其の作必しもテニソンの下に下らざりしならん。げにもキーツが初期の作の幾分は、當時の批評家も既に難ぜしが如く、一氣にして千言立ちこるに成れるが爲め、概ね蕪辭巴調に止まり、好尚も、觀念も、粗雑淺薄なりしこと、テニソンが初期の作よりも甚しかりしならん、而も感情の精緻といふ一點

より之れを見ればテニソンが作中一としてキーツが傑作に及ぶものなきにあらざる。要するに、兩者の類似は争ふべからず、彼等共は共に繪畫的表現と音樂的表現とを併用する妙技を有し、彼等は共によく人道を解し、普通の事物にも亙りて、靜穩、平直、且つ健全なる觀察を有せり、而して此の點に於ては、彼の實際界を離れ、現世間を無視せりしシエリーに勝りしこと一等なり。

と。精評といふべし。

テニソンの好尚はキーツに比すれば少時より一段多方面にして、受容の量將た一層大に、且つ序を逐うて進前するの歩武も亦たキーツよりは確實なりき、按ふに此の點はテニソンが後の詩人の範たるべき點なり。彼等は詩人の天職と自己の天才とを認識し、古人の名作を讀むも曾て之れが爲に逡巡眩惑することなく、寧ろ其の短所及び不熟の個處を發見して、自ら深く警めたりき。之れに加ふるに、彼等は生來詩人たるの諸能力を有せしかば、其の初期の作中にては“Clariabel” “Mariona” “Recollections of the Arabian Nights” “Ode to Memory” “Dirge” “Dying Swan” “Oriana”の如きは、屢、誦して尙其の旨味の豊かなるを覺ゆ。而して第二期の作に至れば、情趣、風姿共に更に進みたり、さて其の卒業期の作に至りては、思想の高や、想像の妙や、辭句

の練や、皆前作の比にあらず。此の期の作の繪畫的にして音樂的なる、キーツ若しくはシエリーの譲らず。按ふに、繪畫的にして音樂的なることは、詩技の上より見て極致とする所、何れの時の詩人も之れに到らんと爲めしは明かなる事實なり。彼等の聰明なるものは、能ふべくば先づ繪畫色彩の美を情感と化し、此の情感を音樂(聲調の美)と化し、以て詩歌に現さんと試みにき、されど能く其の目的を達し得し者を數ふれば、英國古今の詩人中、たゞ四五指を屈すれば足りぬべし。成熟期のテニソンは實に其の隨一人たり。加之、彼等は其の先進が繁詞を以て歌ひしもの(例へばウオヅチオスが『エキスカアシン』の如き)を醇化して短篇となし、無限の情致と幾多の變化とを盡し、其の言々句々をして讀者の心魂に沁せしむ。この點に於て彼れに匹敵すべきものは、古今其の人多からざらん。スペンサアが『宮殿』及び『夢』の二篇は、やゝ這般の趣致あり、キーツ、シエリー、コールリッチ、ブレイク等も時に此の技を試みたりき、されどテニソンの圓熟なるには如かず。且つや“Onone”の律調壯大なるは、彼の山海の如きミルトンが無韻律語にも敵し“*The Lotus-Eaters*”の荒唐にして雅適なるは、彼の夢裡の天樂に比すべきスペンサアが『神女王』にも譲らず。

テニソンは時代の精神を歌ふに於て、二様の方面を取りき、自然界を主觀的に歌ふことゝ十九世紀の精神に立脚して過去の事蹟を歌ふことゝ是れなり。前者の可憐なる情致は、ウオヅチオスより得たるなれど、尙彼れの如く乾燥、低調ならず、後者の華麗と濃厚とは、スコット、バイロンより來れるなれど、尙彼れの如く淺露、粗厲の失なし。蓋し彼の三詩人は、嚴密にいへば、其の思想も、感情も、未だテニソンの如く十九世紀的なる能はざりしなり。

エドワード、フイツセラルド嘗てテニソンを論じて、一千八百四十二年の作を以て其の全盛期となし、其の以後の作を衰老期の作となせり。げにも一千八百四十二年の頃はテニソンが才華の天々としてほひ出でたりし時なるべく、其の青陽の作は收めて當時の集にあり、但し詩境は必しもこゝに盡きたるにはあらじ、其の老成の風趣は秋冬の景物に比すべき晩年の作中にこそ求むべけれ。

所謂老期の初に出でし作二篇あり、“The Princess” 及び “In Memoriam” 是れなり。是れ等の作に至れば詩躰と感情とが調和せるのみならず、繪畫的と音樂的との妙の兼ねられたるのみならず、其の思想の根柢に一種從容たる覺悟あるものゝ如し。

二篇のうち前者はいさゝか滑稽の趣味を加へたる長篇の物語歌にして作者が苦心の作なり、其の滑稽の如きは成功とはいふべからざれど、兎も角も傑作の一たるを失はず。後者は温厚誠實なる著者が情誼のあらはれたると共に、よく當時の或思潮を歌ひ得たる作なり。或思潮とは彼の半懷疑的、宗教、思想にして、テニソンは所謂「自由的保守主義」の人（否、寧ろ保守、自由の間に彷徨せし人なりしなり。『インメモリヤム』は昂起二歩格 iambic dimeter もて綴られたり。此の躰は庸常の作家に用ひらるれば單調讀むに堪へざるを常とすれど、テニソンは之れを此の長篇に善用して殆んどたるみなく、卷を終るまで厭倦を感じしむることなし、以て其の韻律家としても當時第一流なりしを證す。

さてこの期の第三の作を “Maud” とす。こは辭句の詠的といふ點に於ては其の作中第一に位するものにして、Cold and clear-cut face, ——と歌ひ起せる第三節の如き、I have led her home, my old friend を以て始めたる第十三節の如き、Come into the garden, Maud, ——の第二十二節の如き及び第二十六節なる O that t'were possible ——のあたりの詞調は、彼の絢爛目を奪ふ其の少壯の作にすらも見るを得ざるものポトプをす

らも凌ぐべきものなり。さもあれかゝる辭句上の巧妙を離れ、詩として全軀に亘りて之れを見れば、情理風韻兩つながら前の二篇の下にあるのみならず、暗に彼の "Spasmodic School" (痙攣派) と競争して時の俗受を目的となし、嫌ひなき能はず。彼れは次ぎに "Idylls of the King" を作りき。此の篇は "Mand" に伴へる弊を脱し、部分の妙味あると共に全軀の興趣あり、辭句はた例によりて精鍊、識者をも俗衆をも悦ばしむるに足る、無韻律語の作中ミルトン以來稀に見る所なり。さて晩年の作(例へば "Gareth and Lynette" の如きに至りては、流石に "The Princess" 時代の英氣を失ひたる觀あり、又 "Pellean and Ettrae" "Balin and Ballan" 等に於ては、後進作家の詩風をさへ摸したるが如き跡あり、而も尙鞍に跨りて顧眄する餘勇は "The Holy Grail" 及び "The Last Tournament" にあらはれたり。

テニソンの多才なるや、其の作せし所一様ならず、山野の風物に關係せる物語歌あれば、幽玄深遠なる哲理に關係せる冥想の作あり、古代の詩歌より翻譯せる軍歌もあれば、寫景、狀物を主としたる作もあり。又尋常の抒情歌あり、又純然たる劇の詩あり。就中、狀寫、諷詠の趣致はゆたかに當世紀を代表するに足れり。但し其の劇

の詩は寧ろ其の短所を示せるものなり。第一、科介の妙乏しく、第二、篇中の人物に彼のシェイクスピアに見るが如き宛然たる入神の妙相無し。所詮、テニソンは抒情狀景の詩人、兼ねて物語歌の作者なり。

按ふに、英國の詞壇古來名家に富めりと雖も、自ら詩人の天職を意識して其の天職の神聖なるを信じ、十年一日の如く、忠實に、熱心に、愼嚴に、眞摯に、勇猛精進、片時も其の理想を忘れざりしものは、果して幾人かありし。其の理想テニソンの如く、其の精勵テニソンの如く、其の技工テニソンの如く、にして、初めて十九世紀の詩人たるを得べし。十九世紀の英國が彼れを好遇せしは至當の禮なりと評すべき也。

終りに尙一言すべきは、彼れと時勢との關係なり。テニソンの如きはもとより未だ時世を先導せし作家とはいひ難ければ、之れを豫言者と稱せんは溢美なれど、毎に當代を代表せりといふ稱は、何人も否拒せざる所ならん。彼れが作には毎に宗教上、道徳上、社會上、すべて此等の問題に關する當時の進歩せる輿論の影映れり。勿論、嚴密にいふ時は、彼れが歌へる所は、必ずしも當年最勝の思想にはあらず、最も創新なる思索、最も進歩せる想念にはあらず、而も其の作に見ゆる所は當時の上流

思潮を反射せる者、不明ならざる英國人全體の最近年に於ける修練と經驗との結果、苟も當代の不明ならざる者が自家の影なりとして首肯せざるを得ざりし者なり。是れ豈時勢を代表せる者にあらざらんや。或は晩年のテニソンを貶して曰はく、彼れはもはや英人の理想を歌ふ能はざりきと。然り、彼れは豫言者風の詩人にはあらず、詩歌を以て一世を導く能はざりしは明かなり、而も彼れは當時の大問題を全然歌ふとを忘れしとなかりき。其の老後といへども時代の精神を解せざざりしにはあらず、歌ふ能はざりしにはあらず。よしや又たとへ晩年のテニソンが時勢に後れしを實とするも、そは功成り名遂げて簞を易へんとせし頃のテニソン也、其の壯時のテニソンは正に新しき思想の謳歌者にして、時には新理想の鼓吹者なりき。例へば、一千八百四十二年に出だし、『ロクスレー、ホール』を見よ、彼れは人物の口を借りて自家の感慨を抒らし、更らに轉じて將來の期望を歌へり、是れ明かに時の改進黨の希望なりき。尙後年に及び、『六十年後のロクスレー、ホール』を著はして、時の保守派が抱ける思想と疑惑とを歌へるが如し。或は又『Princess』を見よ、これはた當時の新問題たる女權論の旨に密接せるものなり。若しくは『美術

殿』の旨を味へ、是れはた當代の一弊たりし出世間熱の誤謬を諷刺し、暗に眞善美の相關を説き、世間と出世間との關係を歌へるものなり。『美術殿』の美術に於けるは“St. Simeon Stylite”の宗教上の僻見に於けるが如し、後者は爲我的、枯禪主義の弊を難む、世間的義務の重んずべきを説けり。何れもテニソンが理想の影にして、また當代思想の影なり。要するに、テニソンが終生の理想は、天法を畏敬するに在り、精進向上を推奨するにあり、秩序を亂さずして進歩するにあり、義理を重んじつゝも人情を重んじ、平等を愛しつゝも差別を愛し、出世間に遊びつゝも現世間に處するにあり。是れカーライルがゲーテに於て其の實例を見たるを喜びしものと相近し、而して其の平生の行實もほゞ此の理想に副へりしものゝごとし。『テニソンの如きは、按ふに、詩人中の君子人たるに近かるべし。』

第十五章 プラウニング及びブラウニング女史

ブラウニングの傳——其の諸作——エリザベス、パーレットとの結婚

——『環と巻』——ブラウニングが作の是非——ブラウニング研究会——

其の作の特質——ブラウニング女史の傳——其の諸作——其の特質

英文學史

第五編

近代の文學 第十五章

ブラウニング及びブラウニング女史

七五三

テニソンと世を同うして、更に清新なる感情、更に深遠なる思想を謳歌し、遂にテニソンを凌ぐの名あるものをロバート・ブラウニングとす。一千八百十二年五月生れぬ、一市人の子なり。其の家産饒かなりしに、如何なる故ありてか小學にも中學にも入りしとなく、幼きより家庭にてのみ教育せられき。始めて其の詩篇を世に公にせしは一千八百卅三年にて、齡廿二歳の時なりき。"Pauline"と題したる篇是れなり、即ち其の二十歳の時の作なり。ブラウニングが作に終始附隨せし一種の缺點は、既に此の作に表はれたり、而して其の傑特の詩才は未だ之れを認むるに由なかりき。此の作は作家自らも重きを置かざりきと見えて、後年に出版せし自撰の詩集には此の初作を除きたり。此の篇に顯れたる特質は、凡そ三あり、第一、詩句の悉く劇白の躰なること、第二、長き聲音の語の目立ちて多きこと、第三、彼れが作の特色と稱せらるゝ、^{オプスキューリ}晦澁の甚しきこと、是れなり。此の中第一と第二とは別にいふべきとなし、但だ何が故にかゝる奇異なる劇詩躰を用ひしか審かならざるのみ。さて所謂晦澁の失は、寧ろ一氣呵成を要とせし結果なるが如し、即ち情の向ふ所やがて之れを筆に傳へ、殆んど辭句の選擇をなさず、偏に氣に任せて作せしが

爲ならんか。さもあれ、此の『ポライイン』は推稱すべき作にてはあらざりしなり。後ち二年を経て"Paracelsus"といふを著しぬ、こは前作に勝ること數等也。これも同じく劇白躰の詩なりしが、對問の呼吸圓熟し(到底上場の見込はなけれど)、傾瀉するが如き急調と疾驅するが如き一氣呵成とは、其の無韻律語の特質を成し、蕪雜晦の瑕疵あるに拘はらず、隱然一種の靈氣を具へ、おぼろげながらも作者が特得の美感を傳へたり。其の主人公バラセルサス及び其の友フェスタス及びマイケールは作者が得意の心の解剖^{エツケツション}を適用して物せるもの、中にも伊太利詩人アプリール(Aprile)の如きは、彼の『ファウスト』のオイホリオン(Euphorion)の面影ありと稱せらる。要するに、此の作や詞致尙調はざるところありて後の作に見るが如き壯偉の妙はなけれど、抒情詩としては獨創の一躰にして、新大詩人の初作たるに愧ぢざる者なり。而して世間の之れを遇するや冷々然したりしが、ブラウニングの自信の厚きや敢て其の詩躰を改めんとせず、二年を経て更に其の友某の爲めに"Stratford"とスくる正劇を作しき。此の作妙處乏しきにあらねど、如何せん其の思想例の如く時世を超越し、其の表白はた含糊なりしが爲めに、之れを讀み物とせずして

演ずるものとするときは、興味索然たらざるを得ざりき。後ち又三年にして“Sordello”といふ劇を作しぬ、此の作取りわけて異色を帯びたりしかば、嘗に俗衆に悦ばれざりしのみならず、平生アラウニクを愛讀する輩すら、此の作者遂に其の作詩の方針を誤らんとするに非ずやと危みにき。

かゝる疑惑は一千八百四十一年より同四十六年の間に成りし“Bells and Pomegranates”と總題せる詩集出づるに及びて跡を絶てり。此の集中の劇詩にも例の缺點は伴へりしが、奇異なる“Pippa Passes”を除くの外は、必ずしも讀者をして茫然自失せしむる底の異質あるに非ず、而して其の抒情詩的短篇の或作に至りては、優かに其の作者の、單に語るに堪ふるのみにあらで歌ふにも秀でたる由を證したり。一千八百四十六年は、彼れがはじめて大詩人の列に入りし年なり。同年エリザベス、パーレットを娶りて妻とす、テニソンと桂冠詩宗の選舉を争ひし令名の女詩人ミセス、アラウニクとして文名高きは是れなり。結婚後アラウニクは伊太利に遊び、一時フロレンスに居をトし、妻の逝りしまではかしこに在りき、此間にものせし作は僅かに二篇のみ、“Christmas Eve and Easter Day”(一千八百五十年出版)及び

“Men and Women”(同五十五年出版)是れなり。之れを既刊の二詩集、即ち“Bells and Pomegranates”及び“Dramatis Personae”(同六十四年ロンドンにて出版)と併べ稱してアラウニクが壯年期の傑篇を蒐めたるものとす。こゝに至りてアラウニクの名聲漸く定り、世間多數の讀者はた彼が歌に一種深遠の意義あるを認むるに至りぬ。

一千八百六十九年無慮二万餘句の長篇を著しぬ、題して『環と卷』“The Ring and the Book”とす、環は四卷に分ちて出版せられ、大に世に歡迎せられき。是れ雅俗が一齊にたゞへてアラウニクが最傑作となせる異軀の叙事詩なり。然れどもアラウニクは一時の虚譽に眩惑して濫作するの愚をなす人にあらず、すなはち退いて筆を作詩に絶つこと十有四年、此の間ひたすら精神を修養し、或は人生の大問題を攻究し、或は希臘の古詩歌を玩味し、さて一千八百七十一年に至りて再び詩壇にあらはれたり。胸中成竹ありて詞藻また豊かなり、最近英國思想の謳歌者としてアラウニクが名を不朽に傳へし作は此の際に出でたり、今其の名あるものを下に掲ぐ。

“Balauston's Adventure” (1871) “Prince Hohenstiel-Schwangan” (同) “Fifne at the Fair” (1871) “The Red-cockton Nightcap Country” (1871) “Aristophanes, Apology” (1876) “La Saisiaz” (同) “Dramatic Idylls” 二卷(1879-80) “Jocoseria” (1883) “Ferstah's Fancies” (1884)。

後ち又“Parleyings with certain People of Importance” (1887)及び“Asolando” (1889)の二篇を作し、同八十九年伊太利に没し、齡七十八。

晩年の作中『アンランパー』は二十五年にもせし“Dramatis Personae” 以来の名作と稱せらる。總じてこの期の作には異様の無韻律語を用ひ、普通の話説體と劇詩の獨白體とを相交へたり。この獨白體はブラウニングが終生棄てざりし筆致なり。

ブラウニングが作の是非は今も尙ほ全く確定するに至らず、况んや當年に於てをや。其の中年以後、二三の聰明なる批評家は、彼れが作の美を看取せりしが、多數の讀者は蕪、雜、粗、笨、險、晦、含糊等の非難を挿みて、一概に彼れの作を斥けたりき。或は附和して褒稱せし輩あるも、只漠然と其の清新の致を認めしのみ、何れの個處に眞

個の妙あるかを明知せざりしが故に、世間多數の嘲罵、非難(就中大學出身者の劇しき攻撃)に對しては作者を回護するの辭を知らざりしなり。所詮、當時のブラウニング黨が勢力はいと微弱にして、嘗に世間に向ひて十分にブラウニングを推擧する能はざりしのみならず、自家はた其の妙を會得する能はざりしなり。然れども彼れが作も追々に出で、十年、二十年を経過するにつれて、世間の非難も流石に舊の如く頑ならず、又其の景仰者も漸く其の所信を固め、文壇の一隅に所謂ブラウニングカネリス社を起し、一千八百八十一年には、公然**ブラウニング研究會**といふを組織し、入會者には其の趣意書を交附して賛成の意を表せしめ、且つブラウニングが特殊の辭句、譬喩、等を解するが爲めに『ブラウニング辭典』を編するに至りぬ。崇拜者の運動斯の如くなりしかば、ブラウニングを攢斥する輩更に起ちて反對運動を試み、こゝに再び批評海の一大波瀾を捲き起しき。さもあれ、今這般の愛憎を脱し、虚心にして彼れが作を觀るに、彼れは圓滿の詩人とは稱すべからざるも、偉大の詩人たることは争ふべからず、其の缺點は其の詩の外形にありて、其の内容に存せざればなり。

論者曰はく、新詩人中の新詩人たりシテラウニクスの如き作家には、多少の破格も許さるべからず、時尙に先だてる思想は、時尙の言語のみをもて表しがたければなり。其の晦澁を以て難ぜらるゝも止むを得んや。カーライルが散文も、嘗て晦澁の譏を得たり、散文既に然り、况んやカーライルよりも更に幾歩をか進めたる新思想、新感情を新詩の詩歌に表はすの場合をやと。是れ今のプラウニクスの黨の所論の要たり。然るに、他の論者は曰はく、所謂新詩人は平順の語を以てしては其の情思を表現する能はざるか。詞意の險晦は技の足らざるに因するにはあらざるか。テニソンが或作の如きは、雅馴穩健の詞致をもてして能く時尙に先だてる感想を歌へるならずや。所謂新詩人は、何故に通常事を歌ふ場合にだに晦澁險怪なる語を用ひざるべからざるか、云々。是れ非プラウニクスの派の今尙主張する所なり。よしとするものは缺點にだに私し、難ずるものはひとへに其の短を擧げて其の長を蔽はんとす。世の論客が是非は概してかくの如し、よく其の兩端を叩かん者ひとり能く事物の真相を知らん。

按ずるに、新思想を抱くものゝ世に之れを傳へんとするや、ひたすら言はんとする

に急にして語を擇ぶに遑なく、勢ひ含糊不明の章をなすこと多し。必しも、新想を表白せん爲には新辭を要すと自識して後に然るにはあらじ、論者が此の故に其の技の不熟を非す、當を得たりといふべし、而も新詩人の作に遇ふや、毎に技の不熟を咎め、其の想の美を棄却せんか、批評家の任務何の邊にか存する。抑も批評家は、一面、讀書社會の側に立ちて、作者に對して適當なる注意と箴戒と奨勵とを與ふると共に、一面、作者の側に立ちて、世間の爲に新聲を通釋し、懇に作意の足らざるを補ひ、將さに來らんとする新思想、新信仰、新希望の光明を傳へざるべからず。此の約束に外れたらんものは批評の一大要義を忘れたるものなり。畢竟、プラウニクスが是非の由來は、テニソンとの對照に基く所多し、テニソンが典雅渾成の筆と相比して、其の澁晦の一層きはだちて見られたりしに因る。又其の格外に賞揚せられしは其の思想のテニソンのに比して遙に高遠なりしと同時に、テニソンに對する社會の歡待のあまりに甚しかりし反動なり。いづれにもせよ、プラウニクスが運命は彼のバアンズ、キーツ若しくはウヰョヰオス、シェラーに比すればむしろ幸ひなりきといはざるを得ず、彼れは、其の存生中に十二分の景仰を得たればなり。以下少しく